都城市文化財調査報告書　第29集

Ni　ta　moto　－Site
ニ　タ　元　遺　跡

1 9 9 4

都 城 市 教 育 委 員 会

序

都城市文化財調査報告書第29集をここに刊行いたします。

本書は大規模小売り店舗（株式会社ニシムタ）建設に伴い実施した、都城市志比田町に所在するニタ元遺跡の発掘調査の成果をまとめた調査報告書であります。

遺跡からは、石帯・墨書土器をはじめとして、縄文時代から近代にかけての貴重な遺物および各時代の遺構が出土しており、本資料が歴史の教材や学術研究資料として活用されることを願ってやみません。

調査にあたり（株）ニシムタ様には、文化財への御理解・御協力を賜わり、心より謝意を表するものであります。

また、調査計画・実施から報告書作成にいたるまで、御尽力いただきました都城市文化財専門委員：重永卓爾氏ならびに、発掘作業に従事していただいた作業員の皆様に、心から感謝の意を表します。

平成６年３月

都城市教育委員会

教育長　　隈 元 幸 美

例　言

1．本書は大規模小売店舗（株式会社ニシムタ）造成に伴う、ニタ元遺跡の発掘調査報告書である。

2．ニタ元遺跡は都城市志比田町３７４１番地１７ほか、に所在する。

3．調査実施面積は４、６７１㎡である。

4．発掘調査は都城市教育委員会が実施し、期間は1993年7月12日より開始し、同10月18日をもって終了した。

5．報告書に使用した方位は、座標北G.N（国土調査法第Ⅱ座標系）である。

6．現地での遺構分布図作成において、（株）テクノシステムの遺跡調査システム"ＳＩＴＥⅡ"を使用した。

7．空中写真撮影は、株式会社スカイサーベイに委託した。

8．本書に掲載の遺構・遺物の実測・製図・写真撮影は、重永・下田代がそれぞれ分担して行ない、遺構実測で、阿久根トシエ・吉村則子の助力を得た。遺物の室内撮影は矢部が担当した。

9．本書の執筆・編集は重永・下田代が担当した。

10. 報告書に使用した遺構の略記号は、以下のとおりである。
ＮＴＭ：ニタ元遺跡　ＳＡ：竪穴状遺構（住居跡を含む）　ＳＢ：掘立柱建物跡
ＳＣ：土坑　ＳＤ（ｓｄ）：溝状遺構　ＳＦ：道路状遺構　ＳＩ：石組遺構
ＳＬ：柵列　ＳＰ：柱穴　ＳＳ：集石

11. 紙面スペースの都合上、遺物観察表の調整痕・法量は省略した。実測図を参照。

12. 出土遺物・記録類は、都城市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　序説
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査の組織 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2
第Ⅲ章　調査報告
1．調査概要 …… 3
2．層序 …… 4
3．A・B区の遺構と遺物 …… 7
4．C区の遺構と遺物 …… 26
5．D区の遺構と遺物 …… 31
6．ニタ元遺跡出土の墨書土器 …… 46
第Ⅳ章　小結
1．A・B区の考察 …… 47
2．C区の考察 …… 47
3．D区の考察 …… 47
4．まとめ …… 48
5．文献・史料からみたニタ元遺跡 …… 49
6．あとがき …… 49

挿　図　目　次

第1図　ニタ元遺跡位置図(1/10000) …… 2
第2図　ニタ元遺跡調査区域図(1/1500) …… 3
第3図　遺構分布および平面図(1/500) …… 5
第4図　SA－1・2平面・断面図および同遺構内出土遺物実測図 …… 8
第5図　SA－3平面・断面図および同遺構内遺物出土状況 …… 9
第6図　SA－3内出土遺物実測図 …… 10
第7図　SA－4平面・断面図 …… 11
第8図　SA－4内出土遺物実測図 …… 12
第9図　SA－5平面・断面図 …… 13
第10図　SA－5内出土遺物実測図 …… 14
第11図　SB－1平面・断面図および同遺構内出土遺物実測図 …… 14
第12図　SB－2・3平面・断面図 …… 15
第13図　SC－4・6・9～11・12・13 平面・断面図 …… 16
第14図　SD－1土層断面図および同遺構内出土遺物実測図 …… 17
第15図　sd－1土層断面図および同遺構内出土遺物実測図 …… 18
第16図　sd－2土層断面図および同遺構内出土遺物実測図 …… 18
第17図　A・B区包含層内出土遺物実測図(1) …… 19
第18図　A・B区包含層内出土遺物実測図(2) …… 20
第19図　A・B区包含層内出土遺物実測図(3) …… 21
第20図　A・B区包含層内出土遺物実測図(4) …… 22
第21図　SD－2土層断面図(1) …… 26
第22図　SD－2土層断面図(2) …… 27
第23図　SD－2土層断面図(3) …… 28
第24図　SD－2、SF－1・2・3土層断面図 …… 28
第25図　SD－2橋脚部(J－12区)平面・断面図 …… 29
第26図　SD－2内出土遺物実測図 …… 30
第27図　D区東壁土層断面図 …… 32
第28図　SB－4、SC－14、SF－10・11、SL－1実測図およびSB－4内出土遺物実測図 …… 33

第 29 図　ＳＣ－ 14 および出土遺物実測図 …… 33
第 30 図　ＳＤ－３土層断面図 …… 34
第 31 図　ＳＤ－３内出土遺物実測図（１） …… 34
第 32 図　ＳＤ－３内出土遺物実測図（２） …… 35
第 33 図　ＳＩ－１・２およびＳＩ－１内出土遺物実測図 …… 36
第 34 図　Ｄ区北壁（ＳＳ－１）土層断面図およびＳＳ－１内出土遺物実測図 …… 37
第 35 図　Ｄ区包含層内出土遺物実測図（１） …… 37
第 36 図　Ｄ区包含層内出土遺物実測図（２） …… 38
第 37 図　Ｄ区包含層内出土遺物実測図（３） …… 39
第 38 図　Ｄ区包含層内出土遺物実測図（４） …… 40
第 39 図　Ｄ区包含層内出土遺物実測図（５） …… 41
第 40 図　ニタ元遺跡出土墨書土器実測図 …… 46
第 41 図　中世の地業範囲想定図（1/1500） …… 48
第 42 図　幕末都城之図 …… 50
第 43 図　現在のニタ元遺跡周辺図（平成６年） …… 50

表　目　次

表１　Ａ・Ｂ区検出道路状遺構一覧表 …… 7
表２　Ａ・Ｂ区検出土坑一覧表 …… 16
表３　Ａ・Ｂ区出土遺物観察表（１） …… 23
表４　Ａ・Ｂ区出土遺物観察表（２） …… 24
表５　Ａ・Ｂ区出土遺物観察表（３） …… 25
表６　Ｃ区出土遺物観察表 …… 30
表７　Ｄ区出土遺物観察表（１） …… 42
表８　Ｄ区出土遺物観察表（２） …… 43
表９　Ｄ区出土遺物観察表（３） …… 44
表 10　ニタ元遺跡出土土錘一覧表 …… 45
表 11　Ｄ区出土遺物観察表（４） …… 45
表 12　ニタ元遺跡出土墨書土器一覧表 …… 46

図　版　目　次

図版１　調査前遺跡遠景　遺跡遠景 …… 51
図版２　調査区全景　Ａ・Ｂ・Ｃ区全景　ＳＡ－４・５、ＳＤ－１　ＳＡ－４
　　Ｄ区全景　ＳＩ－１ …… 52
図版３　ＳＢ－２　ＳＤ－２掘り下げ風景　ＳＤ－２（北から）　ＳＤ－南側断面
　　ＳＤ－２中央断面　Ｄ区土層断面（地業跡？） …… 53
図版４　縄文時代（土器）　弥生時代（土器）　古墳時代（壺）　古墳時代（甕）　古墳時代（甕）
　　古墳時代（甕） …… 54
図版５　古墳時代（高坏）　古墳時代（ミニチュア）　古代（須恵器）　古代（土師器）
　　古代（黒色土器）　古代（石製銙具） …… 55
図版６　古代（転用硯）　古代・中世（陶磁器）　中世（銭）　土製品（土錘）　土製品（紡錘車）
　　鉄製品（鎌・刀子）
図版７　ニタ元遺跡出土墨書土器（赤外線撮影）

Ⅰ．序説

1. 調査に至る経緯

ニタ元遺跡は、都城市教育委員会が作成した遺跡詳細分布地図では周知の包蔵地から外れていたが、平成５年４月、大規模小売店舗（株式会社ニシムタ）建設に伴う造成工事に先立ち、当該地が埋蔵文化財包蔵地かどうか工事主体者より試掘確認調査実施の依頼を受けた為、平成５年 5 月 10 日～13 日の４日間にわたり、都城市教育委員会が試掘調査を実施した。

試掘は２×２ｍのトレンチを 22 カ所設定し行なわれ、その結果、縄文時代～中世の遺物および中世と思われる遺構を確認し、二段目の平坦面はすでにアカホヤ層下の粘土層まで削平をうけており、遺物・遺構は確認されなかった。以上の試掘結果から、最上段の平坦面と二段目の平坦面の先端部を中心とした区域の発掘調査が必要ということになり、同社と協議し、記録保存の為、遺跡発掘調査を行なうことになった。調査は、株式会社ニシムタより委託を受けた都城市教育委員会の重永が調査を担当することになった。

調査は、平成５年７月 12 日に開始し、同年 10 月 18 日までに作業のすべてを完了した。

2. 調査の組織

調査主体	都城市教育委員会
調査責任者	都城市教育長　　隈元　幸美
調査総括	都城市文化課　課　　長　松山　充
調査事務局	同　　課長補佐　遠矢　昭夫
	同　　係　　長　海田　茂
	同　　主　　事　矢部　喜多夫
	同　　主　　事　田部井　寿代
調査担当	都城市文化財専門員　重永　卓爾
	調査補助員　下田代　清海

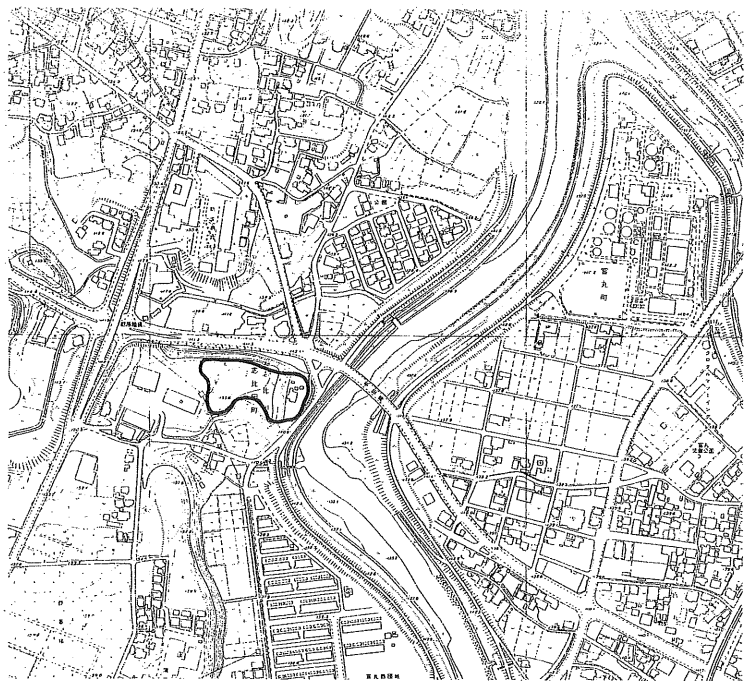
発掘作業員　茶園国春・児玉トシ子・坊地トミ・西ナツエ・榎木ハナ
中島イツエ・皆吉ハツミ・中島ミエ・柿木スミ子・蔵園スズ子
盛田ユミ・柿木チエ子・福盛ヤエ子・堀之内ミツ子・南崎ミツ
皆吉昭一郎・福丸貞行・鴇　松雄・松永浩一・樋渡正之
東前利雄・荒ヶ田安夫・阿久根トシエ・吉村則子

Ⅱ．遺跡の位置と環境

ニタ元遺跡は宮崎県都城市志比田町 3,741-17 外（字、ニタ元）に所在する。都城市は九州の東南に位置し、市域は、東の鰐塚山系や西側を南北に地塁状に連なる瓶台山・白鹿岳などの山地に囲繞される都城盆地の中央部を占め、行政区分では宮崎県の西南部で、鹿児島県との県境に接する。

当遺跡は、市域の南部に位置し、大淀川と支流の年見川が北流合流する地点から、南西方向へ約 500 mの大淀川西岸の標高約 150 mの台地上に立地しており、河川流域の氾濫原面との比高差は大略 15 mである。当該地の現況は竹林が大半を占める山林である。

周辺の遺跡として、当遺跡の南方、大淀川の支流である梅北川の東側に広がる、通称・横尾原シラス台地の南端に「横尾原遺跡」があり、奈良時代の須恵器製蔵骨器や縄文時代晩期前半の遺構・遺物が出土している。また、台地の北端部傾斜面には「黒土遺跡」があり、縄文時代晩期から弥生時代、古代・中世の遺物が出土し、弥生時代および中世の遺構が確認されており、とりわけ同遺跡から出土した、すり切り技法による穿孔が施された石包丁は、歴史的に重要な意味をもつ遺物である。市街地の南部、大淀川・梅北川が合流する地点の南側に広がる台地の東縁、当遺跡から南方約 2.5 kmには「大岩田村ノ前遺跡」があり、縄文時代後期～弥生時代後期・古墳時代・古代・中世・近世の遺物が出土し、縄文時代・弥生時代・中世・近世の遺構が検出されている。また、南方 650 mには、都城古墳３・４号が所在する。



第１図　ニタ元遺跡位置図　(1/10000)

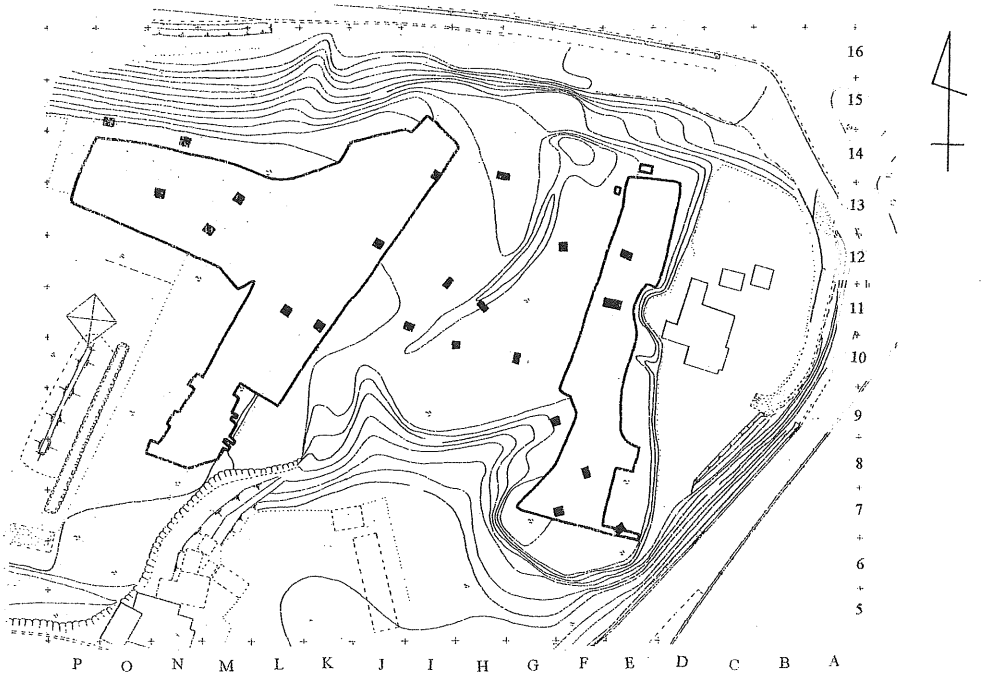
Ⅲ. 調査報告

1. 調査概要

調査はグリッド法に依り、10 × 10 mのメッシュに区画し、東西方向をX軸に、Y軸は磁北線に一致させ、南東端を基点にして、X軸にアルファベット、Y軸に算用数字ををもって標記した。また東西に分かれた調査区域を、調査工程上の都合により４つのブロックに分け、西側調査区域の上段部南側半分をA区、北側半分をB区、下段部をC区とし、東側調査区域をD区とした。

当該地は大半を竹林が占める山林であり、A・B・C区とD区間には距離と比高差があったこともあり、調査は困難なものになるものと予想された。調査はまず竹林を伐採することから始まり、伐採終了後に重機を導入し、表土の排土作業を行い、続いて手掘り作業に入った。予想はしていたが、竹根の影響が著しく作業は容易なものではなかった。

調査の結果、遺構としては、竪穴状遺構（住居跡を含む）・掘立柱建物跡・溝状遺構（小溝および大溝）・道路状遺構・石組遺構・土坑が確認された。中でも、大溝は幅約 10 m（推定復元）・深さ約 10 m（推定復元）にもおよぶ都城市内では最大級の大堀であった。また遺物としては、縄文時代早期～晩期・弥生時代後期の土器、古墳時代の土師器・須恵器・ミニチュア土器、平安時代の土師器・黒色土器・墨書土器・須恵器・石銙（丸鞆）・転用硯・土錘・紡錘車・越州窯系青磁・舶載陶磁器、中世の土師器・舶載陶磁器・国産陶磁器、近世の国産陶磁器が出土した。また、石鏃・敲石・磨石・剥片などの石器類や鎌状鉄製品・刀子・釘といった金属製品も出土した。石銙の出土は市内では並木添遺跡に続いて２例目である。



第2図　ニタ元遺跡調査区域図　(1/1500)　　■：試掘トレンチ

2. 層 序

当遺跡の地形は東西方向に段々で傾斜しており、C・D区にそれが著しい。またD区は中世に大規模な造成（地業か？）がされており、それは南になる程基盤層傾斜を埋める形で造成されている。以下が、ニタ元遺跡における基本層序である。尚、遺物包含層である第Ⅳ層は、一部で、３つの層に分層可能であったが、新旧にわたる造成および、現代の耕作・竹根等の影響によって、全体に土層の残存状態が悪く、明確な分層が不可能であり、層間の齟齬をふせぐ為に第Ⅳ層に統一した。

第Ⅰ層：灰褐色砂質土層（耕作や木根・竹根による分解土）

第Ⅱ層：オリーブ黒～暗褐色砂質シルト層　耕作土（灰白色軽石を含み、箇所によっては竹根の影響により土壌分解がすすんでいる）

第Ⅲ層：灰白色降下軽石層〈桜島文明降下軽石層〉　文明８年（1476 年）の桜島に起源を有する降下軽石である。（本遺跡において自然堆積は部分的に残存していた）　（通称：白ボラ）

第Ⅳ層：暗黄色軽石混黒色シルト層　（遺物包含層）

第Ⅴ層：暗黄色軽石（多量）混褐色シルト層　（漸移層）

第Ⅵ層：暗黄色降下軽石層〈霧島御池降下軽石層〉　約 4200 年前、霧島御池火口噴出の軽石である。　（通称：御池ボラ）

第Ⅶ層：漆黒粘質腐植シルト層

第Ⅷ層：黄橙色ガラス質火山灰層〈鬼界アカホヤ火山灰層〉　約 6300 年前、鬼界カルデラ起源のテフラである。　（通称：アカホヤ）

第Ⅸ層：黒色弱粘質細粒腐植土層

第Ⅹ層：褐色土層

第ⅩⅠ層：明褐色土層

第ⅩⅡ層：赤褐色土層（白色鉱物多量混入）

第ⅩⅢ層：明黄褐色砂質土層

第ⅩⅣ層：にぶい黄燈色砂質土（３～４㎝大の白色軽石多量混入）

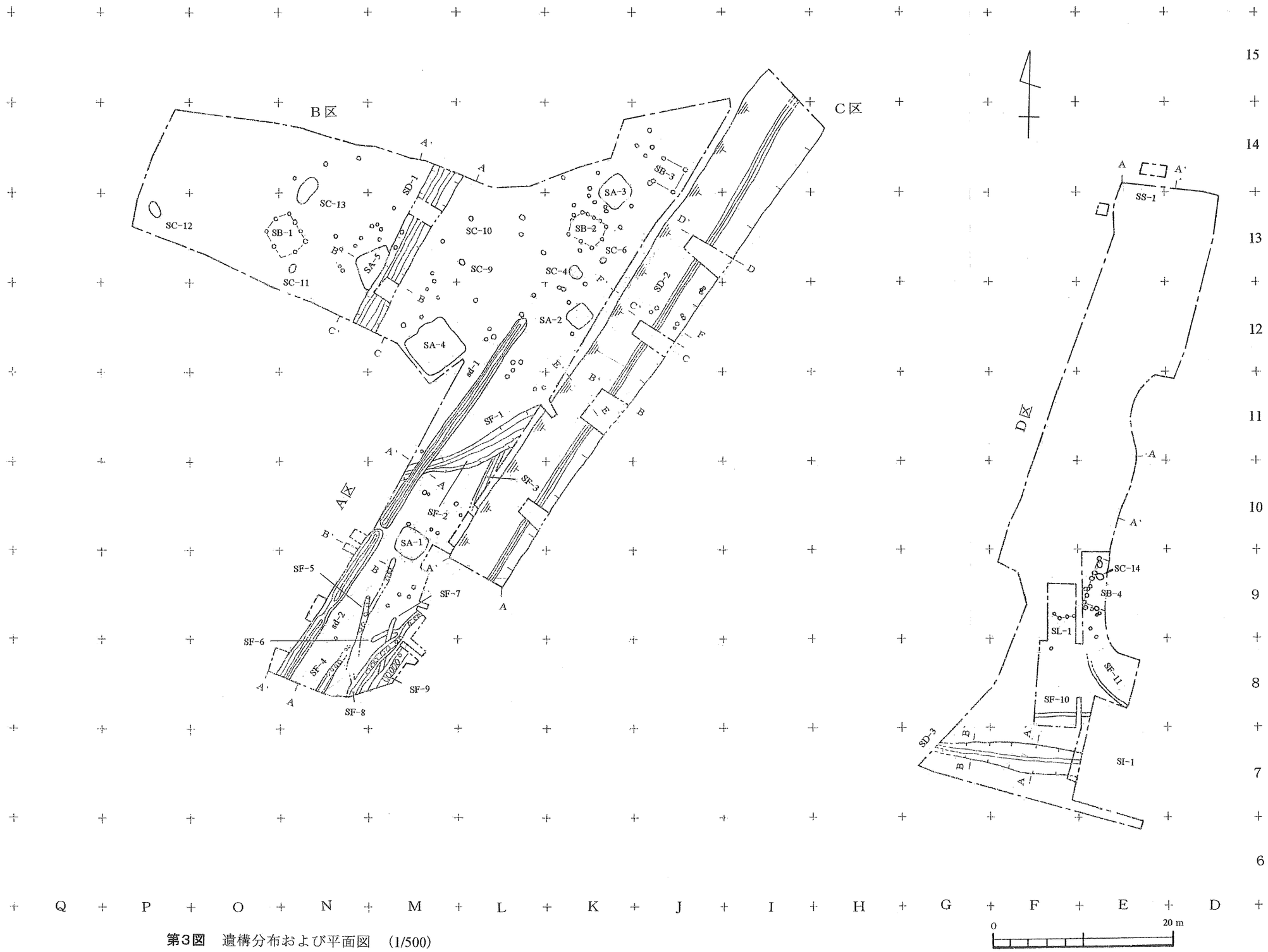
第ⅩⅤ層：明黄褐色砂質土・砂・シラスの混土層

第ⅩⅥ層：淡黄色砂質土・砂礫の混土層

第ⅩⅦ層：灰白色軽石・砂礫・シラスの混土層

第ⅩⅧ層：にぶい赤燈色シラス層

第ⅩⅨ層：灰白色シラス層



第3図　遺構分布および平面図　(1/500)

3. A・B区の遺構と遺物

1）竪穴状遺構（SA －1～5）〈第4～10図〉　SA －1は、長辺3.05～3.47 m・短辺2.76m～2.90 m・検出面からの深さ0.10～0.15 mの台形プランを呈し、長軸方位はN－56°－Wである。大小2基の柱穴を配し、1つは主柱穴と思われ、共に深さ19.0 cmである。遺構内からの主な出土遺物として、土師器の壺・甕、ミニチュア土器が挙げられる。　SA －2は、長辺2.55 m・短辺2.20～2.25 m・検出面からの深さ0.20～0.23 mのやや台形プランを呈し、長軸方位はN－49°－E である。また遺構内周囲には、壁帯溝がめぐる。柱穴は検出されなかった。主な出土遺物として、土師器の壺・甕が挙げられる。　SA －3は、長辺3.08～3.22 m・短辺2.83～2.89 m・検出面からの深さ0.29～0.34 mのほぼ正方形プランを呈し、長軸方位はN－47°－E である。遺構内やや東南よりに土坑が検出され、周囲には壁帯溝がめぐる。土坑の規模は長軸0.90 m・短軸0.88 m・深さ7～11 cmのやや楕円形である。主な出土遺物として土師器の壺・甕・鉢、ミニチュア土器が挙げられる。　SA －4は、長辺5.25～5.33 m・短辺4.65～4.80 m・検出面からの深さ0.19～0.43 mの正方形プランを呈し、長軸方位はN－52°－Eである。4つの主柱穴を配し、床面は貼床が施されている。主柱穴の深さは、0.51 ～ 0.68 mである。また遺構内周囲には、壁帯溝と共に小ピット列がめぐっている。主な出土遺物として、土師器の壺・甕・高坏・鉢、石製品の砥石、石鏃が挙げられる。　SA －5は、長辺4.06 m・短辺3.85 m・検出面からの深さ0.21～0.26 mの平行四辺形プランを呈し、長軸方位はN－65°－E である。遺構東南部はSD－1に切られており、3基の主柱穴を検出した。主柱穴の深さは、0.11～0.15 mである。主な出土遺物として、土師器の甕・鉢・高坏・坩形、ミニチュア土器が挙げられる。

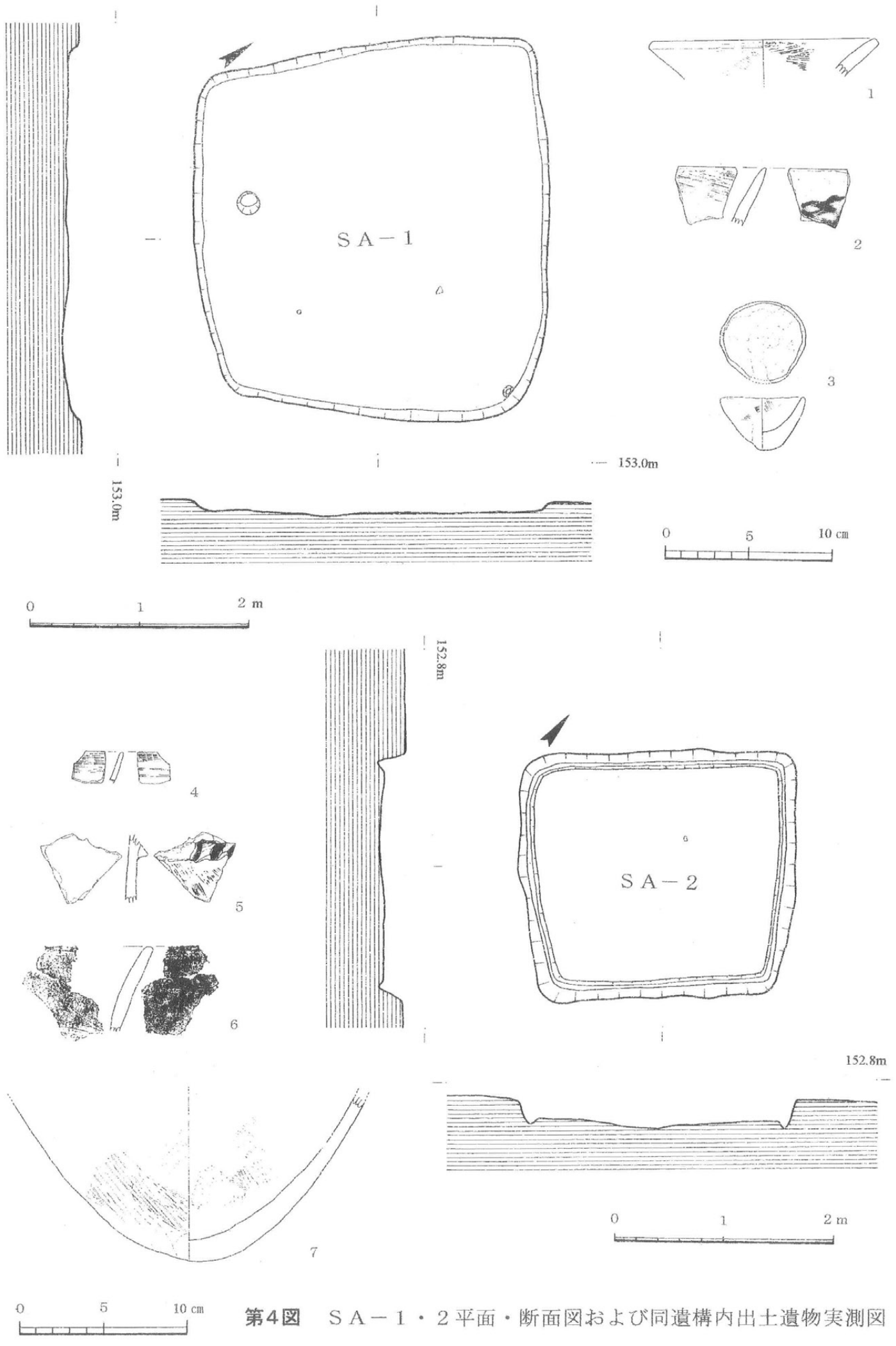
2）掘立柱建物跡（SB －1～3）〈第11～12図〉　SB －1は2間×3間で、柱穴の深さ0.12～ 0.34 mである。棟持柱をもつ事から、倉庫であると想定される。柱穴より、ミニチュア土器が出土した。　SB －2は2間×4間で、柱穴の深さ0.17～0.45 mである。SB －1と同じく倉庫と想定される。　SB －3は1間×1間で、柱穴の深さ0.36～0.45 mである。用途は不明。

3）道路状遺構（SF －1～9）〈第3図〉　9本の道路状遺構を検出し、内4本に底面に、凹面がみられた。出土遺物はなし。規模についての詳細は**表1**を参照されたい。紙面スペースの都合上、

表1　A・B区検出道路状遺構一覧表

遺構番号	グリッド名	上面幅(m)	底面幅(m)	深さ(m)	検出全長(m)	備考
SF－1	L-11, M-10・11	1.32～2.37	0.50～1.71	0.57	16.00	
SF－2	L-10・11, M-10	0.82～0.98	0.50～0.60	0.28	11.30	
SF－3	L-10・11	0.80	0.60	0.20	6.30	
SF－4	N-8	0.65	0.45	0.16	4.20	底面に円形の凹面あり
SF－5	M-9, N-8・9	0.52	0.40	0.10	15.10	底面に円形の凹面あり
SF－6	M-8・9	0.50	0.50		3.60	硬化面のみ
SF－7	M-8・9	0.40	0.40		6.80	硬化面のみ
SF－8	M-8・9, N-8	1.42	0.60	0.39	12.20	底面に円形の凹面あり
SF－9	M-8, N-8	1.80	1.10	0.74	5.40	底面に楕円形の凹面あり

※計測値はいずれも検出面基準である



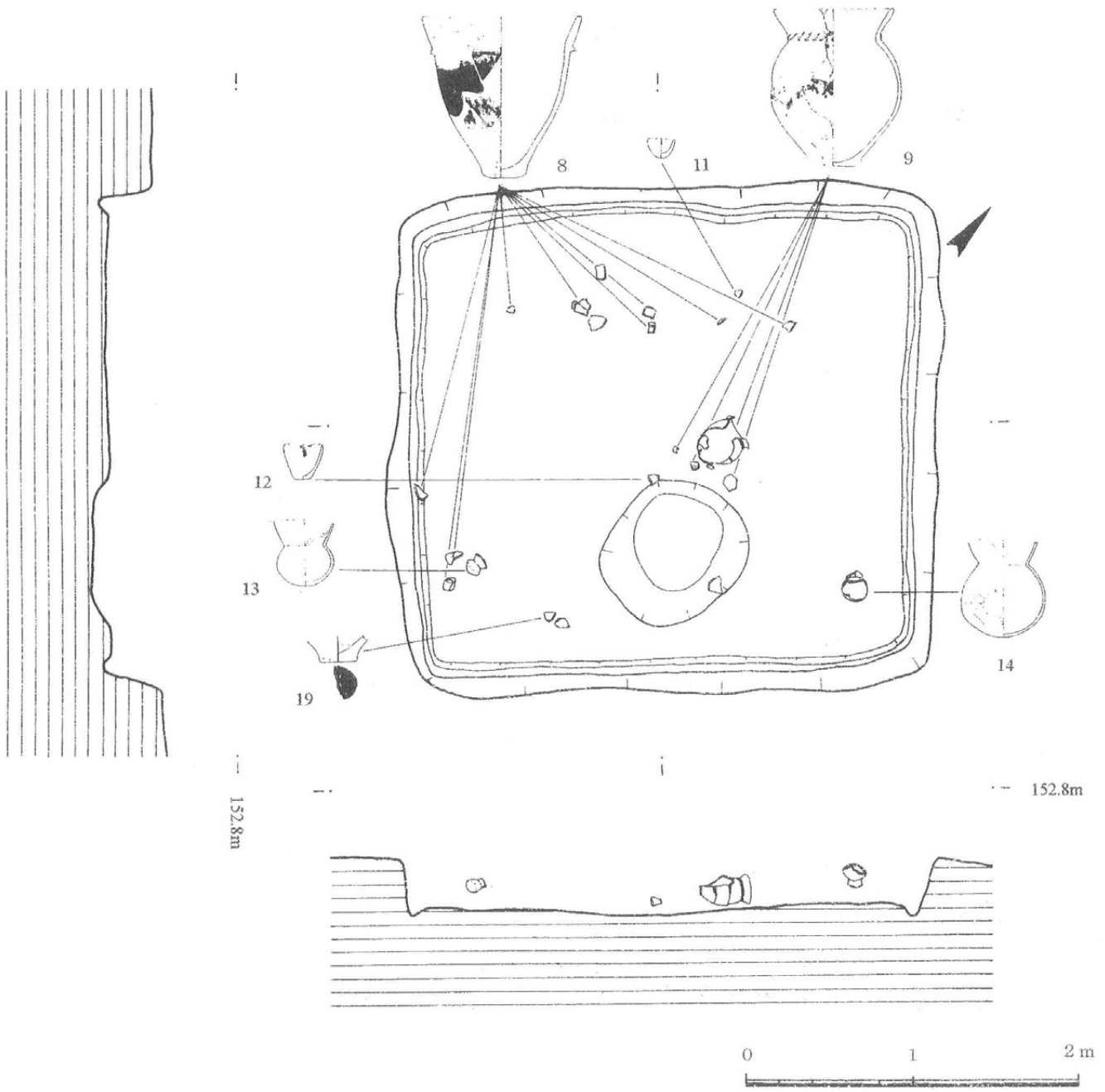
第4図　ＳＡ－１・２平面・断面図および同遺構内出土遺物実測図

詳細な平面図はやむを得ず省略した。

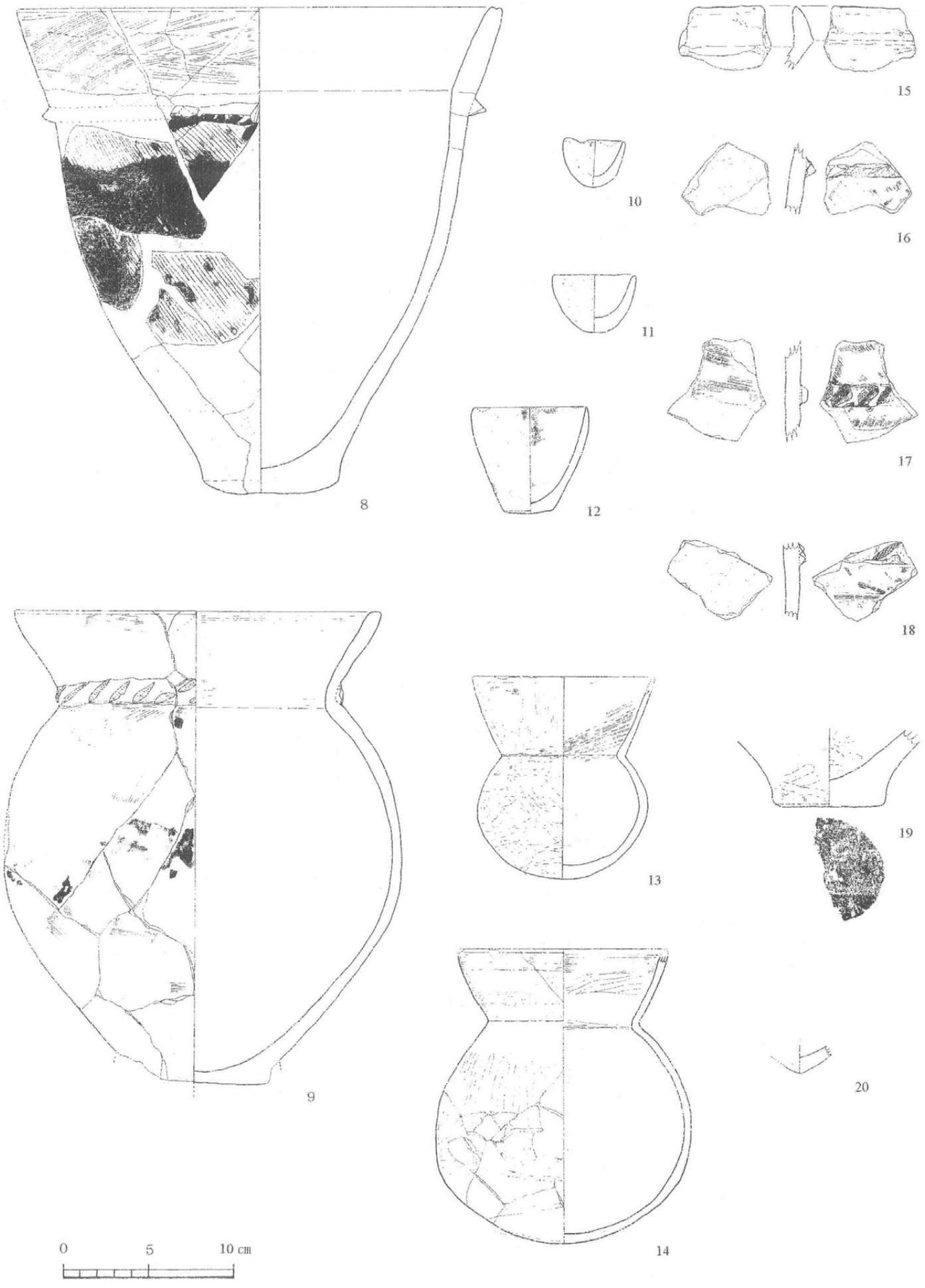
4）土坑（SC－1～13）〈第13図〉　土坑については、計13基検出したが、SC－1～3・5・7・8は埋土の状況および同一規格である事から、芋の貯蔵穴（現代）と判断し削除した。出土遺物はなし。規模についての詳細は**表2**を参照されたい。

5）溝状遺構（SD－1、sd－1・2）〈第3・14～16図〉　SD－1は検出全長20.0 m・上面幅2.63～3.55 m・底面幅0.90 m・深さ0.95～1.37 mで、走行方位はN－29°－Eである。主な出土遺物として、古墳時代の土師器の甕がある。　sd－1は、検出全長28.6 m・上面幅1.42 m・底面幅0.22 m・深さ0.95 mで走行方位はN－34°－Eである。主な出土遺物は、縄文土器の浅鉢と古墳時代のミニチュア土器である。

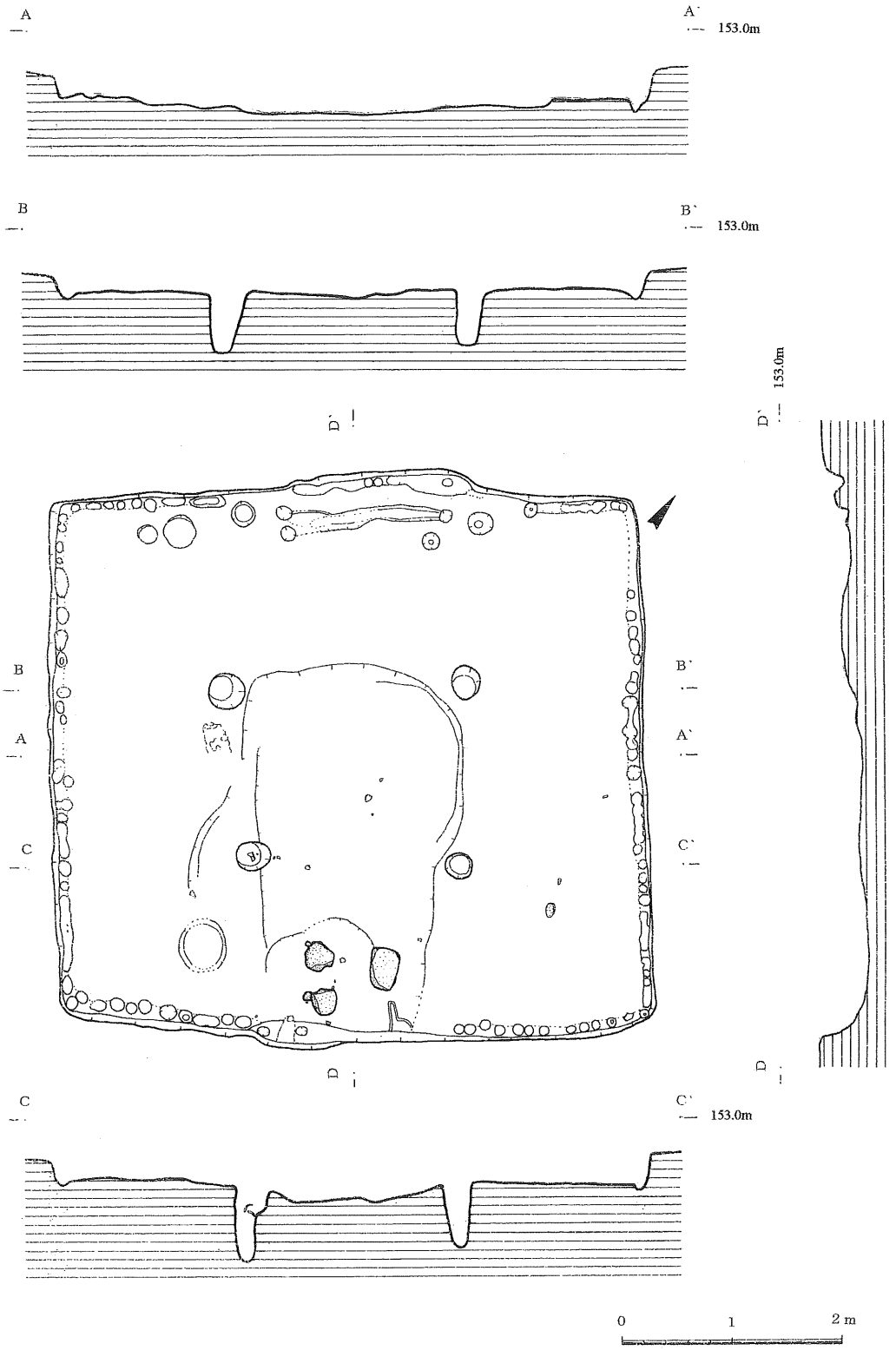
以上の遺構は、出土遺物および埋土の状況から、竪穴状遺構は古墳時代中期5世紀代と思われ、



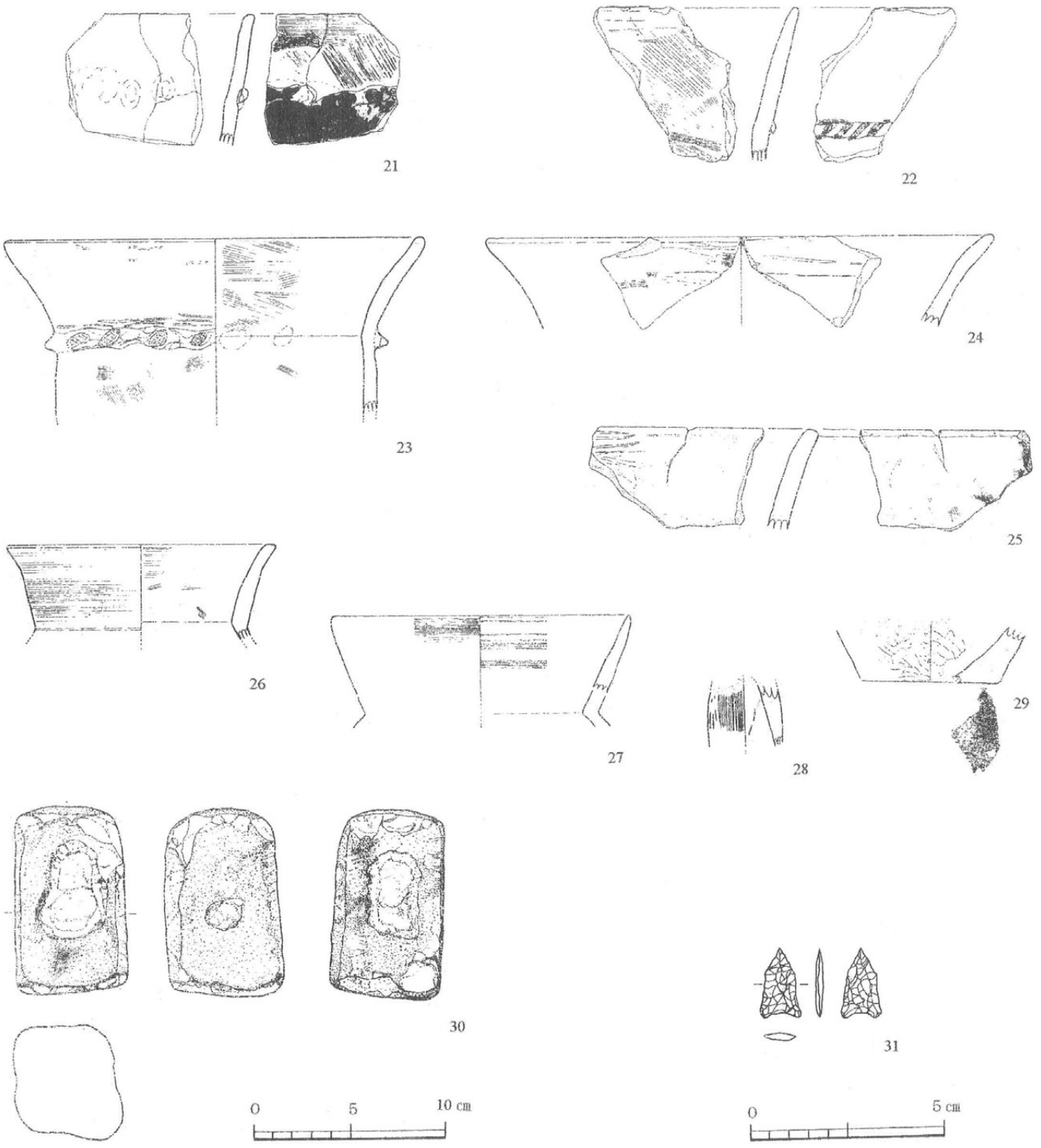
第5図　SA－3平面・断面図および同遺構内遺物出土状況



第6図　ＳＡ－３内出土遺物実測図



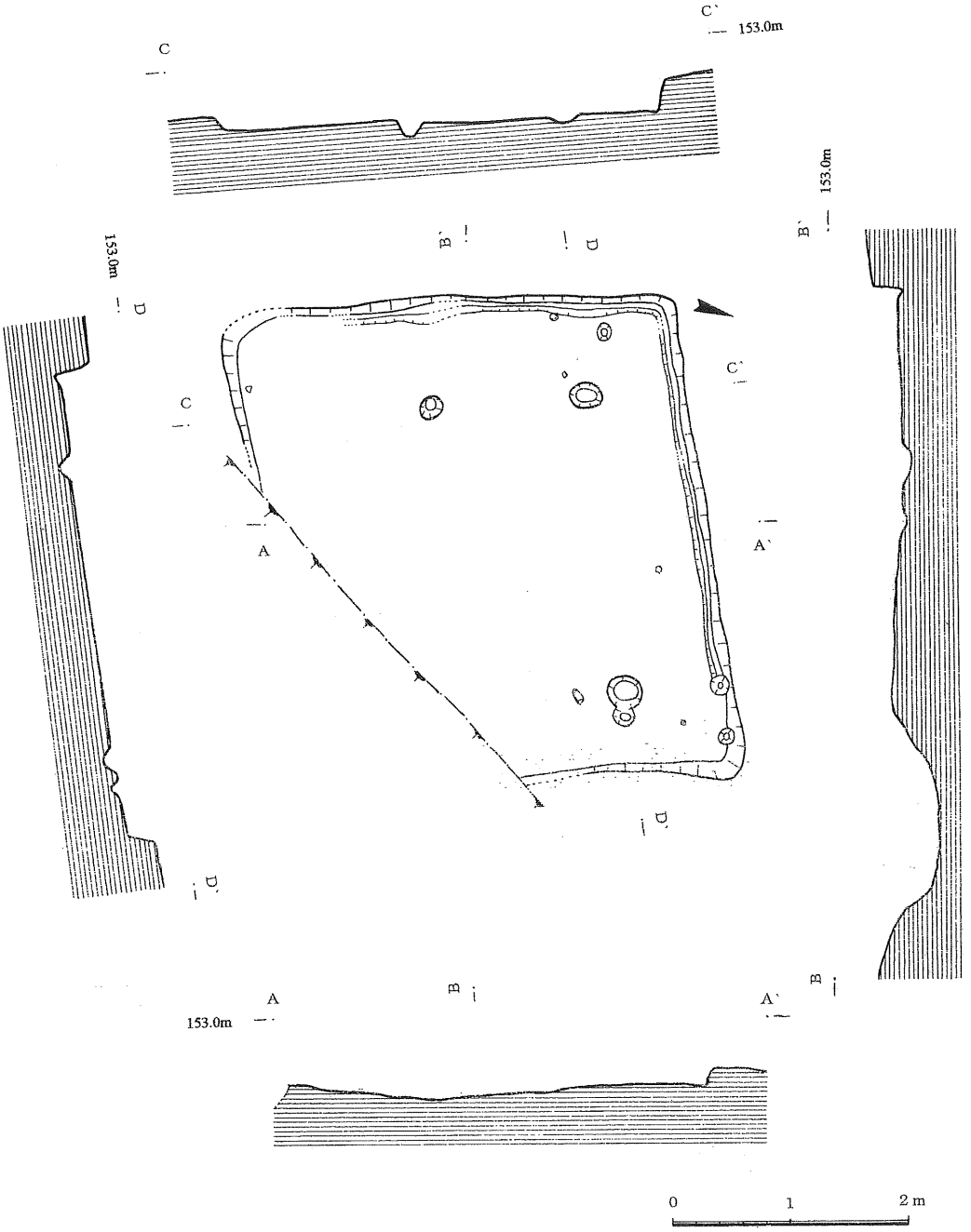
第7図　ＳＡ－４平面・断面図



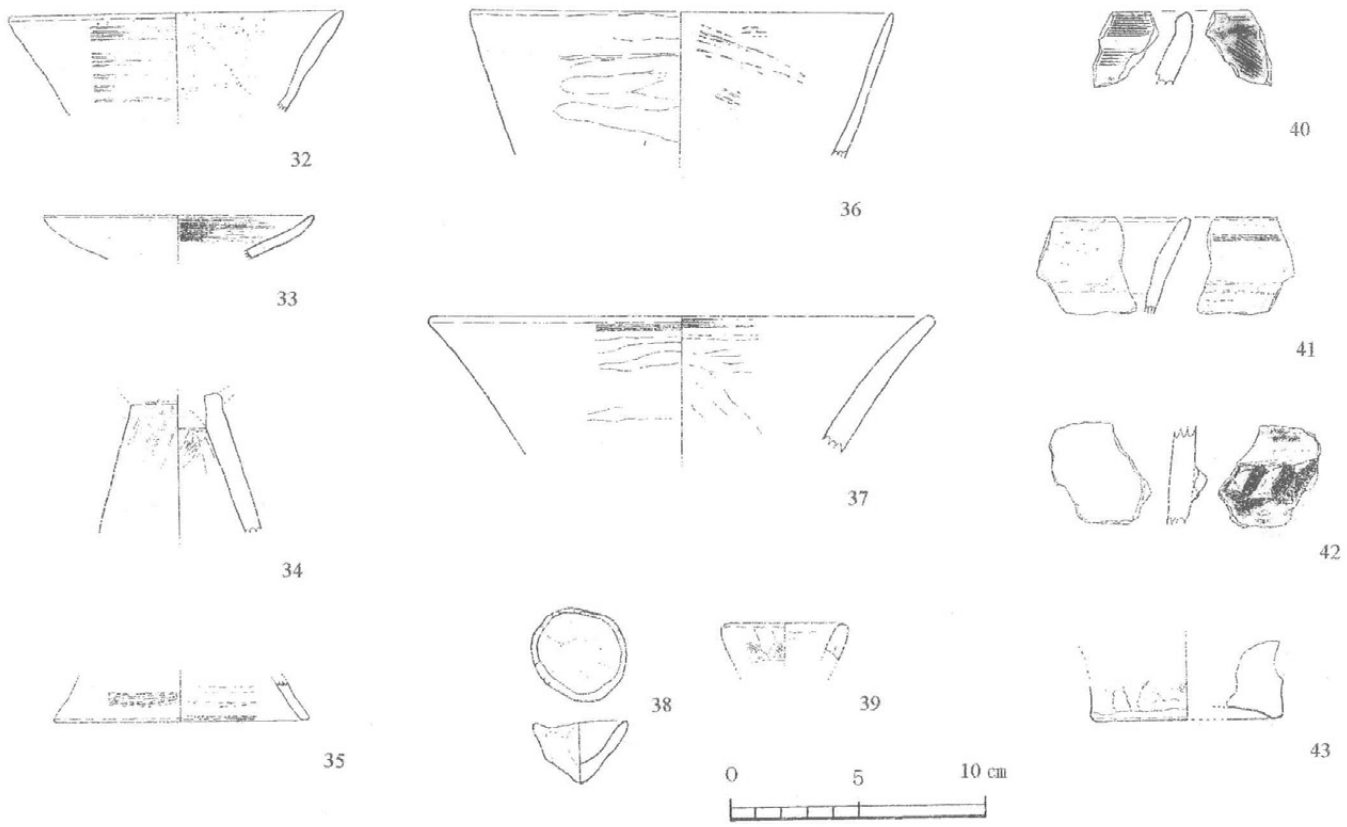
第8図　ＳＡ－４出土遺物実測図

掘立柱建物跡もほぼ同時期と想定される。土坑・溝状遺構・道路状遺構は中世であろうと仮定している。中でも溝状遺構は文明軽石の堆積状況からして、15 世紀後半以前と考えられる。

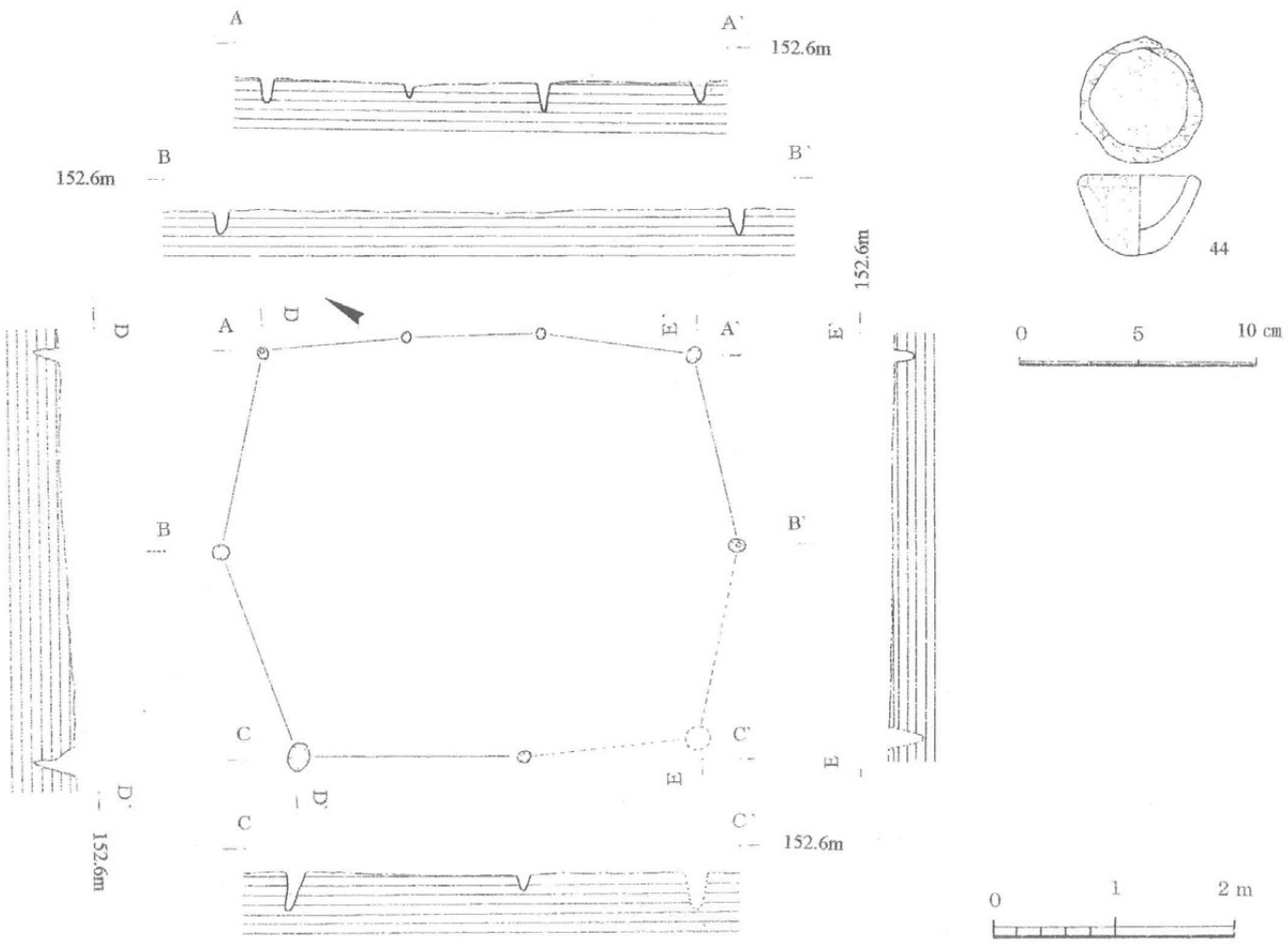
6）包含層内出土遺物〈第 17 ～ 20 図〉　A・B 区からは、後期から晩期にかけての縄文土器、弥生時代中期の土器、古墳時代の土師器・ミニチュア土器、須恵器、中世の青磁・白磁・褐釉陶器、古代と思われる鍛冶関連遺物、近世の火縄銃の弾、その他、石器や鉄製品が出土した。なお紙面スペースの都合上、個々の遺物の詳細なデータは、遺物観察表を参考にしてもらいたい。



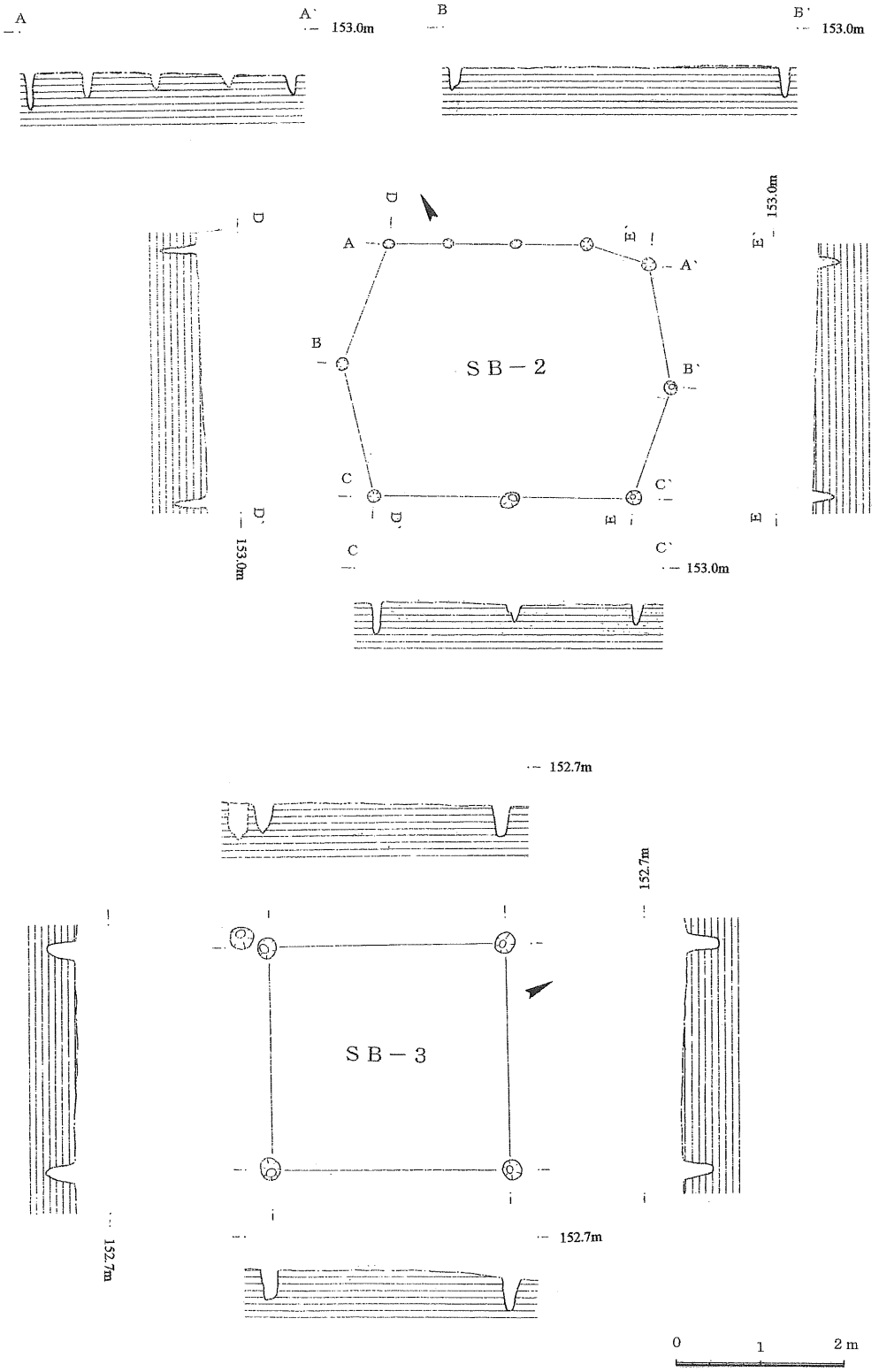
第9図　ＳＡ－５平面・断面図



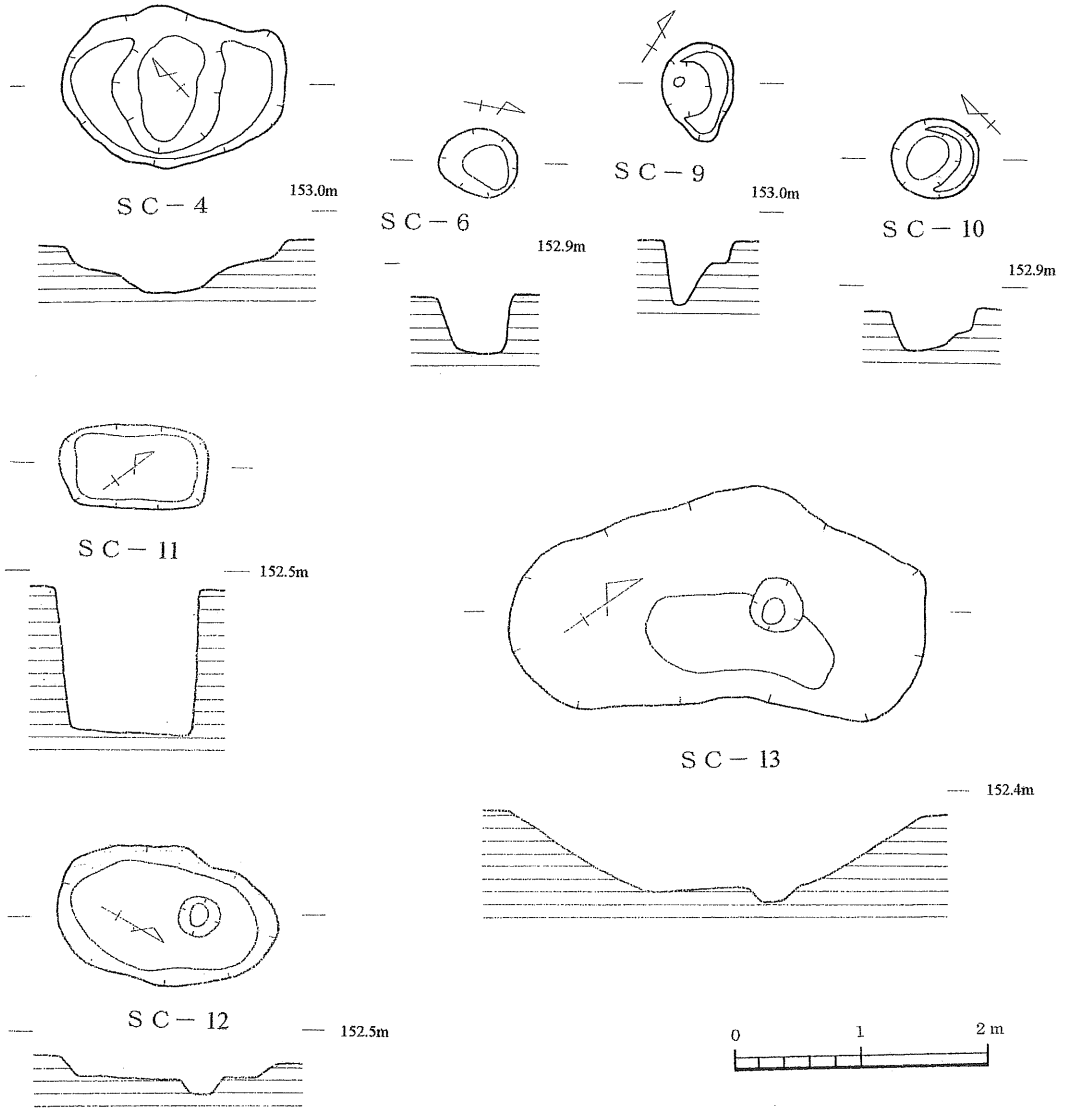
第10図　ＳＡ－５内出土遺物実測図



第11図　ＳＢ－１平面・断面図および同遺構内出土遺物実測図



第12図　ＳＢ－２・３平面・断面図

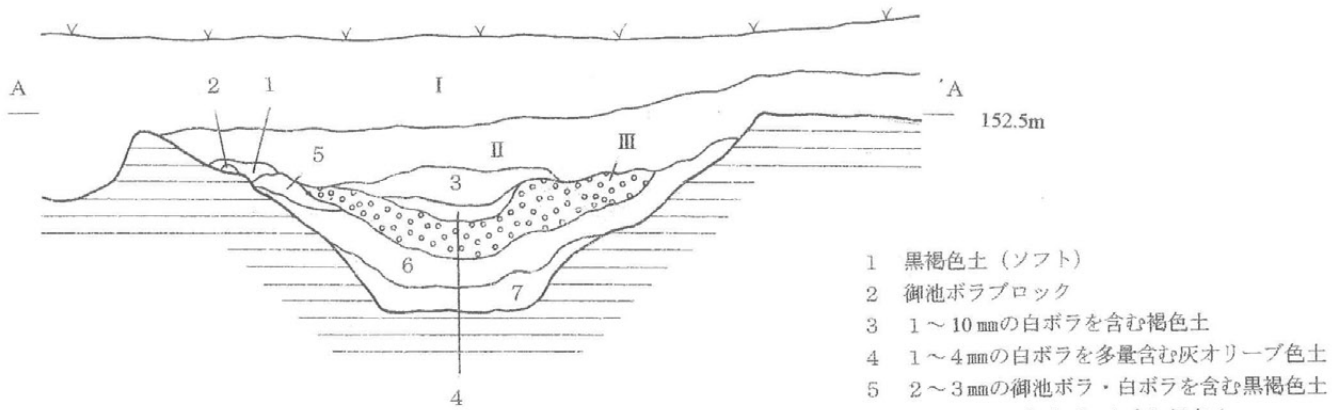


第13図　SC－4・6・9～11・12・13 平面・断面図

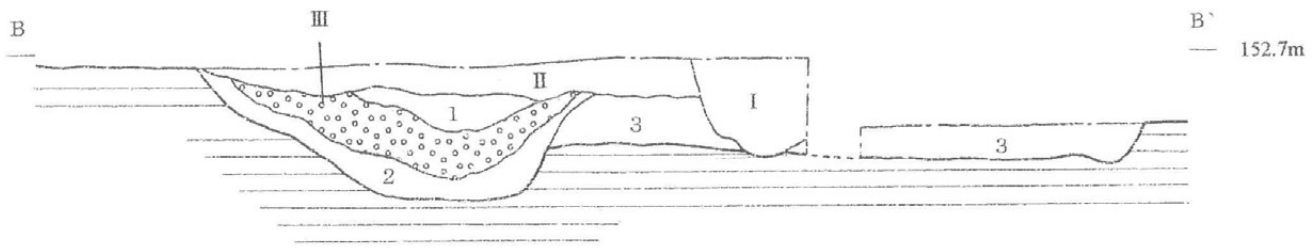
表2　A・B 区検出土坑一覧表

遺構番号	グリッド名	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
SC－4	K－13	1.80	1.32	0.42	
SC－6	K－13	0.66	0.54	0.48	
SC－9	L－13	0.78	0.57	0.54	
SC－10	L－13	0.69	0.63	0.33	
SC－11	N－13	1.17	0.66	1.20	土壙墓？
SC－12	P－13	1.74	1.11	0.33	底面にピット
SC－13	N－13・14	3.27	1.68	0.72	底面にピット

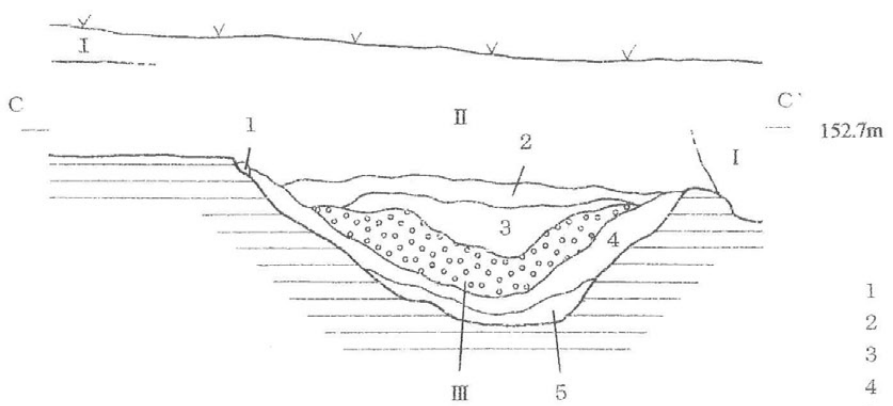
※計測値はいずれも検出面基準である



1　黒褐色土（ソフト）
2　御池ボラブロック
3　1～10㎜の白ボラを含む褐色土
4　1～4㎜の白ボラを多量含む灰オリーブ色土
5　2～3㎜の御池ボラ・白ボラを含む黒褐色土
6　3～10㎜の御池ボラを含む褐色土
7　1～10㎜の御池ボラを多量含む黄褐色土

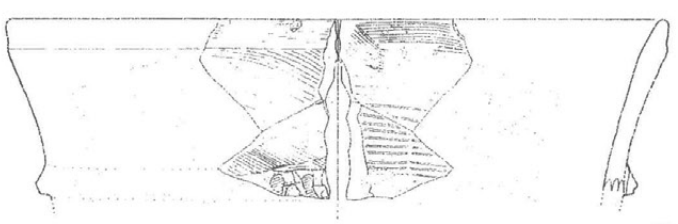


1　1～10㎜の白ボラを多量含む灰褐色土
2　1～5㎜の御池ボラを少量含む褐色土
3　2～6㎜の御池ボラを含む褐色土

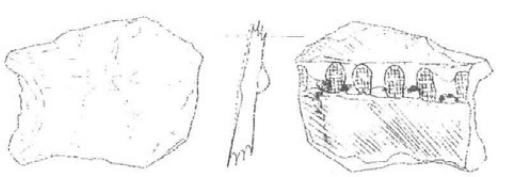


1　御池ボラブロック
2　3～5㎜の白ボラを少量含む暗灰褐色土
3　2～5㎜の白ボラを多量含む淡褐色土
4　御池ボラを少量含む暗褐色土
5　1～5㎜の御池ボラを多量含む黄褐色土

0　1　2 m



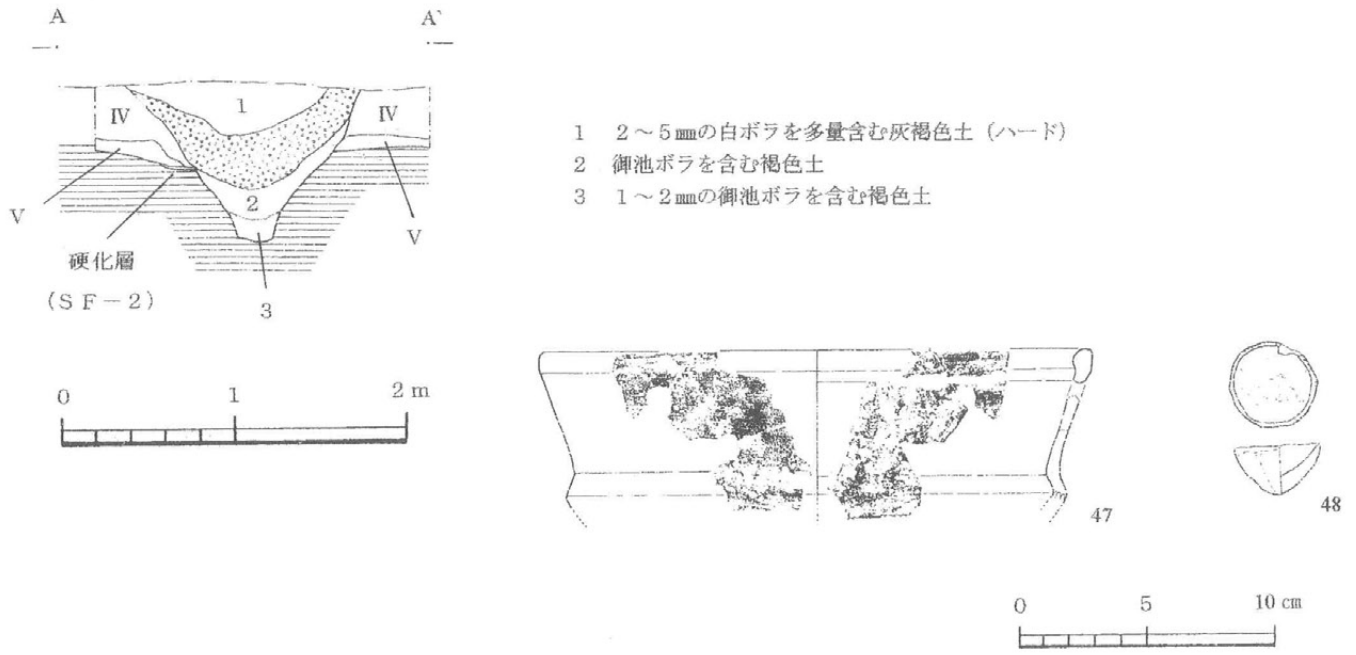
45



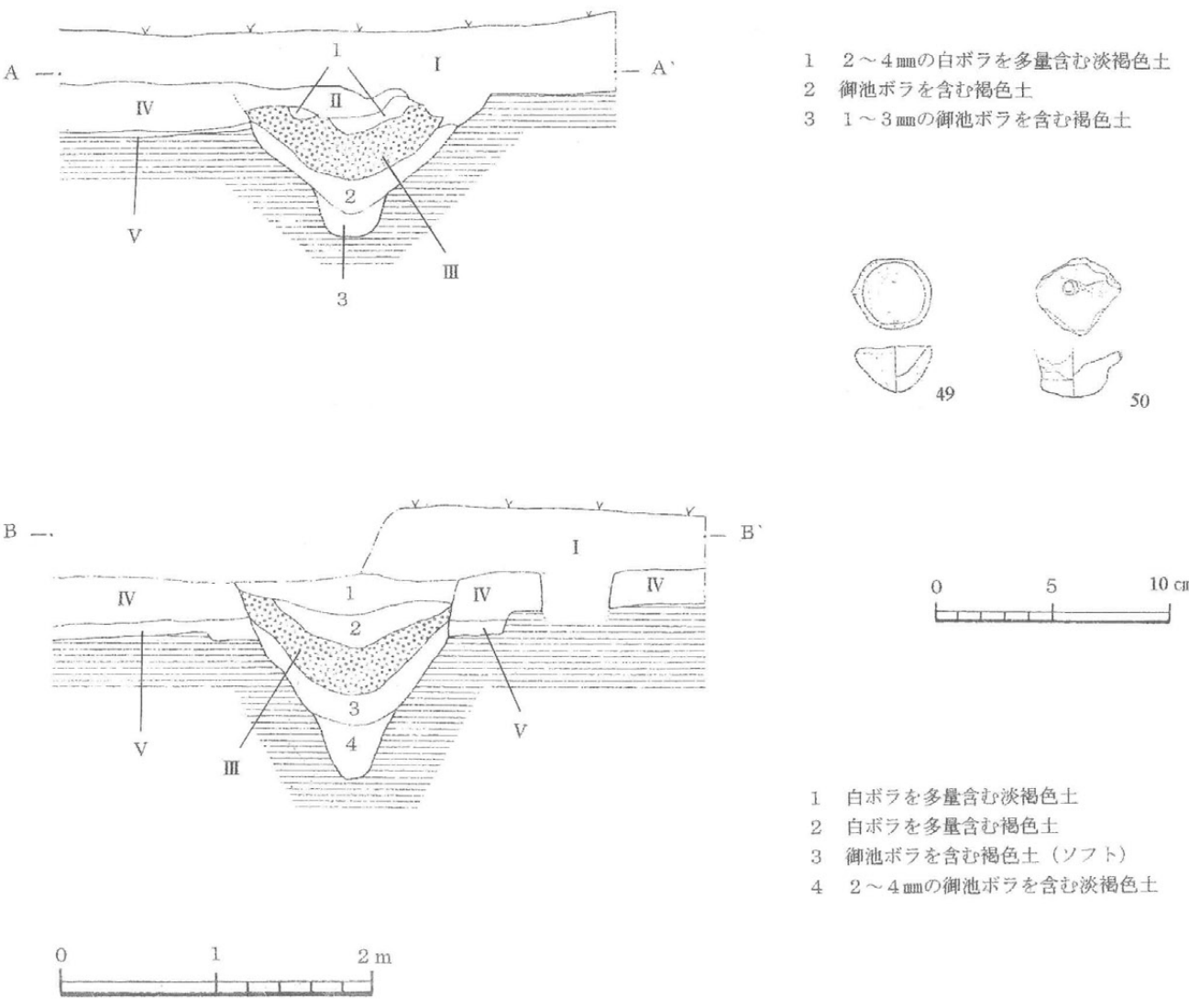
46

0　5　10 cm

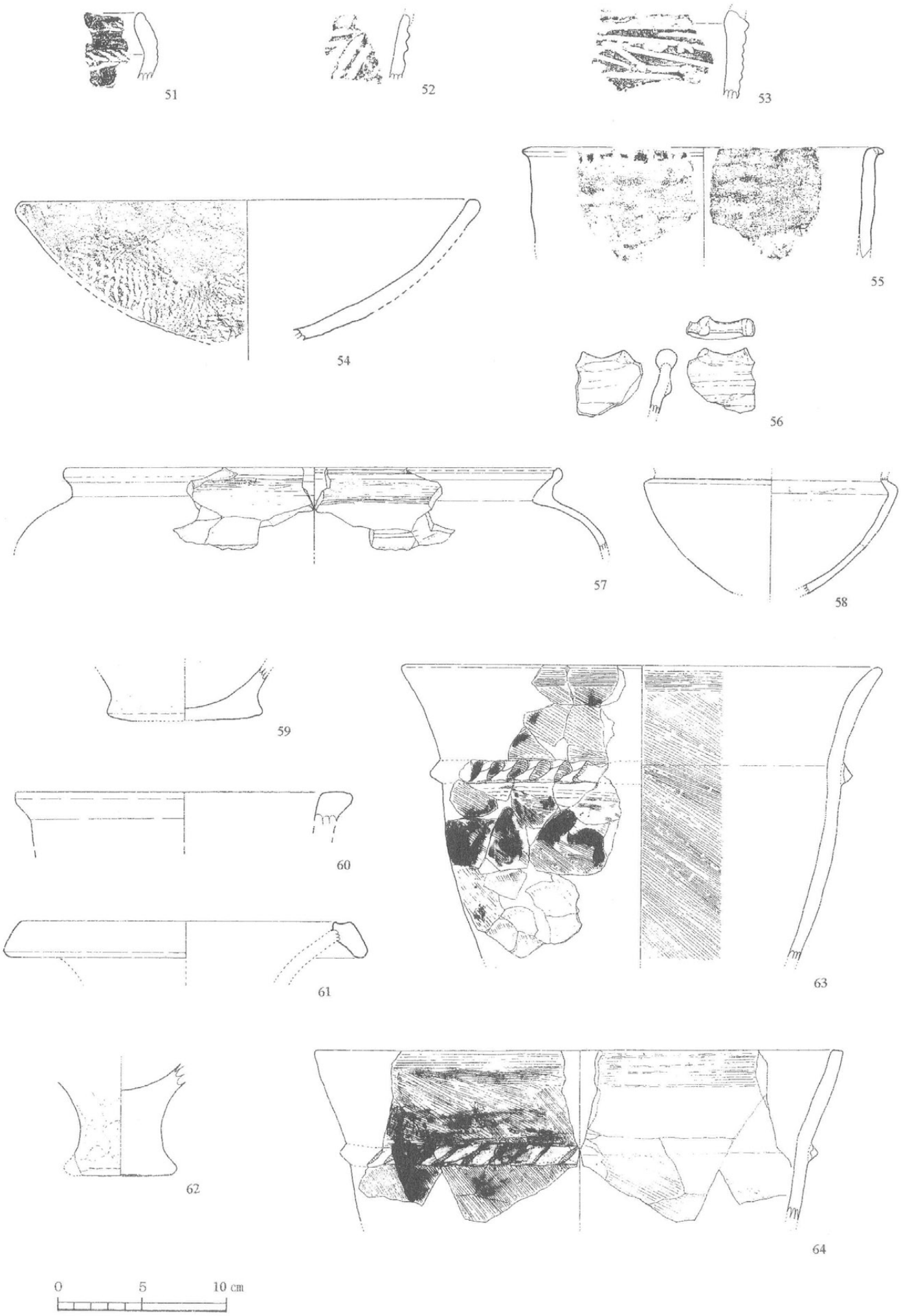
第14図　ＳＤ－１土層断面図および同遺構内出土遺物実測図



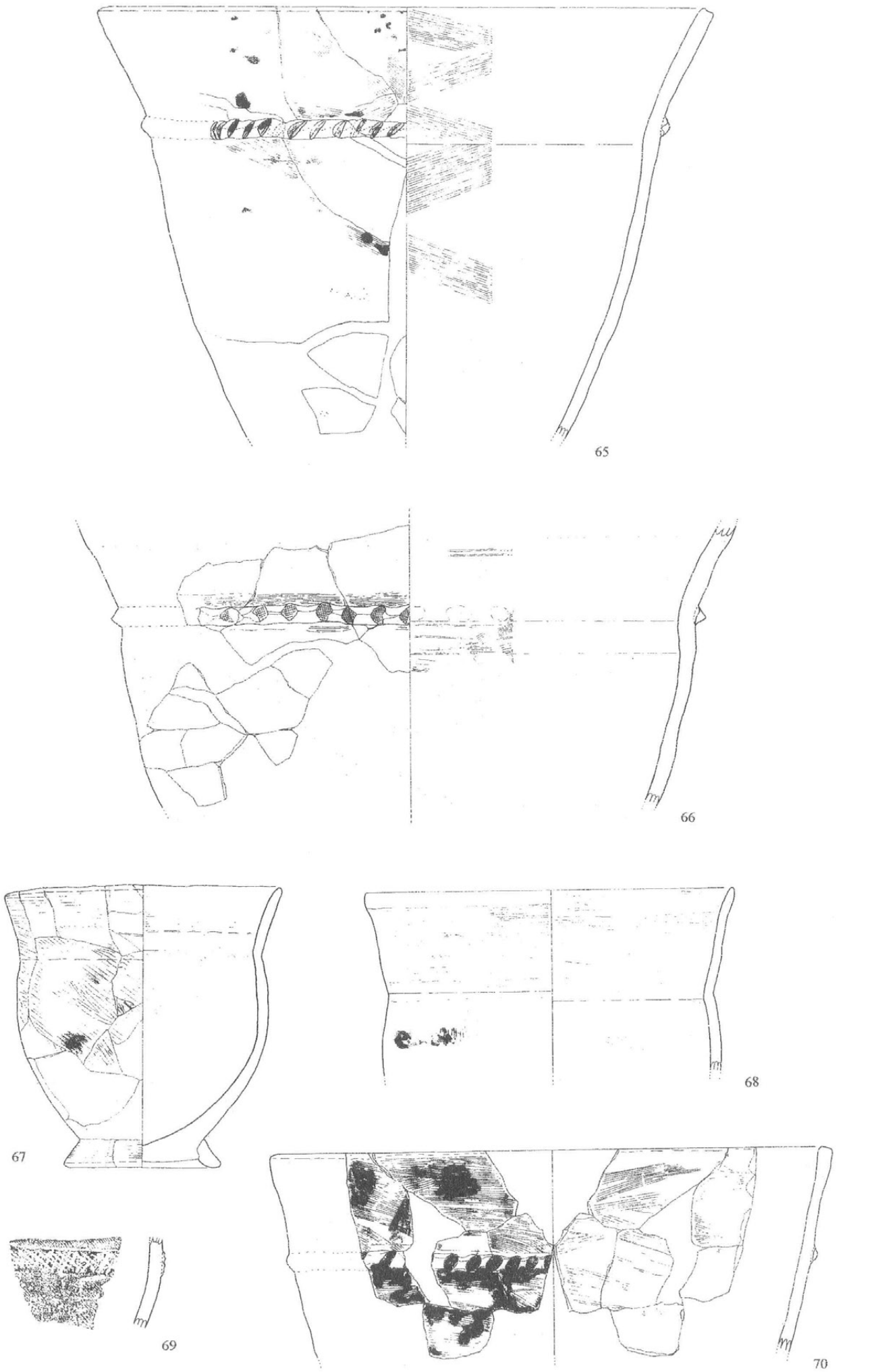
第15図　ｓｄ－１土層断面図および同遺構内出土遺物実測図



第16図　ｓｄ－２土層断面図および同遺構内出土遺物実測図

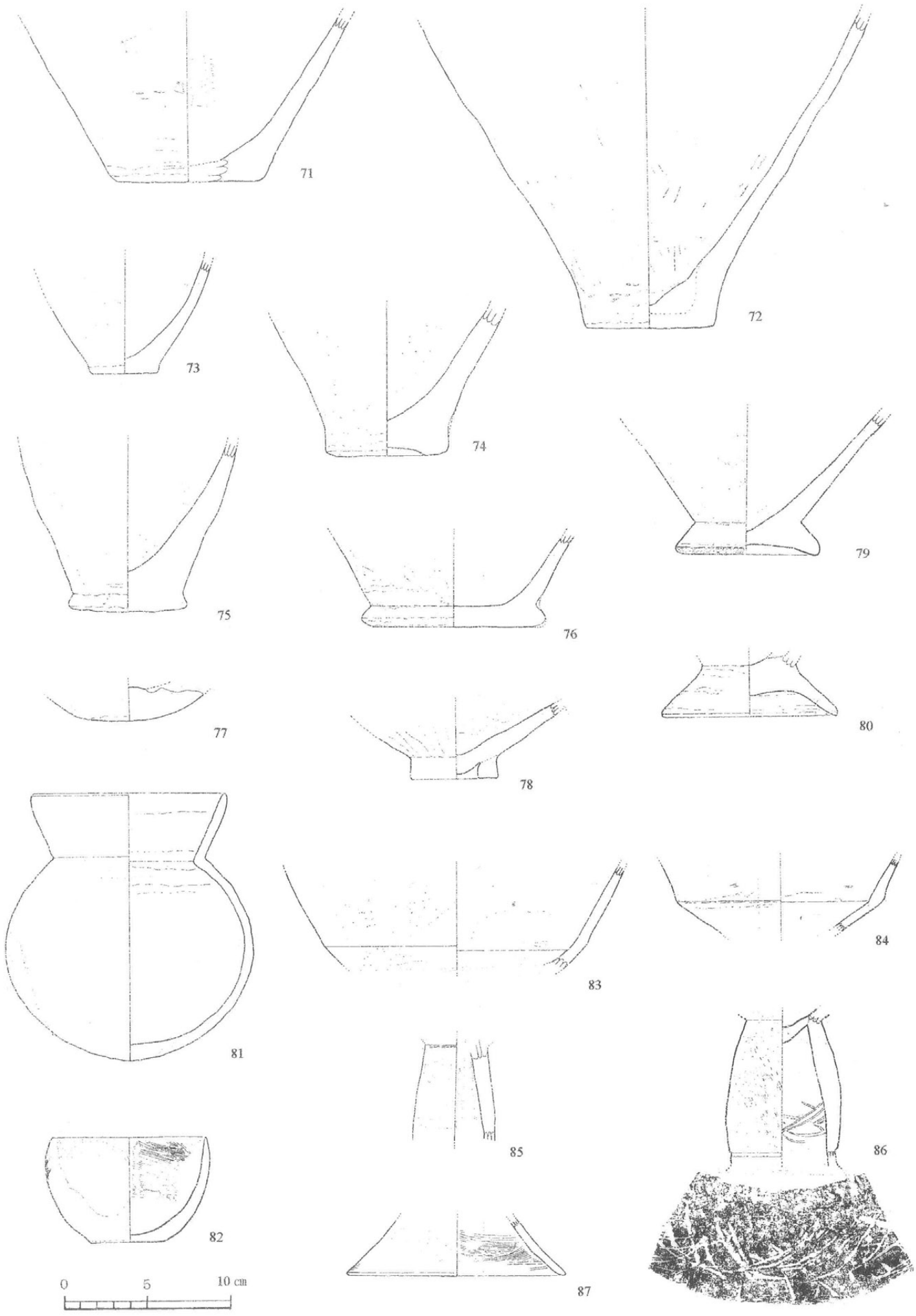


第17図　A・B区包含層内出土遺物実測図(1)

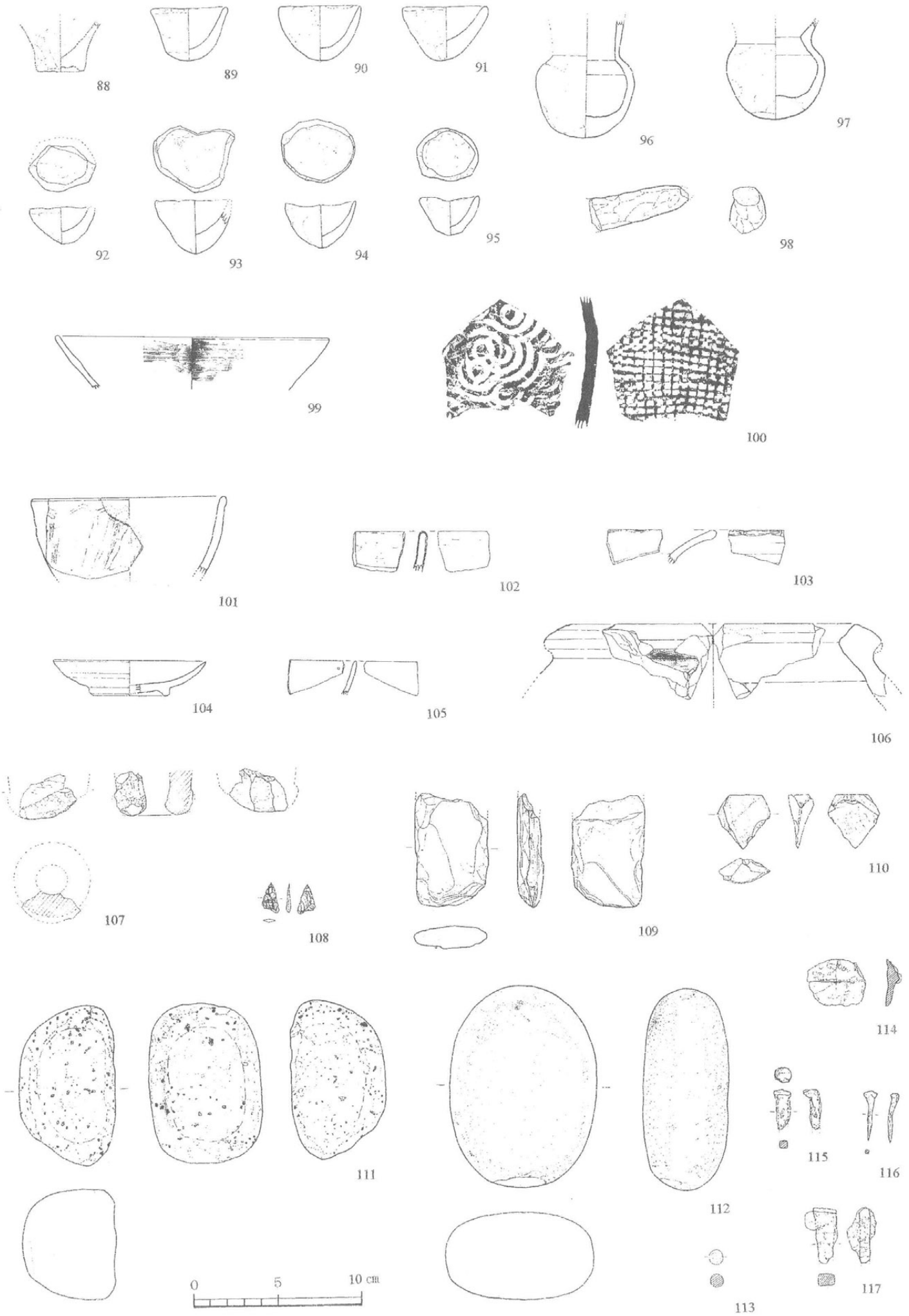


第18図　A・B区包含層内出土遺物実測図(2)

0　5　10 cm



第19図　A・B区包含層内出土遺物実測図(3)



第20図　A・B区包含層内出土遺物実測図(4)

表3　A・B区出土遺物観察表（1）

掲載番号	出土区・遺構	層	種別	器種	色調 外面	色調 内面	胎土・混和剤	特徴・備考
1	SA01	—	土師器	壺	にぶい黄橙	にぶい黄橙	極微小の鉱物・砂粒	（古墳時代）
2	SA01	—	土師器	甕	にぶい黄橙	浅黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 外面にスス付着
3	SA01	—	土師器	ミニチュア	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面にスス付着
4	SA02	—	土師器	壺？	にぶい黄橙	褐灰	極微小の鉱物・砂粒	（古墳時代）
5	SA02	—	土師器	甕	にぶい橙	にぶい黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面にスス付着
6	SA02	—	土師器	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 内面に黒斑
7	SA02	—	土師器	甕	にぶい黄橙	褐灰	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面に黒斑、スス付着
8	SA03	—	土師器	甕	にぶい黄橙	浅黄橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 胴部外面に著しくスス付着　内面に炭化物付着
9	SA03	—	土師器	甕	にぶい黄橙	明褐灰	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 胴部外面中位に著しくスス付着　内面に炭化物付着
10	SA03	—	土師器	ミニチュア	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 外面の一部焼成不良
11	SA03	—	土師器	ミニチュア	浅黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 内面の一部焼成不良
12	SA03	—	土師器	鉢	浅黄橙	黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 内面の一部焼成不良
13	SA03	—	土師器	壺	橙	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 内・外面に黒斑　内面に炭化物？付着
14	SA03	—	土師器	壺	明黄褐	明黄褐	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 内・外面に黒斑　内・外面に赤色顔料を塗布
15	SA03	—	土師器	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面の一部にスス付着
16	SA03	—	土師器	甕	にぶい黄橙	浅黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面にスス付着
17	SA03	—	土師器	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 外面にスス付着
18	SA03	—	土師器	甕	にぶい黄橙	褐灰	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面の一部にスス付着
19	SA03	—	土師器	甕	浅黄橙	黄灰	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 内面に炭化物付着
20	SA03	—	土師器	甕か壺	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 外面の一部焼成不良
21	SA04	—	土師器	甕	橙	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 内面に指頭圧痕あり
22	SA04	—	土師器	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
23	SA04	—	土師器	甕	浅黄橙	黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
24	SA04	—	土師器	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	極微小の鉱物・砂粒	（古墳時代）
25	SA04	—	土師器	甕	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 外面にスス付着
26	SA04	—	土師器	壺	明黄褐	灰黄褐	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
27	SA04	—	土師器	壺	にぶい黄橙	にぶい黄橙	極微小の鉱物・砂粒	（古墳時代）
28	SA04	—	土師器	高坏	にぶい橙	にぶい赤褐	1mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 外面の一部焼成不良
29	SA04	—	土師器	鉢	にぶい黄橙	浅黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
30	SA04	—	石製品	砥石	—	—	—	砂岩 重量：700.0g
31	SA04	—	石器	石鏃	—	—	—	チャート　重量：0.5g
32	SA05	—	土師器	坩形	浅黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
33	SA05	—	土師器	高坏？	浅黄橙	浅黄橙	極微小の鉱物・砂粒	（古墳時代）
34	SA05	—	土師器	高坏	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
35	SA05	—	土師器	高坏	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
36	SA05	—	土師器	坩形	浅黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
37	SA05	—	土師器	鉢？	橙	浅黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
38	SA05	—	土師器	ミニチュア	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 内・外面の一部焼成不良
39	SA05	—	土師器	ミニチュア	明褐灰	明褐灰	1mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
40	SA05	—	土師器	甕	—	浅黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 口縁が内傾　外面に著しくスス付着

表4　A・B区出土遺物観察表（2）

掲載番号	出土区・遺構	層	種別	器種	色調 外面	色調 内面	胎土・混和剤	特徴・備考
41	SA05	—	土師器	甕	黄橙	浅黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
42	SA05	—	土師器	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面にスス付着
43	SA05	—	土師器	甕	にぶい黄橙	—	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外・底面の一部焼成不良
44	SB01	—	土師器	ミニチュア	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面の一部焼成不良
45	SD01	—	土師器	甕	にぶい黄橙	にぶい橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面にスス付着
46	SD01	—	土師器	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面にスス付着
47	sd01	—	縄文土器	甕	黒褐	にぶい黄橙	極微小の鉱物・砂粒	（縄文時代晩期） 内面の風化著しい 黒色磨研 黒川式土器 精製浅鉢
48	sd01	—	土師器	ミニチュア	橙	橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
49	sd02	—	土師器	ミニチュア	にぶい黄橙	にぶい橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
50	sd02	—	土師器	—	にぶい黄橙	にぶい橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
51	J−14	Ⅳ	縄文土器	鉢	にぶい黄橙	灰褐	4mm以下の鉱物・砂礫	（縄文時代後期） 外面の一部にスス付着 貝殻刺突文 市来式土器
52	J−14	Ⅳ	縄文土器	鉢	橙	黒褐	3mm以下の鉱物・砂礫	（縄文時代後期） 沈線文
53	K−13	Ⅳ	縄文土器	鉢	にぶい橙	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（縄文時代後期） 納曽式土器
54	L−13	Ⅳ	縄文土器	浅鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（縄文時代晩期） 外面が著しく剥落し一部スス付着 底部外面に2種類の網目圧痕 黒川式土器
55	M−10	Ⅳ	縄文土器	鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（縄文時代晩期） 外面にスス付着 口唇部外面にキザミ目突帯 黒川式土器
56	M−12	Ⅳ	縄文土器	鉢	にぶい黄橙	にぶい橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（縄文時代晩期） 外面にスス付着 口唇にリボン状突起 黒川式土器
57	L−12	Ⅳ	縄文土器	浅鉢	褐灰	にぶい黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（縄文時代晩期） 黒色磨研 口縁部内面に沈線 黒川式土器
58	O−13	Ⅳ	縄文土器	浅鉢	黒褐	黒褐	3mm以下の鉱物・砂礫	（縄文時代晩期） 黒色磨研
59	L−12	Ⅳ	縄文土器	甕	にぶい橙	褐灰	4mm以下の鉱物・砂礫	（縄文時代晩期）
60	K−13	Ⅳ	弥生土器	甕	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（弥生時代中期）
61	J−14	Ⅳ	弥生土器	壺	橙	橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（弥生時代中期）
62	J−14	Ⅳ	弥生土器	甕	にぶい赤褐	明赤褐	3mm以下の鉱物・砂礫	（弥生時代中期）
63	L−11	Ⅳ	土師器	甕	橙	にぶい黄橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面にスス付着
64	P−14	Ⅳ	土師器	甕	黒褐	にぶい黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面は焼成不良
65	L−11・14	Ⅳ	土師器	甕	にぶい橙	浅黄橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 胴部外面上位に著しくスス付着 内面の一部にスス付着
66	L−12	Ⅳ	土師器	甕	橙	橙	7mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
67	J−14	Ⅳ	土師器	甕	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 外面にスス付着 脚台の貼付けが明確
68	N−13	Ⅳ	土師器	甕	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
69	N−8	Ⅳ	土師器	壺	橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
70	L−11	Ⅳ	土師器	甕	橙	にぶい橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面にスス付着
71	L−11	Ⅳ	土師器	甕？	橙	褐灰	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
72	L−12	Ⅳ	土師器	甕	橙	橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
73	J−14	Ⅳ	土師器	甕	にぶい橙	橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面に黒斑
74	表採	表採	土師器	甕	にぶい黄橙	にぶい褐	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 内面の一部に炭化物？付着 脚台の貼付痕を明瞭にのこす
75	M−10	Ⅳ	土師器	甕	にぶい橙	にぶい黄橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 内面の一部に炭化物？付着
76	L−13	Ⅳ	土師器	甕	にぶい黄橙	にぶい橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
77	M−10	Ⅳ	土師器	甕	灰黄	浅黄橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 丸底
78	N−9	Ⅳ	土師器	甕か壺	橙	にぶい橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 脚台の貼付けが明確
79	N−13	Ⅳ	土師器	甕	橙	橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 脚台底面に黒斑
80	J−14	Ⅳ	土師器	甕	浅黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）

表5　A・B区出土遺物観察表（3）

掲載番号	出土区・遺構	層	種別	器種	色調 外面	色調 内面	胎土・混和剤	特徴・備考
81	J－14	Ⅳ	土師器	壺	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面に部分的なスス付着
82	N－14	Ⅳ	土師器	鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代） 外面に部分的なスス付着
83	O－14	Ⅳ	土師器	高坏	にぶい黄橙	にぶい黄橙	極微小の鉱物・砂粒	（古墳時代）
84	L－11	Ⅳ	土師器	高坏	にぶい黄橙	にぶい黄橙	極微小の鉱物・砂粒	（古墳時代） 内面に黒斑
85	K－13	Ⅳ	土師器	高坏	黄橙	浅黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
86	M－9	Ⅳ	土師器	高坏	浅黄橙	橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 内面に多条の線刻
87	O－14	Ⅳ	土師器	高坏	橙	橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 外面に黒斑
88	N－8	Ⅳ	土師器	ミニチュア	橙	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
89	M－12	Ⅳ	土師器	ミニチュア	にぶい黄橙	明黄褐	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
90	O－15	一括	土師器	ミニチュア	暗灰	褐灰	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 内・外面共に焼成不良
91	N－14	Ⅳ	土師器	ミニチュア	橙	橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
92	O－14	Ⅳ	土師器	ミニチュア	橙	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
93	L－12	Ⅳ	土師器	ミニチュア	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古墳時代）
94	M－12	Ⅳ	土師器	ミニチュア	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
95	O－13	Ⅳ	土師器	ミニチュア	橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代）
96	N－14	Ⅳ	土師器	ミニチュア	橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 外面に黒斑
97	L－12	Ⅳ	土師器	ミニチュア	橙	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 外面に黒斑
98	J－14	Ⅳ	土師器	杓子状土製品	浅黄橙	－	2mm以下の鉱物・砂粒	（古墳時代） 把手部分
99	J－14	Ⅳ	土師器	坏	橙	橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 内・外面に赤色物付着
100	J－14	Ⅳ	須恵器	甕	暗灰	橙	極微小の鉱物・砂粒	（古代） 外面に自然釉
101	M－13	Ⅳ	青磁	椀	オリーブ灰	オリーブ灰	褐灰 良	（15世紀後半～16世紀中葉） 剣先連弁 龍泉窯系
102	L－12	Ⅳ	青磁	椀	緑灰	緑灰	灰黄褐 良	（14世紀後半～15世紀中葉） 龍泉窯系
103	N－8	Ⅳ	青磁	皿	明オリーブ灰	明オリーブ灰	灰黄褐 良	（14世紀～15世紀） 稜花皿 龍泉窯系
104	P－13	Ⅳ	白磁	皿	白	白	灰白 良	（14世紀後半～15世紀頃） 見込部無釉
105	O－13	Ⅳ	白磁	椀	明青灰	明青灰	灰白 良	（16世紀後半頃？） 中国産
106	O－15	Ⅳ	褐釉陶器	甕	黒褐	黒褐	灰黄褐 粗	（明代・15世紀～16世紀） 中国南部～南方産
107	M－13	Ⅳ	鍛冶関連	鞴の羽口	－	－	2mm以下の鉱物・砂粒	復元短径4.7cm、復元通風口径1.9cm
108	N－14	Ⅳ	石器	石鏃	－	－	－	チャート 重量:0.6g
109	K－12	Ⅳ	石器	石斧	－	－	－	頁岩源ホルンフェルス 磨製石斧 重量:67.9g
110	D－14	Ⅳ	石器	石核	－	－	－	チャート 重量:12.5g
111	M－9	Ⅳ	石器	磨・敲石	－	－	－	花崗岩 重量:650.0g
112	L－13	Ⅳ	石器	磨・敲石	－	－	－	砂岩 重量:1010.0g
113	O－14	Ⅳ	金属製品	銃弾	－	－	－	（近世） 火縄銃の弾丸 鉛製 直径8mm 重量:3.7g
114	K－13	Ⅳ	鉄製品	鋤先	－	－	－	（時代不詳） 鋳造品 腐食が著しく詳細不明 重量:15.9g
115	O－14	Ⅳ	鉄製品	釘	－	－	－	角釘（和釘） 断面ほぼ正方形 頭部はL字状（折釘類） 全体著しく腐食 重量:2.6g
116	N－13	Ⅳ	鉄製品	釘	－	－	－	角釘（和釘） 断面ほぼ正方形 腐食により頭部形態不明 全体腐食 重量:1.8g
117	K－13	Ⅳ	鉄製品	不明	－	－	－	工具？ 全体著しく腐食し詳細不明 重量:12.3g

4. C区の遺物・遺構

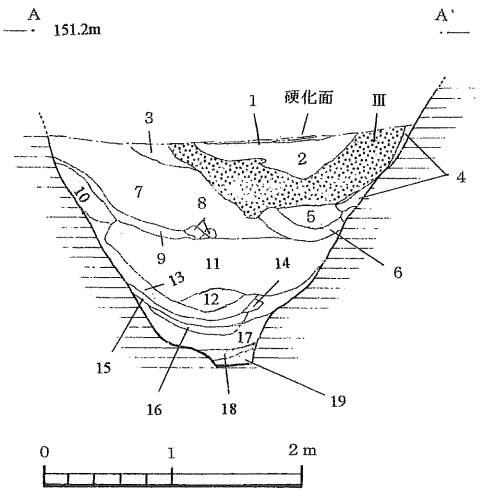
1）溝状遺構(SD－2)〈第3・21～26図〉　SD－2はC区全体を占め、検出全長63.80 m・上面幅6.80～9.00 m・底面幅0.45～0.65 m・深さ4.14～5.88mで、走行方向はN－33°－Eという大堀であった。断面形態は薬研掘状を呈し、文明軽石がレンズ状に堆積している。また2～3枚の硬化層がみうけられ、埋没していく過程で、通路として使われていた可能性がある。堆積層が多重構造をしている事から、人工的に埋められたのではなく、自然に埋没したものと考える。

第24図を参照してもらうと、SF－1・2・3を切りこんでいることがわかる。

また第25図を参照してもらうと、遺構の中に数基の柱穴が出土しており、これらは橋脚の一部ではなかったかと考え、遺構の脇には硬化面が残存しており、脚台の一部ではないかと想定している。

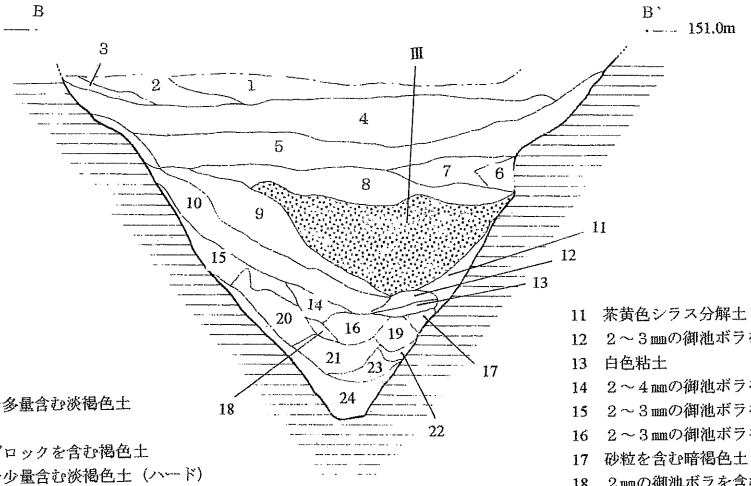
遺構内からの主な出土遺物として、須恵器の甕、14世紀後半～15世紀中葉の青磁碗、15世紀～16世紀にかけての白磁皿、15世紀～16世紀の褐釉陶器の壺、備前焼の擂鉢、薩摩焼の甕・壺、瓦、銭貨「祥符元宝」がある。須恵器については、文明軽石堆積層より上層で出土しており、後世の二次的移動と考える。また銭貨「祥符元宝」については、北宋時代大中祥符元年(1008)に中国で鋳造され、日本に輸入された渡来銭であるが、渡来銭は1670年(渡来銭使用禁止令)まで長期にわたり広く使われており、使用年代は不詳である。

遺構の年代としては、文明軽石の堆積状況および出土遺物より、14世紀後半～15世紀前半(室町時代)とみて良いと考える。



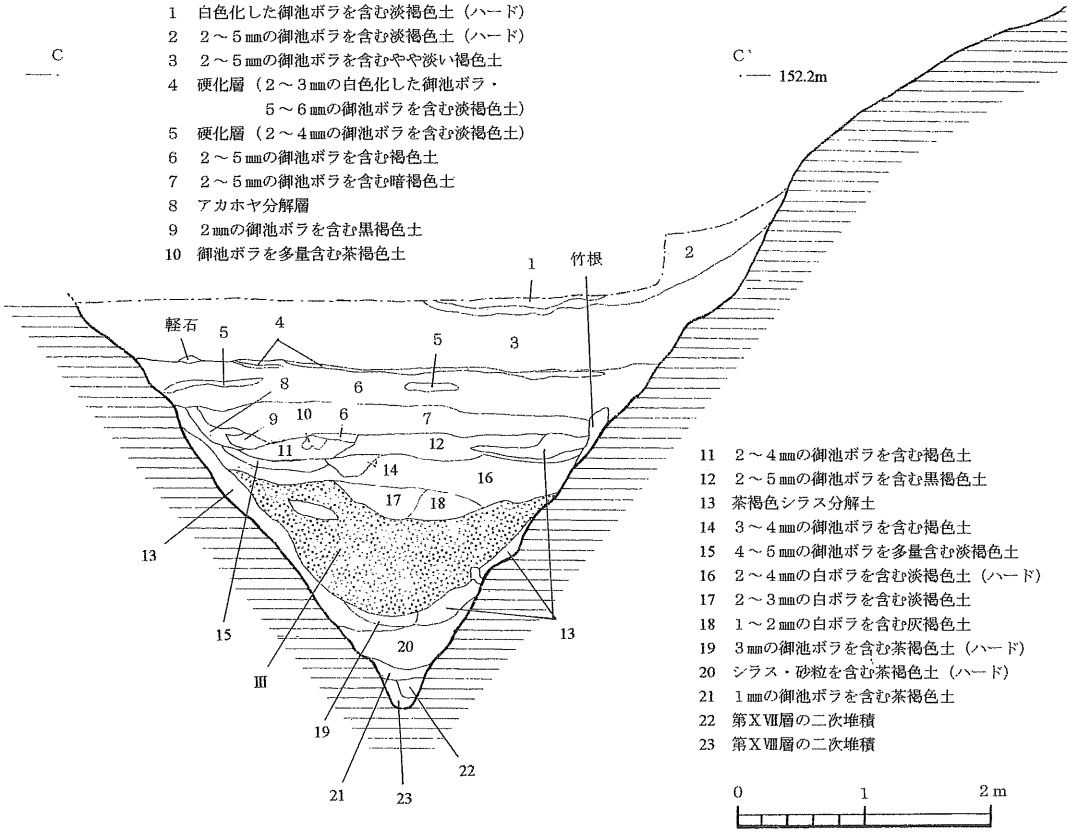
1　砂粒を含む褐色土
2　白ボラ・1～4㎜の御池ボラを含む淡褐色土
3　2～5㎜の御池ボラを含む褐色土
4　茶褐色シラス分解土（ソフト）
5　2～4㎜の御池ボラを含む黒褐色土
6　灰白色粘質シラス
7　御池ボラを含む砂質黒褐色土
8　御池ボラブロック
9　2～5㎜の御池ボラを含む褐色土
10　2～4㎜の御池ボラを含む茶褐色土
11　砂質黒褐色土
12　2～5㎜の御池ボラを多量含む黄褐色土（ハード）
13　2～10㎜の御池ボラを含む褐色土（ハード）
14　2～4㎜の御池ボラを多量含む黄褐色土
15　黄褐色シラス・2～4㎜の御池ボラを少量含む黄褐色土
16　御池ボラを多量含む黄褐色土
17　黄褐色シラス分解土
18　3～4㎜の御池ボラを含む褐色土
19　粘質茶褐色土

第21図　SD－2土層断面図(1)



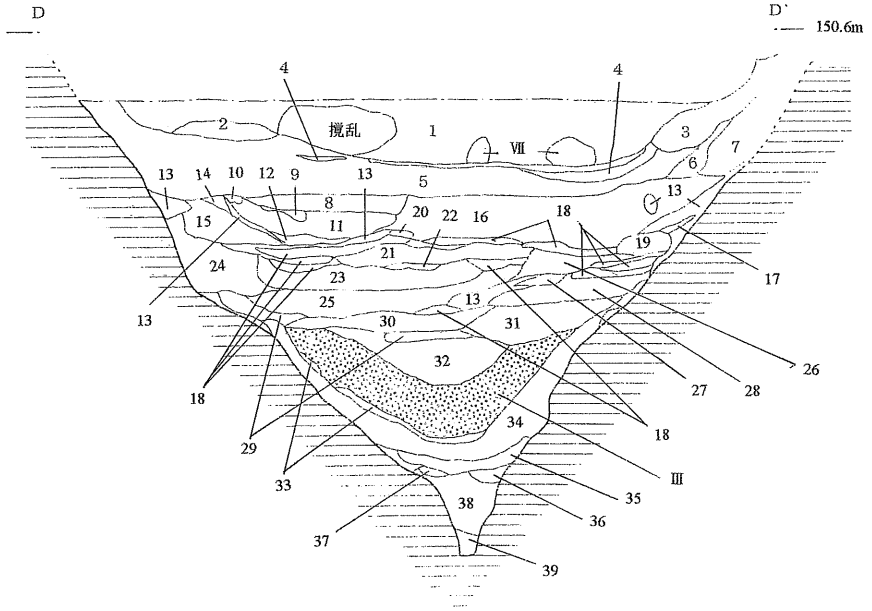
1　御池ボラを多量含む淡褐色土
2　黒褐色土
3　アカホヤブロックを含む褐色土
4　御池ボラを少量含む淡褐色土（ハード）
5　白ボラ・４～５㎜の御池ボラを含む淡褐色土（ハード）
6　茶褐色シラス分解土
7　白ボラを多量、３～５㎜の御池ボラを少量含む淡褐色土
8　シラスを多量含む淡褐色土
9　３～５㎜の御池ボラを多量含む褐色土
10　２～４㎜の御池ボラを含む褐色土（ハード）
11　茶黄色シラス分解土
12　２～３㎜の御池ボラを含む褐色土
13　白色粘土
14　２～４㎜の御池ボラを多量含む茶褐色土
15　２～３㎜の御池ボラを含む茶褐色土（ソフト）
16　２～３㎜の御池ボラを含む褐色土（ハード）
17　砂粒を含む暗褐色土（ソフト）
18　２㎜の御池ボラを含む褐色土
19　３～４㎜の御池ボラを含む褐色土（ハード）
20　１㎜の御池ボラを含む茶褐色土（ソフト）
21　２～３㎜の御池ボラを含む砂質暗褐色土
22　２～３㎜の御池ボラを含む淡褐色土
23　２～５㎜の御池ボラを多量含む黄褐色土
24　第Ⅹ Ⅷ層の二次堆積

1　白色化した御池ボラを含む淡褐色土（ハード）
2　２～５㎜の御池ボラを含む淡褐色土（ハード）
3　２～５㎜の御池ボラを含むやや淡い褐色土
4　硬化層（２～３㎜の白色化した御池ボラ・
　　５～６㎜の御池ボラを含む淡褐色土）
5　硬化層（２～４㎜の御池ボラを含む淡褐色土）
6　２～５㎜の御池ボラを含む褐色土
7　２～５㎜の御池ボラを含む暗褐色土
8　アカホヤ分解層
9　２㎜の御池ボラを含む黒褐色土
10　御池ボラを多量含む茶褐色土



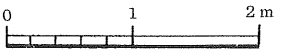
11　２～４㎜の御池ボラを含む褐色土
12　２～５㎜の御池ボラを含む黒褐色土
13　茶褐色シラス分解土
14　３～４㎜の御池ボラを含む褐色土
15　４～５㎜の御池ボラを多量含む淡褐色土
16　２～４㎜の白ボラを含む淡褐色土（ハード）
17　２～３㎜の白ボラを含む淡褐色土
18　１～２㎜の白ボラを含む灰褐色土
19　３㎜の御池ボラを含む茶褐色土（ハード）
20　シラス・砂粒を含む茶褐色土（ハード）
21　１㎜の御池ボラを含む茶褐色土
22　第Ⅹ Ⅶ層の二次堆積
23　第Ⅹ Ⅷ層の二次堆積

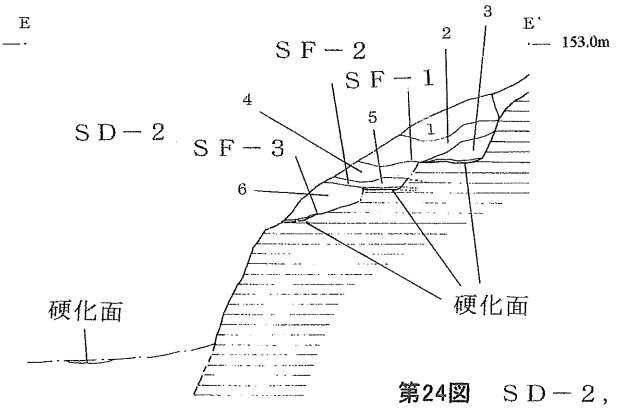
第22図　ＳＤ－２土層断面図（２）



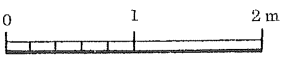
1　御池ボラ・アカホヤブロック混合層
2　砂粒を含む暗褐色土
3　２～10㎜の御池ボラ・アカホヤブロックを含む暗褐色土
4　硬化層（２～10㎜の白色化した御池ボラ）
5　２～５㎜の御池ボラを含む暗褐色土
6　１～２㎜の御池ボラを含む明褐色土
7　暗灰オリーブ土（竹根による分解土）
8　２～５㎜の御池ボラを含む褐色土
9　２～５㎜の御池ボラを含む暗褐色土
10　３～５㎜の御池ボラを含む褐色土
11　砂粒を含む暗褐色土層（ややハード）
12　２～４㎜の御池ボラを含む褐色土
13　暗茶褐色土
14　２～10㎜の白色化した御池ボラを含む明褐色土
15　２～３㎜の御池ボラを含む暗茶褐色土
16　明褐色土（ハード）
17　シラスを含む暗茶褐色土
18　硬化層（暗茶褐色土）
19　明褐色土
20　白色化した御池ボラを含む灰褐色土
21　２～４㎜の御池ボラを含む明褐色土
22　茶褐色土
23　粘質シラス少量・２～３㎜の御池ボラ少量を含む暗茶褐色土
24　２～４㎜の御池ボラを含む暗茶褐色土（ややソフト）
25　２～４㎜の御池ボラを含む茶褐色土
26　暗褐色土（ややソフト）
27　白色化した御池ボラを含む暗褐色土
28　４～５㎜の御池ボラを少量含む暗茶褐色土（ハード）
29　シラスを含む茶褐色土
30　アカホヤブロック・白ボラ少量を含む暗茶褐色土
31　茶褐色シラスブロックを含む茶褐色土
32　１～３㎜の白ボラを含む淡褐色土
33　白ボラを含む茶褐色土
34　茶褐色シラス分解土
35　茶褐色シラス・砂質シラスを含む茶褐色土
36　茶色軽石を含む茶褐色土
37　砂粒を含む灰白色土
38　茶褐色シラス・砂粒を含む暗茶褐色土
39　シラス・９～11㎜の砂礫を含む茶白色土

第23図　ＳＤ－２土層断面図（３）

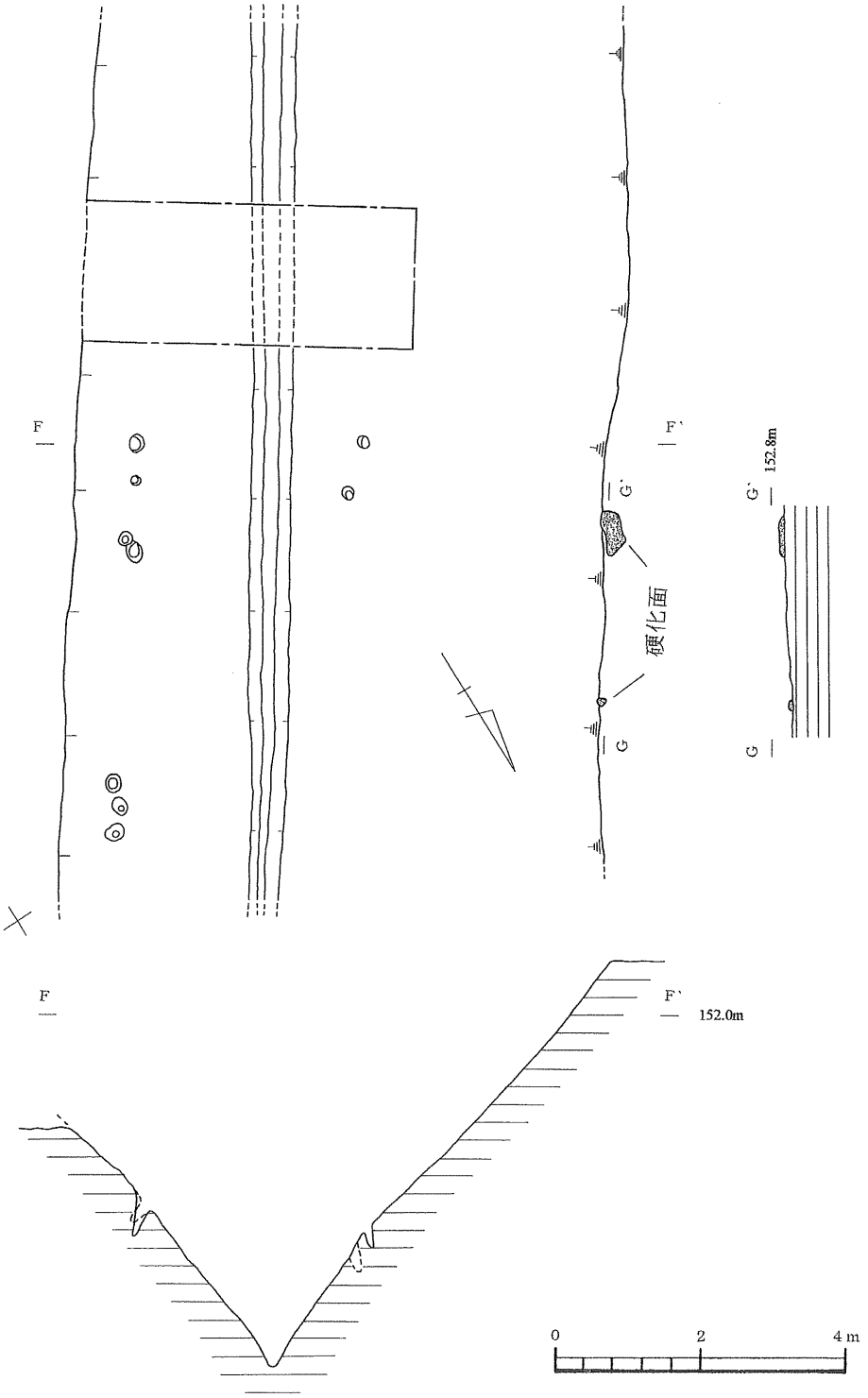




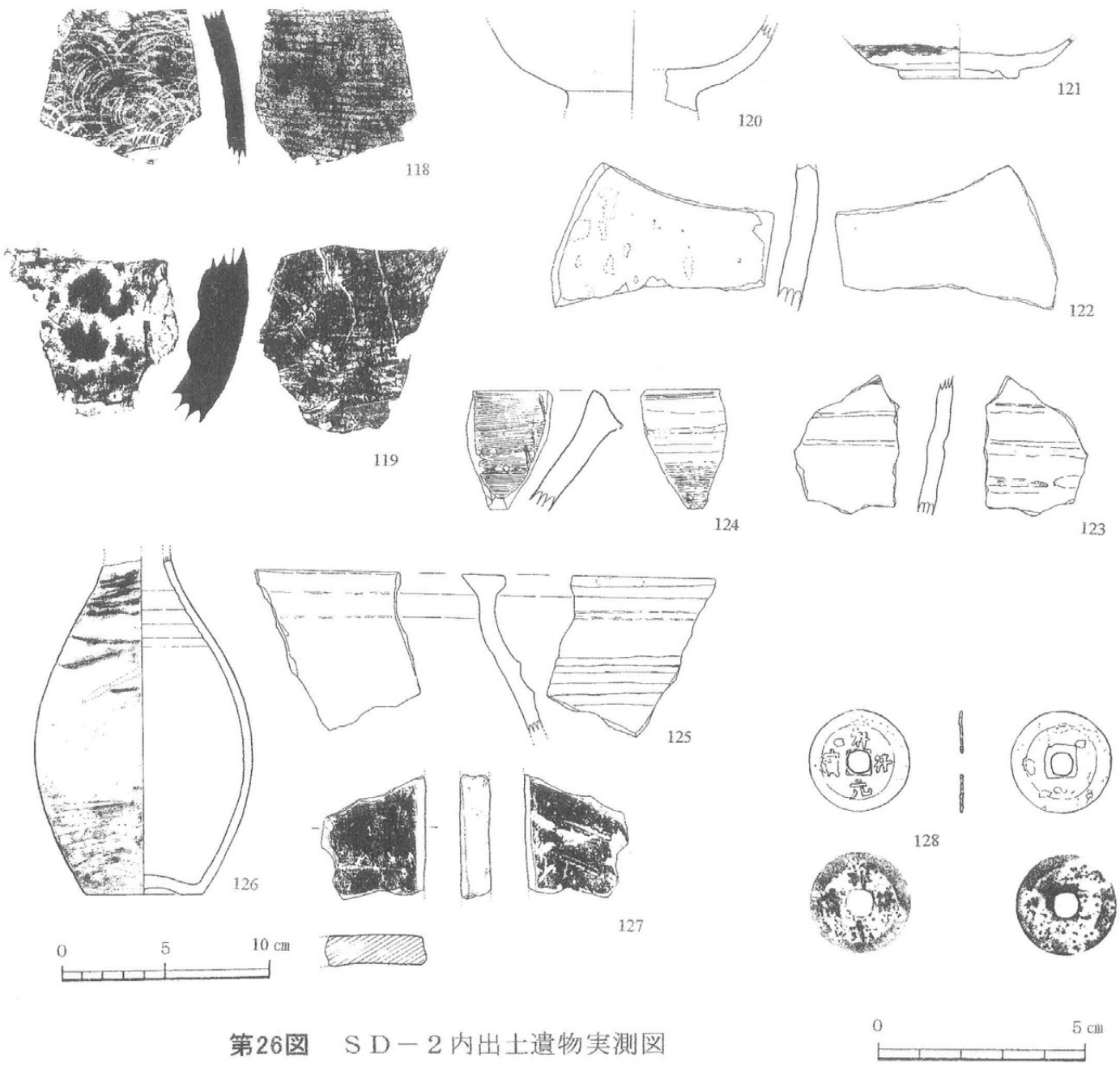
1　褐色粘土を含む黒色土
2　暗褐色土
3　黒色土
4　褐色粘土
5　御池ボラを含む黒色土
6　黒色土・暗褐色土・アカホヤ混土層



第24図　ＳＤ－２，ＳＦ－１・２・３土層断面図



第25図　ＳＤ－２橋脚部（Ｊ－12区）平面・断面図



第26図　ＳＤ－２内出土遺物実測図

表6　Ｃ区出土遺物観察表

掲載番号	出土区・遺構	層	種別	器種	色調 外面	色調 内面	胎土・混和剤	特徴・備考
118	SD02	上層	須恵器	甕	黄灰	黄灰	極微小の鉱物・砂粒	外面は摩耗
119	SD02	上層	須恵器	甕	褐灰	褐灰	3mm以下の鉱物・砂礫	内面に火ぶくれ
120	SD02		青磁	椀	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 良	(14世紀後半～15世紀中葉) 内・外面共に焼成不良か二次的被熱？
121	SD02		白磁	皿	明緑灰	明緑灰	灰白 精良	(明代15世紀～16世紀) 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ 舶載品
122	SD02		褐釉陶器	壺	暗オリーブ褐	暗オリーブ褐	青灰 粗	(15～16世紀頃) タイ産？
123	SD02		褐釉陶器	—	暗オリーブ褐	暗オリーブ褐	にぶい黄褐 粗	(明代15～16世紀) 中国南部から南方にかけての産
124	SD02		備前焼	擂り鉢	灰	灰	灰 粗	(15世紀前半？)
125	SD02	上層	薩摩焼	甕	緑灰	緑灰	赤褐 良	(18世紀)
126	SD02	上層	薩摩焼	壺	灰オリーブ	明赤褐	明赤褐 良	(19世紀) 胴部内面に接合痕 釉は苗代川系 底は明治の龍門司
127	SD02	上層	瓦	平瓦	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	(年代不明)
128	SD02		銭貨	—	—	—	—	「祥符元宝」 初鋳年代は北宋時代大中祥符元年(1008年) 渡来銭 重量:2.5g

5. D区の遺構・遺物

D区の旧地形は西から東へと傾斜しており、それは南になる程顕著で、その基盤層傾斜を埋める形で、大規模な造成が行なわれており、その一部が**第27図** であり、御池ボラブロックとアカホヤブロックが混じった土で版築している様子がみてとれる。直上に文明軽石が水平堆積していることから、中世15世紀前半(室町時代)に大造成(地業)が行なわれたのではないかと考える。

1)掘立柱建物跡(SB－4)〈第28図〉　SB－4は3間×?(調査区外)で、柱穴の深さ0.36～0.62mである。柱穴内から、古代の土師器坏・高台付椀、黒色土器A類、鍛冶関連遺物である椀型鍛冶滓が出土しており、何らかの祭祀・儀礼がおこなわれたのではないかと考える。

2)土坑(SC－14)〈第28・29図〉　SC－14は長径0.80m・短径0.74m・深さ0.14mのややいびつな円形である。遺構内から古代の土師器坏か椀が出土している。

3)道路状遺構(SF－10・11)〈第28図〉　SF－10は上面幅0.40～0.50m・底面幅0.40～0.50m・深さ(硬化面のみ)で、検出全長6.60mである。共に出土遺物はなし。

4)溝状遺構(SD－3)〈第3・30図〉　SD－3は検出全長17.40m・上面幅1.20～3.20m・底面幅0.50～0.60m・深さ0.65～1.60mで、走行方向はN－85°－Wである。主な出土遺物としては、須恵器の壺・甕・転用硯、土師器の甕・坏・高台付椀、舶載品である青磁碗、滑石製の石鍋、鉄製品の鎌・刀子があり、滑石製石鍋については、底部のみの破片であり、詳細は不明であるが、Ⅲ－b～e類(1992　木戸編年)の範疇におさまり、13～15世紀の産と思われる。鉄製品の刀子は、刀身がかなり研ぎ減りしており、工具として用いられたものと考える。

5)柵列(SL－1)〈第28図〉SL－1は4基の柱穴がL字形に並んでおり、柱穴間0.80m～0.85m、柱穴の長径0.23～0.28m・短径0.18～0.24m・深さ0.10～0.30mである。西側へ延びる可能性はある。出土遺物はなし。

6)石組遺構(SI－1)〈第33図〉　SI－1は直径20～30㎝の軽石が「コ」の字状に2～3段組まれている。中世の地業(大規模造成)上面で検出され、一辺が約2.5mである。小堂のごとき基壇と推察される。主な出土遺物として、鉄製の角釘(和釘)が出土した。

7)集石(SS－1)〈第34図〉　SS－1は北壁の断面で確認できたが、後世の造成・耕作により破壊をうけており、詳細は不明。

以上の遺構の年代観としては、掘立柱建物跡・土坑・柵列・道路状遺構は、検出状況および出土遺物より10～11世紀（平安中期）と思われ、溝状遺構は、11～13世紀（平安中期～鎌倉時代）と考えられる。石組遺構は検出状況より15世紀前半（室町時代）に造築されたものであろう。集石は、前にも述べたとおり、詳細は不明だが、その周囲より、縄文時代早期前半の遺物が採集されており、その頃の可能性も考えられる。

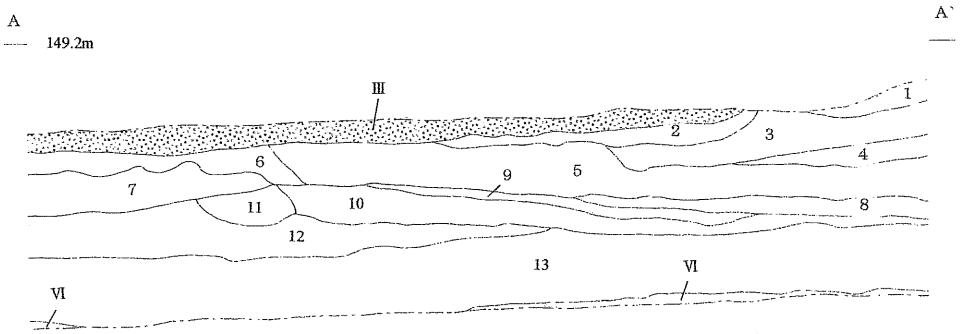
8)包含層内出土遺物　D区からは縄文時代早期前半の深鉢、縄文時代後期の深鉢、縄文時代晩期後半の鉢・深鉢、弥生時代中期の甕、古代の土師器甕・坏・高台付椀、黒色土器A類(内面にの

み炭素を吸着)の坏・高台付椀、須恵器の壺・小壺・甕・転用硯、製塩土器である焼塩壺、越州窯系の青磁碗、龍泉窯系の青磁皿、白磁碗、土錘、土師器を二次転用した紡錘車、鍛冶関連遺物である椀型鍛冶滓、墨書土器、石製銙具の丸鞆、中世の土師器坏、景徳鎮の青花碗、近世の肥前系染付碗、その他時代不詳の石器の剥片・スクレイパー、石製品の砥石、鉄製品の角釘(和釘)・不明品、土製品が出土した。

石製銙具の丸鞆は、史料にみられる「雑石腰帯」で、表面は非常に良く研磨されており、光沢がある。側面は一部、研磨がやや粗く光沢が弱い。背面は、研磨が粗く、加工痕をのこす。縦 2.8 ㎝・横 4.4 ㎝・厚さ 0.7 ㎝で、縦／横比が、0.64 と扁平で、黒色を呈する頁岩製である。

角釘(和釘)は、古代から近世終末期まで、長期にわたり使用されている為、年代不詳とした。

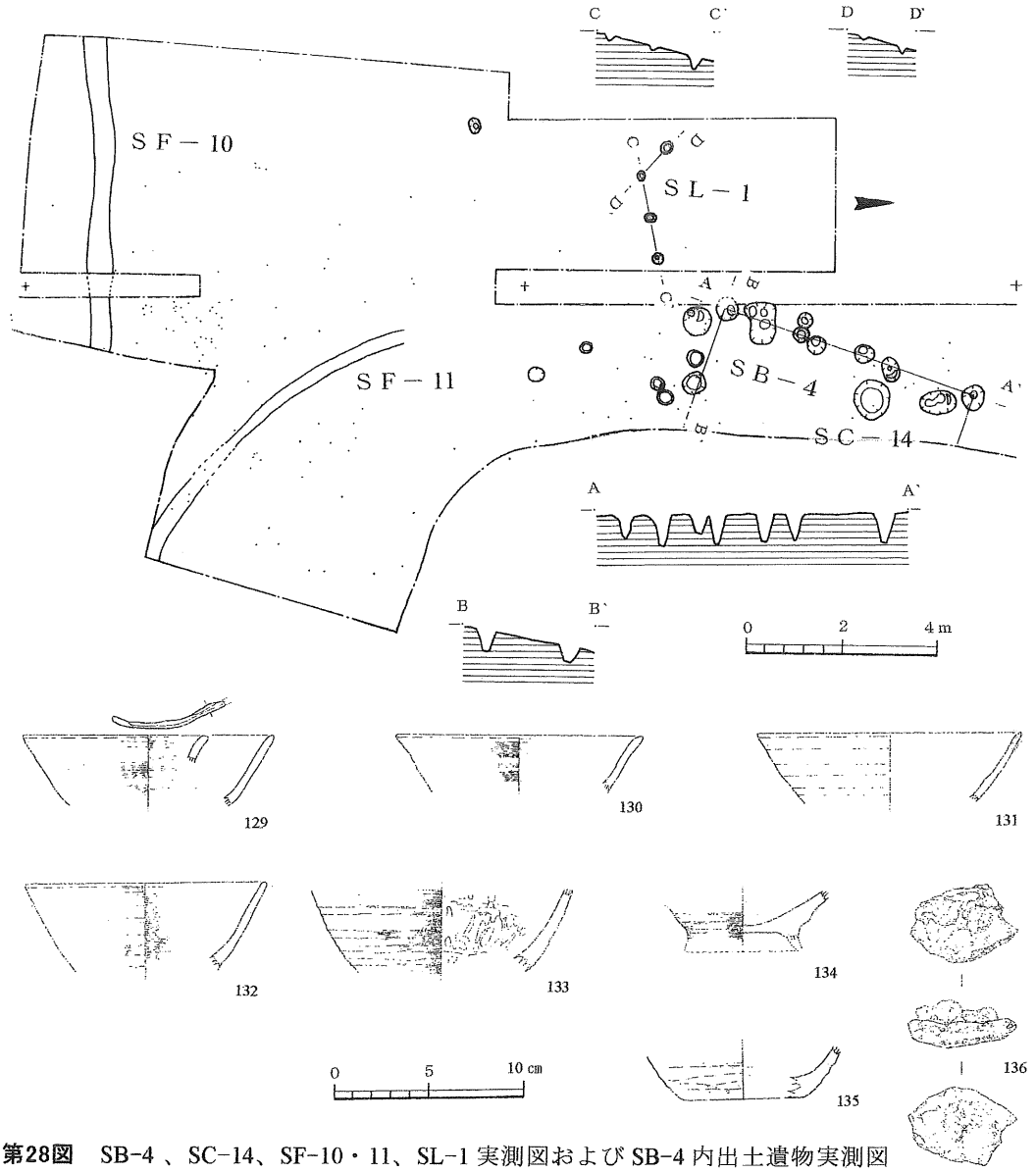
なお紙面スペースの都合上、個々の遺物のデータは省略した。遺物観察表を参考にしてもらいたい。



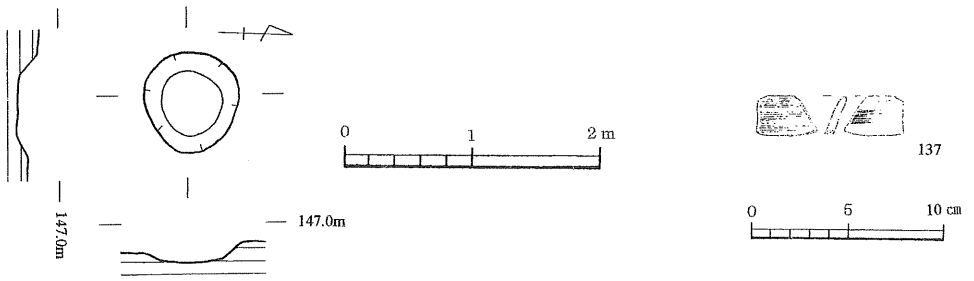
1　3㎜の御池ボラを含む淡褐色土
2　4㎜の御池ボラ少量・アカホヤブロックを含む茶褐色土
3　5～20㎜の御池ボラ・砂粒を含む暗褐色土小ブロック混土層
4　御池ボラ小ブロック・アカホヤ小ブロック・褐色土小ブロック混土層
5　御池ボラブロック・アカホヤブロック・砂粒を含む淡褐色土ブロック混土層
6　2～4㎜の御池ボラを含む茶褐色土
7　2～3㎜の御池ボラを含む褐色土
8　硬化層（3～4㎜の御池ボラを含む褐色土）
9　硬化層（2～10㎜の御池ボラ・御池ボラ小ブロックを含む淡褐色土）
10　2～5㎜の御池ボラ少量・砂粒を含む褐色シルト
11　砂粒を含む暗褐色土
12　3～10㎜の御池ボラ・御池ボラブロック・砂粒を含む淡褐色土混土層
13　御池ボラブロック・砂粒を含む暗褐色土

0　1　2 m

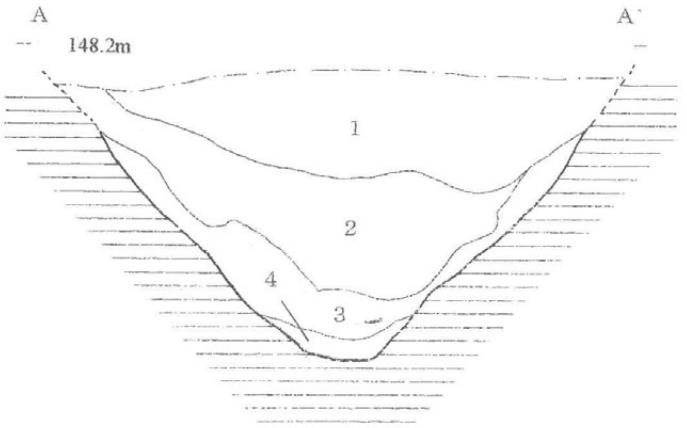
第27図　D区東壁土層断面図



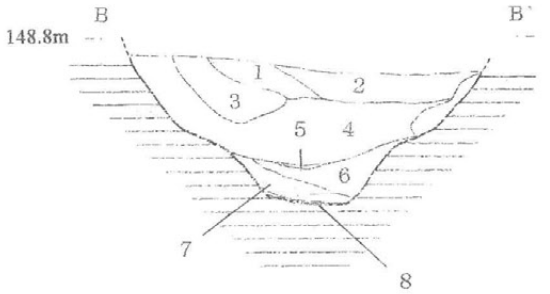
第28図　SB-4 、SC-14、SF-10・11、SL-1 実測図および SB-4 内出土遺物実測図



第29図　ＳＣ 14 および出土遺物実測図

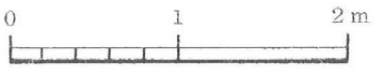


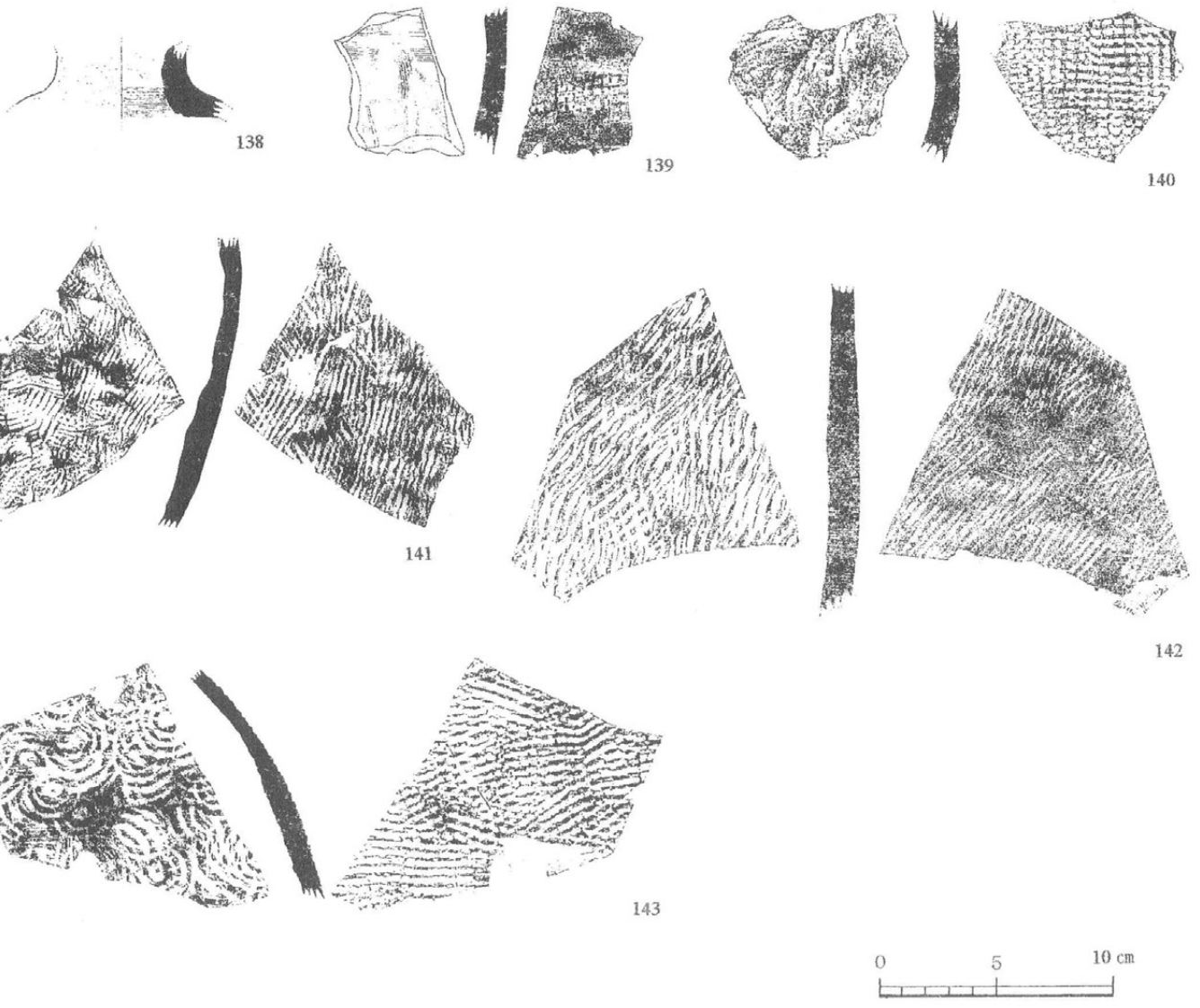
1　御池ボラブロック・アカホヤブロック・黒褐色土ブロック混土層
2　2～10㎜の御池ボラ多量・黒褐色土ブロックを含む暗褐色土
3　1～2㎜の御池ボラを含む暗褐色シルト（ややハード）
4　2㎜の御池ボラを含む淡褐色土（ソフト）



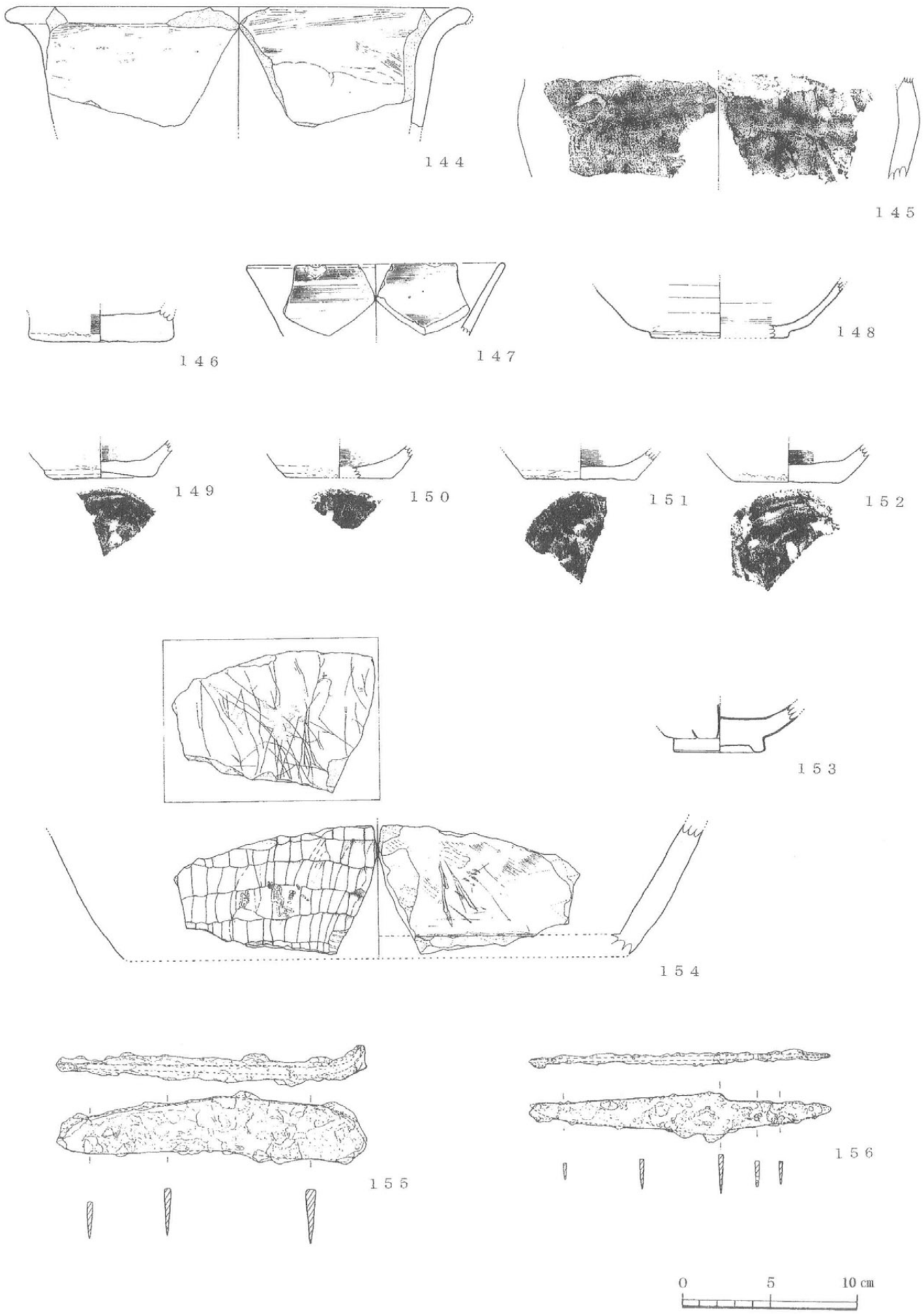
1　2～10㎜の御池ボラを多量含む淡褐色土
2　3～5㎜の御池ボラを含む暗褐色土
3　2～10㎜の御池ボラを少量含む暗褐色土
4　1～20㎜の御池ボラを含む褐色土（ハード）
5　黒色土
6　1～10㎜の御池ボラを多量含む褐色土
7　1～10㎜の御池ボラを多量含む淡褐色土
8　黄褐色粘質土

第30図　ＳＤ－３土層断面図

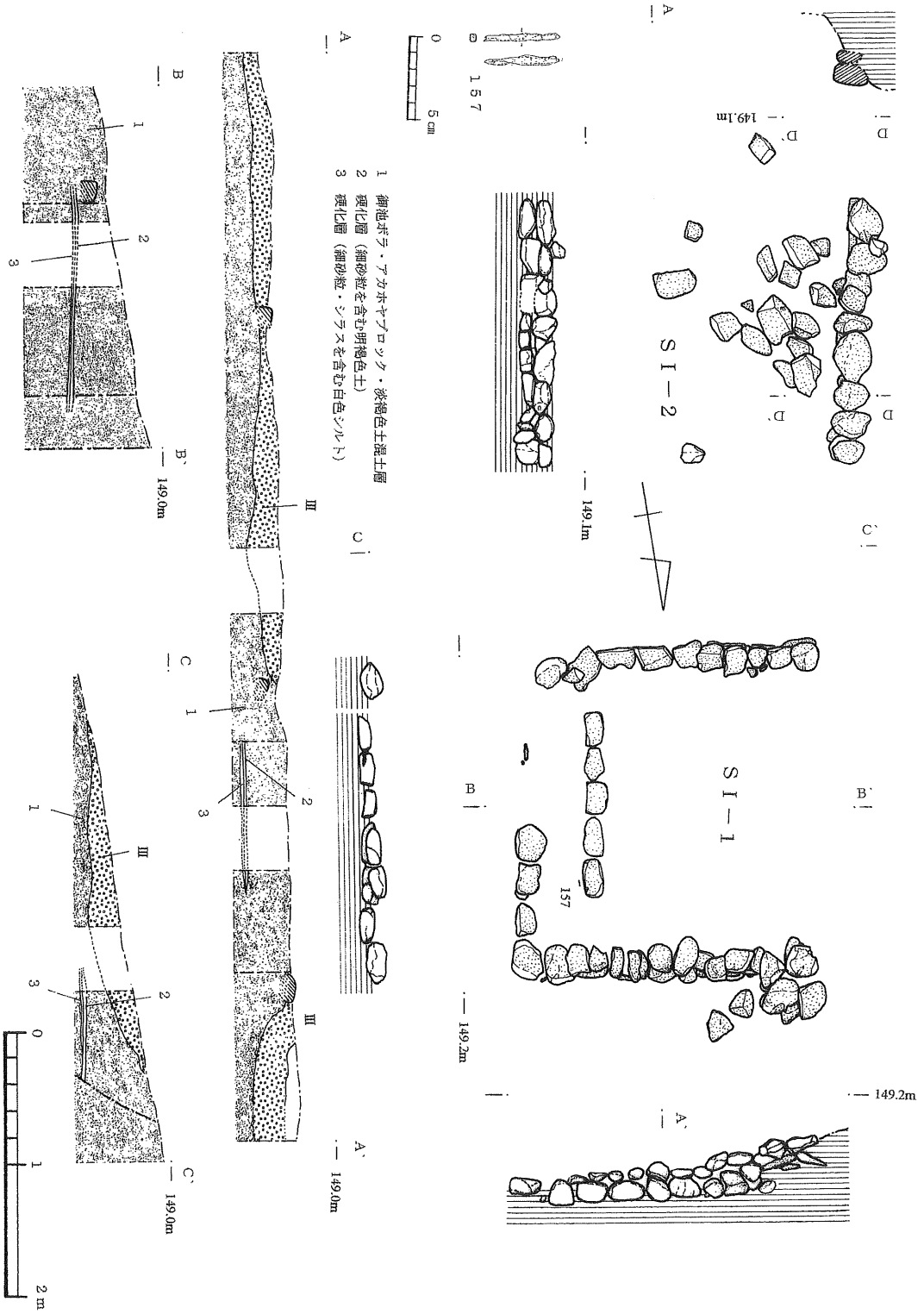




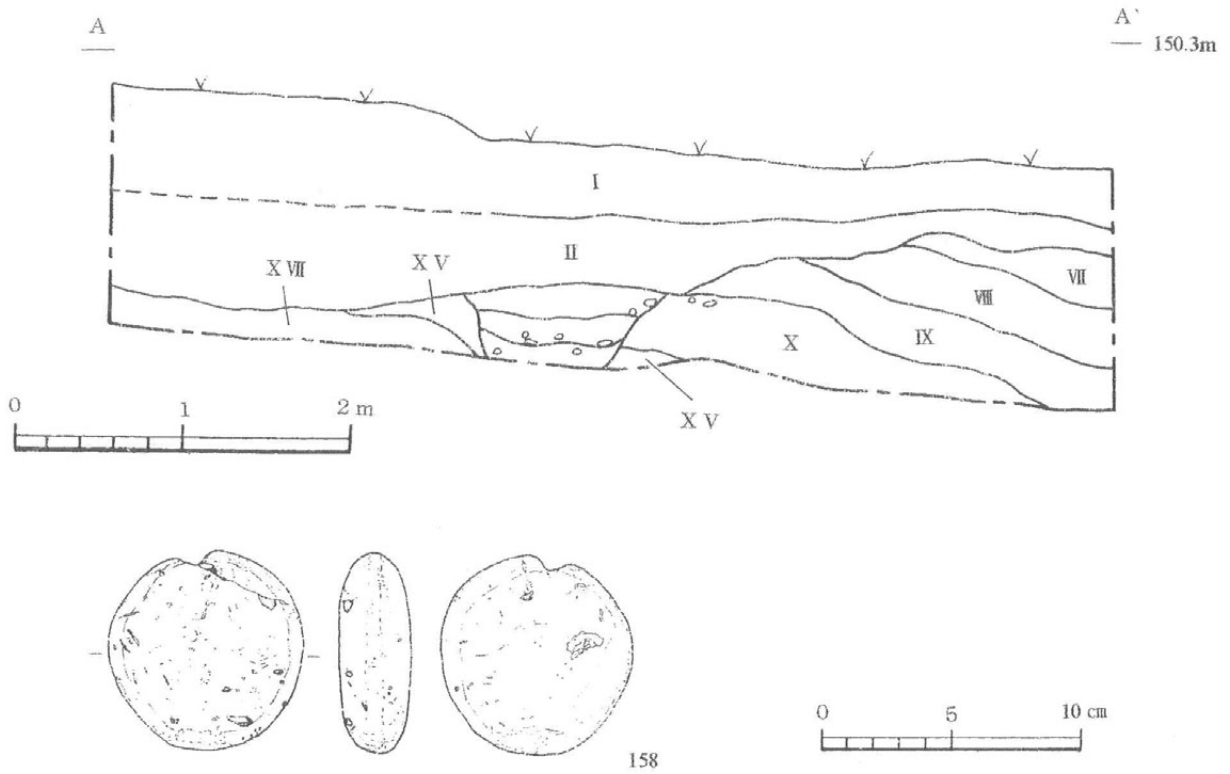
第31図　ＳＤ－３内出土遺物実測図（１）



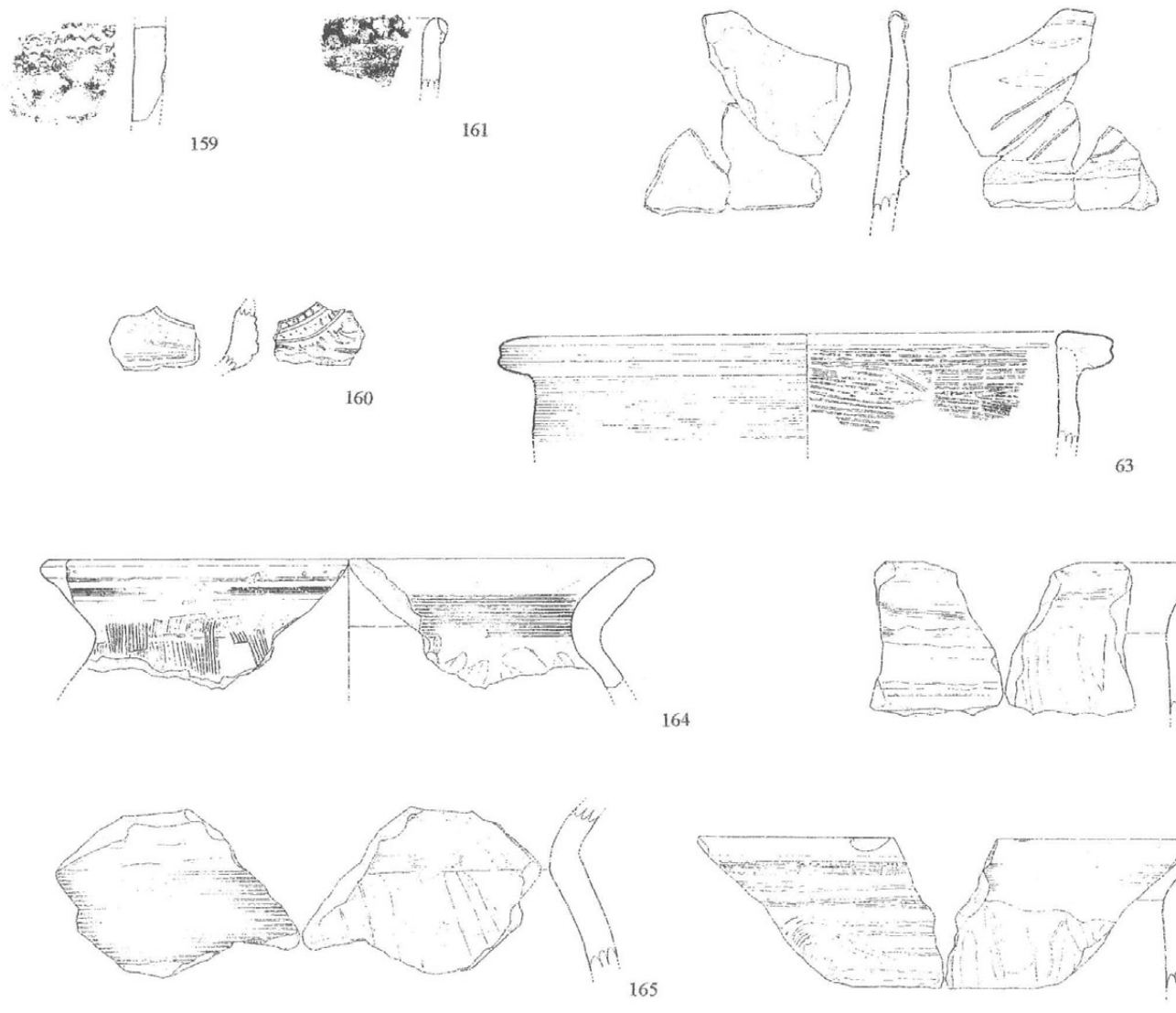
第32図　ＳＤ－３内出土遺物実測図（２）



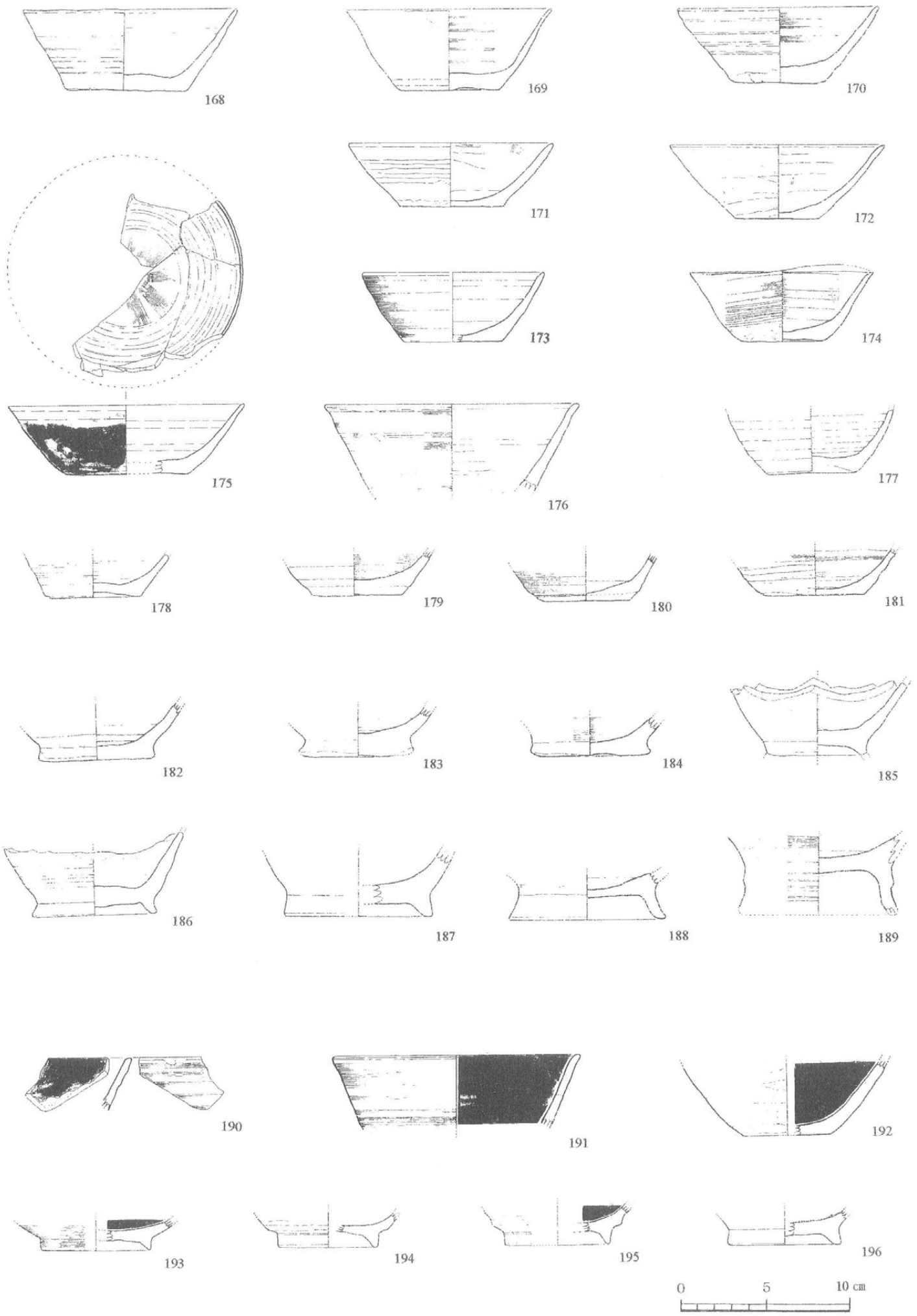
第33図　ＳＩ－１・２およびＳＩ－内出土遺物実測図



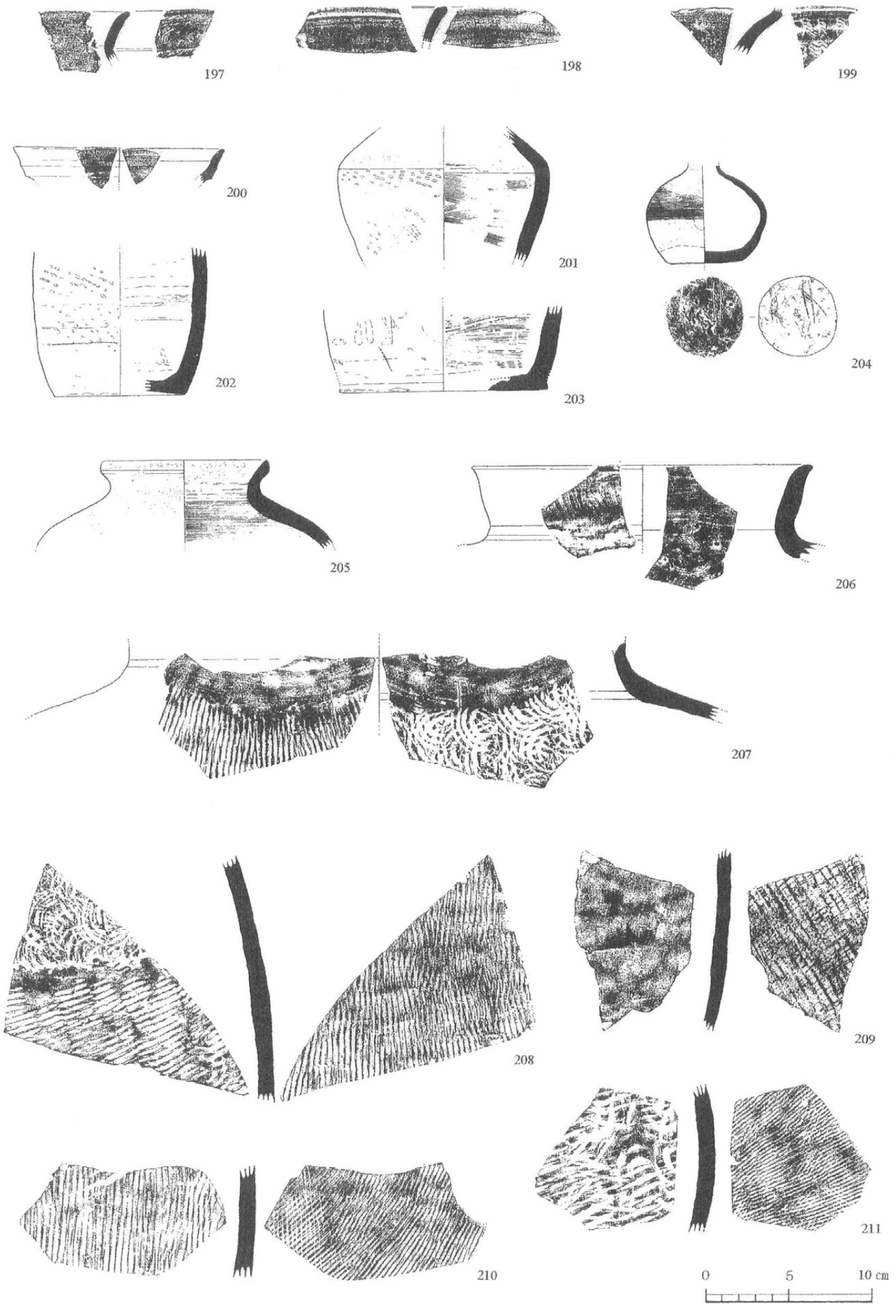
第34図　D区北壁（SS－1）土層断面図およびSS－1内出土遺物実測図



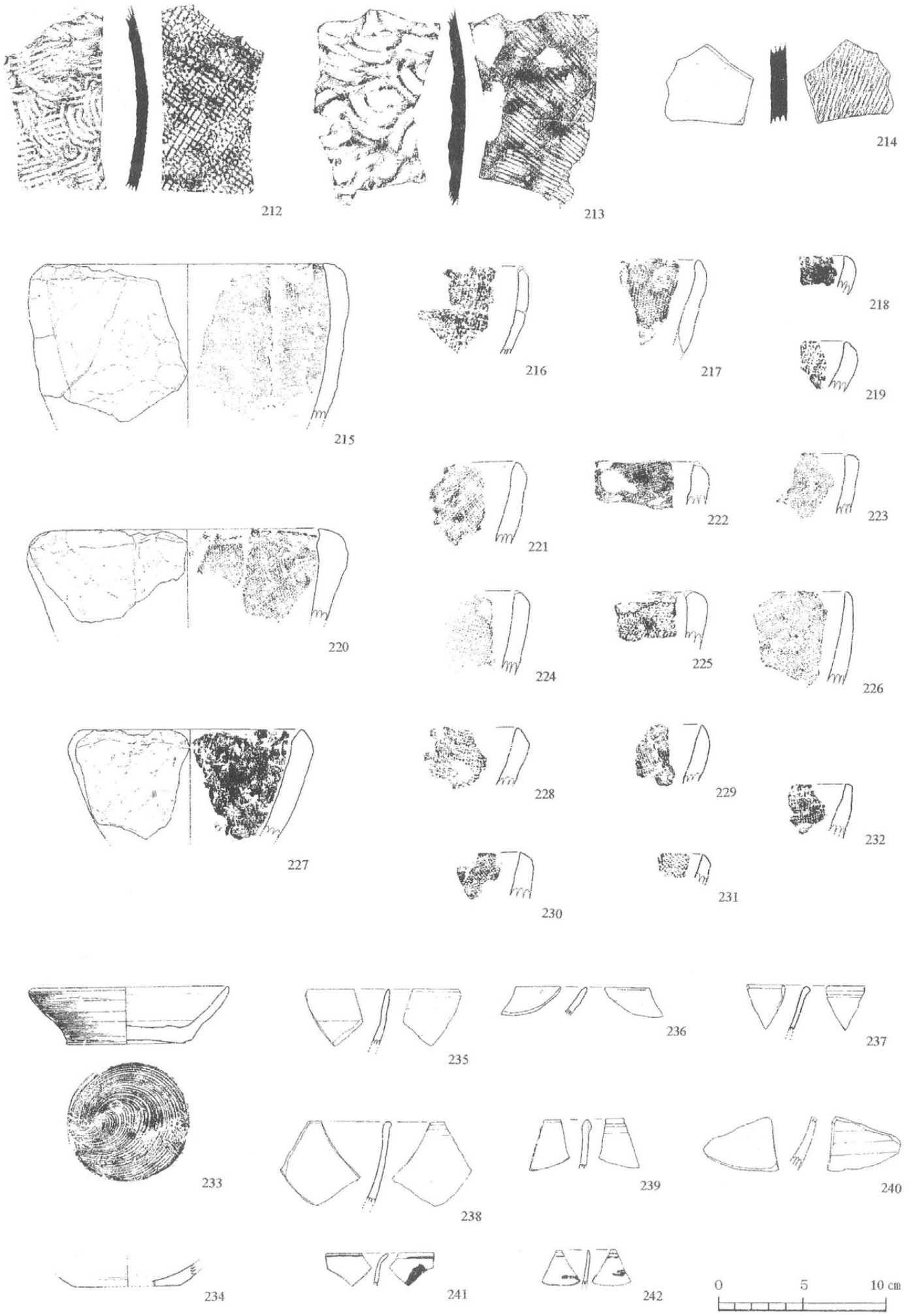
第35図　D区包含層内出土遺物実測図（1）



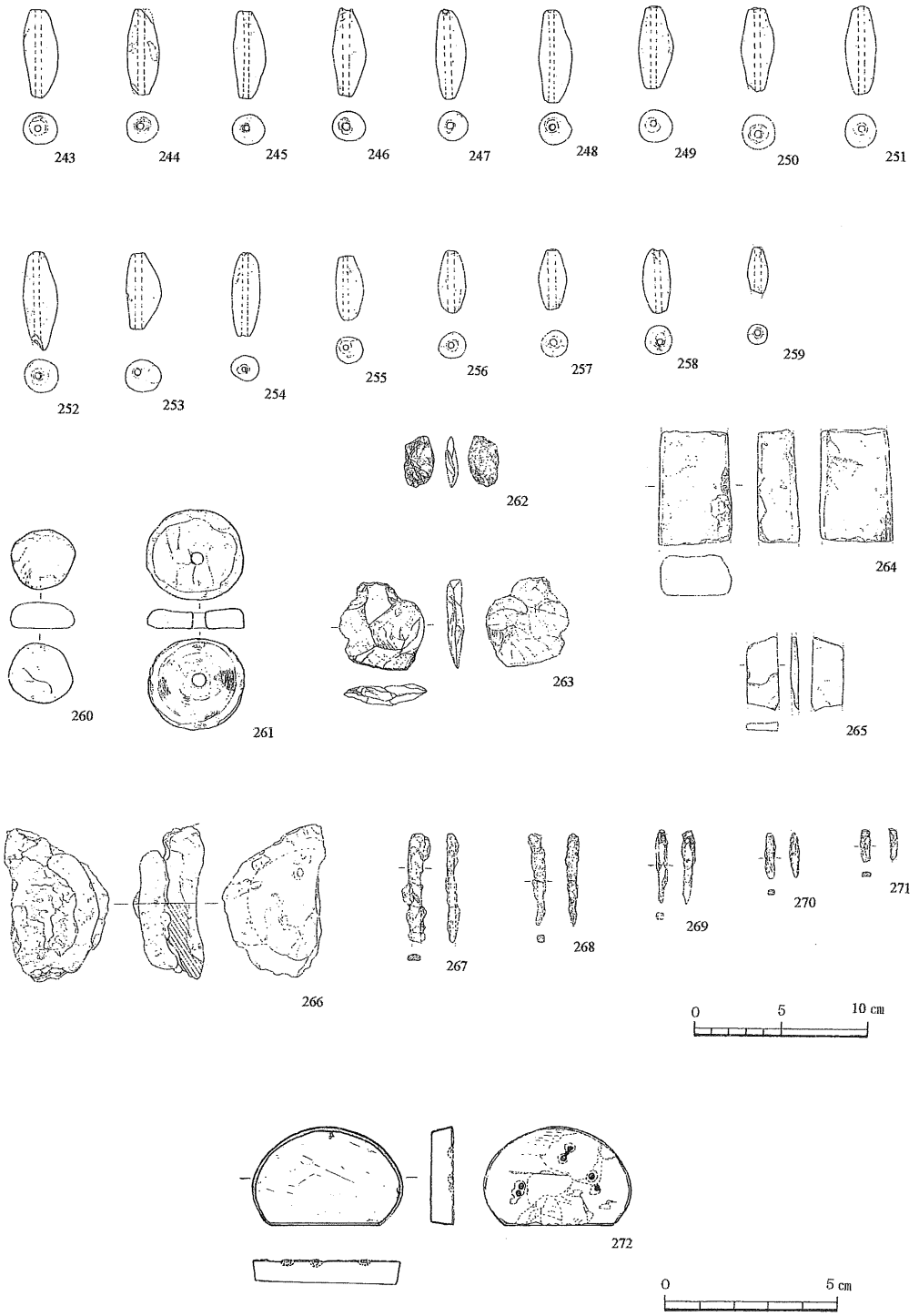
第36図　D区包含層内出土遺物実測図（2）



第37図　D区包含層内出土遺物実測図（3）



第38図　D区包含層内出土遺物実測図（4）



第39図　D区包含層内出土遺物実測図（5）

表7　D区出土遺物観察表（1）

掲載番号	出土区・遺構	層	種別	器種	色調 外面	色調 内面	胎土・混和剤	特徴・備考
129	SB04	PIT	土師器	坏か椀	橙	橙	極微小の鉱物・砂粒	（古代） 内・外面共に焼成不良
130	SB04	PIT	土師器	坏か椀	にぶい橙	にぶい橙	極微小の鉱物・砂粒	（古代）
131	SB04	PIT	土師器	坏か椀	にぶい黄橙	にぶい黄橙	極微小の鉱物・砂粒	（古代）
132	SB04	PIT	土師器	坏か椀	橙	橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古代）
133	SB04	PIT	黒色土器	坏か椀	にぶい橙	黒	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 黒色土器A類 内面ミガキ 外面の一部焼成不良
134	SB04	PIT	土師器	高台付椀	浅黄橙	浅黄橙	極微小の鉱物・砂粒	（古代）
135	SB04	PIT	土師器	坏	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古代） 底部ヘラ切り後底部外面立ち上がりヘラケズリ仕上げ
136	SB04	PIT	鍛冶関連	椀型鍛冶滓	黒褐	—	—	（古代？） 表面に赤錆を帯びる 重量感があり鉄分多し 鍛錬鍛冶 重量：59.5g
137	SC14	—	土師器	坏か椀	橙	橙	極微小の鉱物・砂粒	（古代か中世） 小破片の為年代不詳
138	SD03	—	須恵器	壺	褐灰	褐灰	3mm以下の鉱物・砂礫	
139	SD03	—	須恵器	転用硯	灰	灰	5ミリ以下の鉱物・砂	（古代） 二次転用品 甕の胴部片の内面に著しい擦痕がみられる
140	SD03	—	須恵器	甕	灰黄	にぶい赤褐	2mm以下の鉱物・砂粒	
141	SD03	—	須恵器	甕	にぶい赤褐	黄灰	2mm以下の鉱物・砂粒	内面に指頭圧痕
142	SD03	—	須恵器	甕	にぶい赤褐	灰	9mm以下の鉱物・砂礫	
143	SD03	—	須恵器	甕	灰	灰	極微小の鉱物・砂粒	
144	SD03	—	土師器	甕	にぶい赤褐	橙	5mm以下の鉱物・砂礫	（古代） 体部内面に明瞭なヘラケズリ痕
145	SD03	—	土師器	甕	橙	橙	5mm以下の鉱物・砂礫	（古代） 体部内面に明瞭なヘラケズリ痕 外面にススト付着および布目痕
146	SD03	—	土師器	甕	橙	橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代）
147	SD03	—	土師器	坏か椀	橙	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 外面に黒色物付着
148	SD03	—	土師器	坏	橙	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古代）
149	SD03	—	土師器	坏	にぶい橙	にぶい褐	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り
150	SD03	—	土師器	坏	橙	灰黄褐	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後底部外面立ち上がりヘラケズリ仕上げ
151	SD03	—	土師器	坏	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古代） 底部ヘラ切り
152	SD03	—	土師器	坏	浅黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り 内面に黒色物付着
153	SD03	—	青磁	椀	オリーブ灰	オリーブ灰	褐灰 良	（13世紀前半） 鎬連弁 龍泉窯系Ⅱ－b
154	SD03	—	滑石製品	鍋	—	—	—	外面にススト・炭化物？付着およびノミ痕跡 内面に炭化物付着
155	SD03	—	鉄製品	鎌	—	—	—	曲刃鎌 全長18.1cm・刃長15cm・幅3.21cm・背厚0.6cm・重量114.3g
156	SD03	—	鉄製品	刀子	—	—	—	全長17.8cm・刃長約11.4cm・幅2.6cm・背厚0.4cm・重量36.7g・目釘穴径2.5mm 平造り 背関・刃関
157	SI01	—	鉄製品	釘	—	—	—	角釘（和釘） 断面ほぼ正方形 頭部は欠損しており形態不明 全体著しく腐食 重量：3.0g
158	SS01	—	石器？	—	—	—	—	凝灰岩 外面に赤色顔料？付着 重量：133.0g
159	O－12	表採	縄文土器	深鉢	にぶい褐	橙	5mm以下の鉱物・砂礫	（縄文時代早期前半） 押型文系
160	E－12	表採	縄文土器	深鉢	明赤褐	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（縄文時代後期） 西平式
161	E－8	Ⅳ	縄文土器	深鉢	黒褐	にぶい赤褐	1mm以下の鉱物・砂粒	（縄文時代晩期後半） 刻目突帯文
162	E－8	Ⅳ	縄文土器	鉢	にぶい黄橙	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（縄文時代晩期後半）
163	E－8	Ⅳ	弥生土器	甕	褐灰	明黄褐	3mm以下の鉱物・砂礫	（弥生時代中期）
164	F－8	Ⅳ	土師器	甕	橙	橙	5mm以下の鉱物・砂礫	（古代）
165	E－8	Ⅳ	土師器	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古代） 体部内面に明確なヘラケズリ痕
166	E－8	Ⅳ	土師器	甕	橙	黄橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古代） 体部内面にヘラケズリ痕
167	E－8	Ⅳ	土師器	甕	橙	橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古代） 体部内面にヘラケズリ痕 外面にスス？付着
168	E－8	Ⅳ	土師器	坏	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り

表8　D区出土遺物観察表（2）

掲載番号	出土区・遺構	層	種別	器種	色調 外面	色調 内面	胎土・混和剤	特徴・備考
169	E−8	Ⅳ	土師器	坏	橙	黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り
170	E−8	Ⅳ	土師器	坏	浅黄橙	橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古代） 底部ヘラ切り 内・外面にスス付着
171	E−8	Ⅳ	土師器	坏	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ
172	E−9	Ⅳ	土師器	坏	橙	にぶい橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ 底部外面立ち上がりヘラケズリ仕上げ
173	F−7	Ⅳ	土師器	坏	浅黄	浅黄	極微小の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ
174	E−8	Ⅳ	土師器	坏	にぶい黄橙	黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ
175	F−8	Ⅳ	土師器	坏	黒褐	橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ 底部内面に放射状調整痕 外面全体および内面の一部にスス付着
176	E−8	Ⅳ	土師器	坏か椀	橙	明赤褐	2mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 内面にスス付着
177	E−8	Ⅳ	土師器	坏	橙	橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ 内・外面にスス付着
178	E−8	Ⅳ	土師器	坏	橙	橙	極微小の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り
179	E−8	Ⅳ	土師器	坏	浅黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ 底部外面立ち上がりヘラケズリ仕上げ 外面にスス付着
180	E−8	Ⅳ	土師器	坏	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ 底部外面立ち上がりヘラケズリ仕上げ
181	E−9	Ⅳ	土師器	坏	橙	浅黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ
182	E−8	Ⅳ	土師器	坏	橙	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ
183	E−9	Ⅳ	土師器	坏	橙	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り 外面にスス付着
184	E−8	Ⅳ	土師器	坏	灰黄褐	灰黄褐	極微小の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ 内・外面焼成不良
185	E−8	Ⅳ	土師器	高台付椀	橙	橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ 外面の一部焼成不良
186	E−8	Ⅳ	土師器	高台付椀	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ
187	E−8	Ⅳ	土師器	高台付椀	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	（古代） 内面に赤色顔料塗布
188	F−8	Ⅳ	土師器	高台付椀	橙	橙	4mm以下の鉱物・砂礫	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ
189	F−8	Ⅳ	土師器	高台付椀	橙	橙	3mm以下の鉱物・砂礫	（古代） 底部ヘラ切り後ナデ
190	E−7	Ⅳ	黒色土器	坏か椀	にぶい黄橙	黒	極微小の鉱物・砂粒	（古代） 内面ミガキ 黒色土器A類〈内面にのみ炭素を吸着〉
191	E−9	Ⅳ	黒色土器	坏か椀	にぶい黄橙	黒	極微小の鉱物・砂粒	(古代)内面ミガキ 黒色土器A類
192	E−8	Ⅳ	黒色土器	坏	にぶい黄橙	黒	1mm以下の鉱物・砂粒	(古代) 内面ミガキ 黒色土器A類
193	E−8	Ⅳ	黒色土器	高台付椀	浅黄橙	黒	極微小の鉱物・砂粒	(古代) 内面ミガキ 黒色土器A類
194	E−8	Ⅳ	黒色土器	高台付椀	にぶい橙	黒	1mm以下の鉱物・砂粒	(古代) 内面ミガキ 黒色土器A類
195	E−8	Ⅳ	黒色土器	高台付椀	橙	黒	極微小の鉱物・砂粒	(古代) 内面ミガキ 黒色土器A類 外面にスス？付着
196	F−8	Ⅳ	黒色土器	高台付椀	橙	黒	3mm以下の鉱物・砂礫	(古代) 内器面が著しく剥落
197	E−8	Ⅳ	須恵器	壺？	褐灰	褐灰	1mm以下の鉱物・砂粒	外面に線刻？あり
198	E−8	Ⅳ	須恵器	壺	褐灰	にぶい黄橙	2mm以下の鉱物・砂粒	
199	E−9	Ⅳ	須恵器	壺	褐灰	にぶい黄褐	2mm以下の鉱物・砂粒	外面に櫛描波状文
200	E−8	Ⅳ	須恵器	壺	褐灰	褐灰	極微小の鉱物・砂粒	
201	E−8	Ⅳ	須恵器	壺	灰オリーブ	灰黄褐	極微小の鉱物・砂粒	外面に自然釉がかかる
202	E−8	Ⅳ	須恵器	壺	灰オリーブ	黄灰	極微小の鉱物・砂粒	外面に自然釉がかかる
203	E−8	Ⅳ	須恵器	壺	灰	灰	2mm以下の鉱物・砂粒	
204	E−8	Ⅳ	須恵器	小壺	灰オリーブ	暗灰黄	3mm以下の鉱物・砂礫	底面に3条の線刻 外面に自然釉がかかる
205	E−8	Ⅳ	須恵器	甕	灰	灰オリーブ	1mm以下の鉱物・砂粒	口縁部内面に自然釉がかかる
206	E−8	Ⅳ	須恵器	甕	黄灰	黄灰	4mm以下の鉱物・砂礫	
207	F−8	Ⅳ	須恵器	甕	灰オリーブ	灰	3mm以下の鉱物・砂礫	外面に自然釉がかかる
208	E−9	Ⅳ	須恵器	甕	灰オリーブ	灰	3mm以下の鉱物・砂礫	外面に自然釉がかかる 外面がやや風化

表9　D区出土遺物観察表（3）

掲載番号	出土区・遺構	層	種別	器種	色調 外面	色調 内面	胎土・混和剤	特徴・備考
209	E−9	Ⅳ	須恵器	甕	にぶい黄橙	にぶい赤褐	3mm以下の鉱物・砂礫	
210	E−8	Ⅳ	須恵器	甕	灰褐	橙	2mm以下の好物・砂粒	
211	E−8	Ⅳ	須恵器	甕	灰オリーブ	灰	3mm以下の鉱物・砂礫	外面に自然釉がかかる　外面がやや風化
212	E−8	Ⅳ	須恵器	甕	灰黄	灰黄	極微小の鉱物・砂粒	
213	F−8	Ⅳ	須恵器	甕	橙	橙	1mm以下の鉱物・砂粒	土師質
214	E−8	Ⅳ	須恵器	転用硯	黄灰	灰白	1mm以下の鉱物・砂粒	〈古代〉 二次転用品 〈甕の胴部片の〉内面に著しい擦痕がみられ、当て具痕が摩滅している
215	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	橙	2mm以下の好物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕
216	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	橙	2mm以下の好物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕　内面やや風化
217	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	橙	2mm以下の好物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕　外面の一部剥落
218	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	にぶい橙	にぶい橙	5mm以下の鉱物・砂礫	〈古代〉 内面に布目圧痕　内面やや風化
219	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の好物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕　内面やや風化
220	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	橙	5mm以下の鉱物・砂礫	〈古代〉 内面に布目圧痕　内面一部風化
221	E−6	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	にぶい橙	極微小の鉱物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕
222	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	赤橙	橙	1mm以下の鉱物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕　内面やや風化
223	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	灰黄褐	にぶい橙	2mm以下の好物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕
224	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	にぶい橙	1mm以下の鉱物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕
225	G−7	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	橙	1mm以下の鉱物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕　内面やや風化
226	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	橙	6mm以下の鉱物・砂礫	〈古代〉 内面に布目圧痕
227	F−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	黄橙	橙	4mm以下の鉱物・砂礫	〈古代〉 内面に微弱な布目圧痕　内面風化
228	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	にぶい黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕
229	F−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	赤橙	橙	1mm以下の鉱物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕
230	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	橙	1mm以下の鉱物・砂粒	〈古代〉 内面に布目圧痕　内面やや風化
231	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	橙	4mm以下の鉱物・砂礫	〈古代〉 内面に布目圧痕
232	E−8	Ⅳ	製塩土器	焼塩壺	橙	橙	4mm以下の鉱物・砂礫	〈古代〉 内面に布目圧痕　内面やや風化
233	E−8	PIT	土師器	坏	にぶい黄橙	浅黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	〈古代〉 底部糸切り　外面に指頭痕
234	E−8	Ⅳ	土師器	坏	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の鉱物・砂粒	底部糸切り？　外面風化
235	E−8	Ⅳ	青磁	椀	オリーブ黄	オリーブ黄	灰良	〈10世紀前半〉 越州窯系　Ⅱ類
236	E−8	Ⅳ	青磁	皿？	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白精良	〈12世紀後半〉 龍泉窯系　Ⅰ類
237	D−12	Ⅳ	白磁	椀	白	白	灰白精良	〈10世紀後半～11世紀代〉 ⅩⅠ類
238	E−9	Ⅳ	白磁	椀	白	白	灰白精良	〈10世紀後半～11世紀代〉 ⅩⅠ類　玉縁口縁
239	E−9	Ⅳ	白磁	椀	白	白	灰白精良	〈10世紀後半～11世紀代〉 ⅩⅠ類
240	E−8	Ⅳ	白磁	椀	白	白	灰白精良	〈10世紀後半～11世紀代〉 ⅩⅠ類
241	E−13	Ⅳ	青花	椀	明オリーブ灰	明オリーブ灰	灰白精良	〈16世紀代〉 景徳鎮
242	E−13	Ⅳ	染付	椀	灰白	灰白	灰白精良	〈17世紀後半〉 肥前系
260	E−9	Ⅳ	土製品	―	浅黄橙	―	3mm以下の鉱物・砂礫	用途不明
261	E−8	Ⅳ	土師器	紡錘車	橙	浅黄橙	2mm以下の好物・砂粒	二次転用品　穿孔径0.85cm
262	D−10	表採	石器	剥片	―	―	―	黒曜石　重量:4.4g
263	F−7	Ⅳ	石器	スクレイパー	―	―	―	チャート　重量:28.0g
264	E−8	Ⅳ	石製品	砥石	―	―	―	砂岩　重量:135.5g　2面に研磨痕をのこす
265	E−9	Ⅳ	石製品	砥石	―	―	―	頁岩　重量:6.7g　1面に研磨痕をのこす

表10　ニタ元遺跡出土土錘一覧表

掲載番号	出土区	最大長(mm)	最大径(mm)	孔径		重量(g)
				最大(mm)	最小(mm)	
243	D区E－8	51.0	19.5	3.6	3.6	17.1
244	D区E－8	50.0	18.5	3.5	3.0	14.9
245	D区E－8	50.5	19.5	4.0	3.6	15.7
246	D区E－8	50.1	19.0	5.0	4.8	14.6
247	D区F－8	52.0	17.5	4.5	4.0	14.6
248	D区E－8	54.0	19.5	4.0	3.8	19.3
249	D区E－8	(48.5)	19.5	3.9	3.5	(16.1)
250	D区E－8	49.0	20.5	4.5	4.0	16.7
251	D区E－8	51.5	20.0	4.0	3.9	16.2
252	D区E－8	57.0	19.3	4.5	4.0	17.8
253	D区E－8	45.0	20.5	3.9	3.5	15.2
254	D区E－9	49.0	16.7	3.6	3.5	11.2
255	D区E－8	38.0	15.6	3.0	3.0	8.4
256	D区F－8	36.5	16.0	3.5	3.5	7.7
257	D区E－8	35.5	15.6	4.3	4.0	7.4
258	D区E－8	38.0	16.5	3.7	3.3	8.6
259	D区E－8	(27.5)	11.5	3.5	3.5	(3.0)

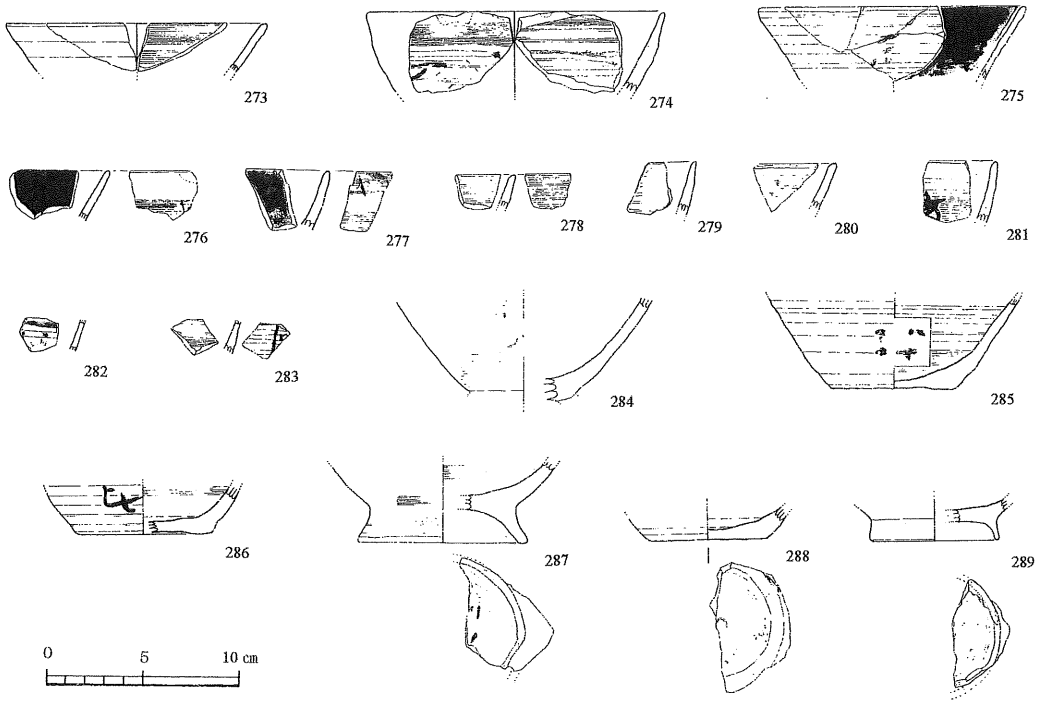
※ () 内は残存実測値

表11　D区出土遺物観察表(4)

掲載番号	出土区・遺構	層	種別	器種	色調		胎土・混和剤	特徴・備考
					外面	内面		
266	E－9	Ⅳ	鍛冶関連	椀型鍛冶滓	－	－	－	〈古代？〉 表面に赤錆を帯びる 重量感があり鉄分多し 鍛錬鍛造 側面の1面が破断面 重量:230.0g
267	E－8	Ⅳ	鉄製品	不明	－	－	－	刀子の茎？ 全体著しく腐食 重量:5.9g
268	F－8	Ⅳ	鉄製品	釘	－	－	－	角釘〈和釘〉 断面ほぼ正方形 腐食により頭部形態不明 全体著しく腐食 重量:4.8g
269	F－8	Ⅳ	鉄製品	釘	－	－	－	角釘〈和釘〉 断面ほぼ正方形 腐食により頭部形態不明 全体著しく腐食 重量:3.4g
270	F－8	Ⅳ	鉄製品	釘	－	－	－	角釘〈和釘〉 断面やや長方形 腐食により頭部形態不明 全体著しく腐食 重量:1.2g
271	F－8	Ⅳ	鉄製品	釘	－	－	－	角釘〈和釘〉 断面長方形 腐食により頭部形態不明 全体著しく腐食 重量:0.9g
272	E－8	Ⅳ	石製錘具	丸鞆	黒	－	－	〈古代〉 頁岩製 裏面の3箇所に装着用の潜り穴が設けられ、内2箇所の穴に腐食した金属線が残存sている 縦2.8cm 横4.4cm 厚さ0.7cm 重量:17.6g

6. ニタ元遺跡出土の墨書土器

ニタ元遺跡からは、計 17 個の墨書が施された土器片が出土した。その内、2片が黒色土器で、残りが土師器片であった。尚、詳細は**表12**を参照されたい。



第40図　ニタ元遺跡出土墨書土器実測図

表12　ニタ元遺跡出土墨書土器一覧表

掲載番号	出土区	遺構・層	種 別	器 種	墨書部位	墨書方向	判定文字
273	D区E-8	Ⅳ層	土師器	坏か椀	体部外面	逆	「万」
274	D区E-9	Ⅳ層	土師器	坏か椀	体部外面	正位？	「万」？
275	D区E-8	Ⅳ層	土師器	坏	体部外面	倒位	「土」
276	D区E-8	Ⅳ層	黒色土器	坏か椀	体部外面	倒位	「？」
277	D区E-8	Ⅳ層	黒色土器	坏か椀	体部外面	不明	「？」
278	D区E-8	Ⅳ層	土師器	坏か椀	体部外面	横位？	「？」
279	D区E-8	Ⅳ層	土師器	坏か椀	体部外面	正位	「？」
280	D区E-8	Ⅳ層	土師器	坏か椀	体部外面	正位	「？」
281	D区E-8	Ⅳ層	土師器	坏か椀	体部外面	正位	「？」
282	D区E-8	Ⅳ層	土師器	坏か椀	体部外面	正位	「？」
283	D区E-8	Ⅳ層	土師器	坏か椀	体部外面	正位	「？」
284	D区E-9	Ⅳ層	土師器	高台付椀	体部外面	不明	「日万」
285	D区E-8	Ⅳ層	土師器	坏	体部外面	倒位	「土」
286	D区	表採	土師器	坏	体部外面	倒位	「由・申」
287	D区E-8	Ⅳ層	土師器	高台付椀	底部外面	不明	「？」
288	D区E-9	Ⅳ層	土師器	坏	底部外面	不明	「奉・秦」
289	D区F-9	Ⅳ層	土師器	高台付椀	底部外面	不明	「？」

Ⅳ．小結

1．A･B区の考察

A・B 区からは、竪穴状遺構(住居)5 基、掘立柱建物跡３棟、道路状遺構９条、土坑 7 基、溝状遺構３条を検出した。

竪穴状遺構(住居)は、出土遺物より、古墳時代中期５世紀代と思われ、出土遺物の中でも、SA－５より出土した土師甕は口縁部が内傾しているといった特徴をもったタイプで、油田遺跡から同様の物が出土している。掘立柱建物跡は、2 棟が倉庫と思われ、１棟が用途不明である。いずれにしても、古墳時代中期５世紀代の、A・B 区の様相は倉庫群を伴った集落が存在していたと思われる。

また中世の遺構として、道路状遺構が９条検出され、内４条に底面に凹面がみられた。この様な底面に、凹面(ピット列)を伴う道路状遺構は数多くの事例が報告されており、用途目的については、①枕木やコロ説、②路床基礎工事説、③自然発生説(ポットホール説)、④排水施設説、⑤足掛かり説、⑥牛馬歩行説などがあるが、いずれも未だ特定されておらず、今後の発掘調査成果を待ちたい。溝状遺構については、縄文時代や古墳時代の遺物が出土したが、遺構の切り合い状況や、埋土の堆積状態からみて、それらの遺物は、流れ込みによるものと思われ、中世の遺構とした。土坑については、１基はその形状より土壙墓の可能性があるものの、他は出土遺物もなく用途不明である。

2．C区の考察

C 区の大半は SD－２が占める。A・B 区と比高差がかなりあり、C 区として区分けした。SD－２は幅 10 m(推定復元)・深さ 10 m(推定復元)にも及ぶ、巨大な溝で、その断面形状は薬研掘りを呈しており、溝の中ほどには、橋脚跡(**第25図**)と思われる遺構も検出されている。時期的には、出土遺物および、文明軽石の堆積状態からみて 14 ～ 15 世紀と思われ、後に述べる C 区の地業(中世の大造成工事)とほぼ同時期と考え、関連性もあると推察される。これほどに巨大な規模であり、薬研掘りでもある事から、防御施設と考えられ、出城や砦との関連性が考えられるが、堀の西側である A・B 区からは、それらしき遺構は検出されず、東側は現代の造成による破壊や竹根による撹乱により不明であった。また、特筆すべきは褐釉陶器が出土していることである。褐釉陶器は、城郭関係や寺社関係で出土する事が、数多く報告されており、都之城(主郭部)からも出土している。

3．D区の考察

D 区は前にも述べたが、旧地形の基盤層傾斜を埋める形で、御池ボラブロックと赤ホヤブロックが混合した土で版築されており、その直上に文明軽石が水平堆積していることから、15 世紀前半(室町時代)に大規模な造成(地業)がおこなわれたものと考える。その範囲については、**第41図**のアミかけ部分がそれにあたると思われるが、調査区の南側は戦後のシラス採取により破壊をうけており、実際の地業の範囲は調査区の東側(家屋があり調査不能であった)も含めて広範囲に及んでいたもの

と思われる。

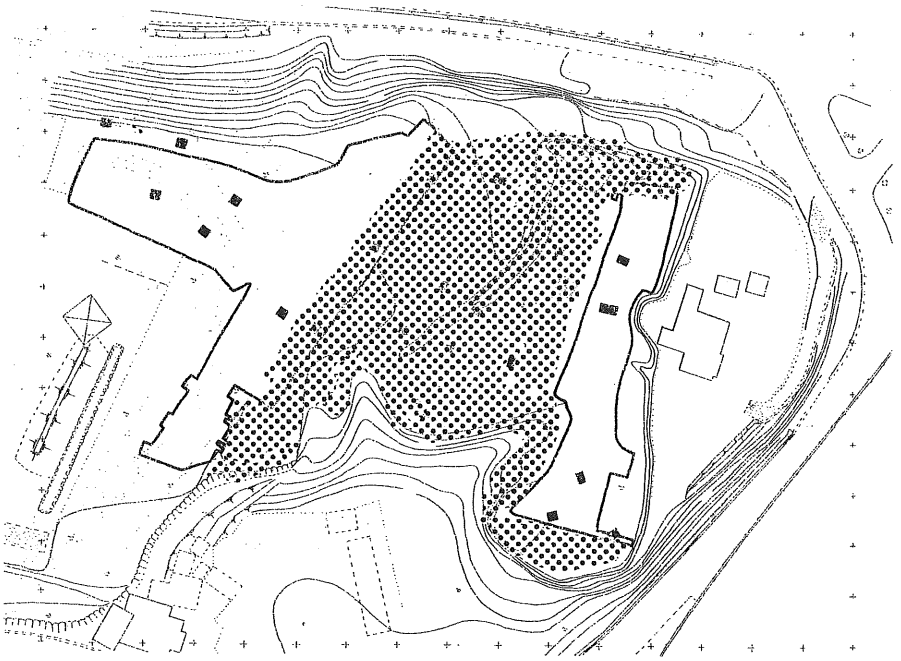
検出した遺構としては、地業面直上より、基壇と思われる石組遺構が１基、地業層を取り除いて、掘立柱建物跡１棟、土坑１基、道路状遺構２条、溝状遺構１条、柵列１、そして北壁の断面で集石１基を確認した。

前項でも述べたが、石組遺構は 15 世紀前半(室町時代)、掘立柱建物跡・土坑・道路状遺構が 10 ～ 11 世紀(平安中期)、溝状遺構は 11 ～ 13 世紀(平安中期～鎌倉時代)に比定されると考える。

出土遺物としては、多種多様に渡ったが、なかでも、石製銙具・硯(転用品)・墨書土器の３点が出土しており、文字関連遺物と石帯の出土は、集落の管理者であり、文字認識者階層であったとみなせられる、里(郷)長クラスの者が所在していた、平安時代中期の集落があった可能性を示唆している。

4. まとめ

最後にまとめると、古墳時代中期５世紀代にはＡ区に、倉庫を配した集落があり、平安時代中期 10 ～ 11 世紀には、Ｄ区に首長クラスの集落が存在していた事になる。そして、室町時代 14 ～ 15 世紀になると、大規模な造成工事(地業)が行なわれ、ＳＤ－２の大造営が始まる。地業は広範囲であり、ＳＤ－２は幅 10 m(推定復元)・深さ 10 m(推定復元)と、両方共に大規模であり、当時の権力者であった北郷氏との関わりも推察される。



第41図　中世の地業範囲想定図(１/1500)

前述した通り、この２つの大工事は、ほぼ同時期に行なわれたとみているが、地業の目的は、基壇跡と思われる遺構が検出されたことにより、寺院造営との関連が考えられ、ＳＤ－２(大堀)の方は、出城および砦との関連が考えられるが、遺跡の中心部分が、現代の破壊および竹根の影響が著しく、広範囲にわたり、調査不能であった為、両方共に断定するには至らなかった。

5. 文献・史料からみたニタ元遺跡

ニタ元遺跡を文献・史料からみていくと、**第42図** の幕末都之城図の北方、大淀川の屈曲部の西岸に本二厳寺という表記がみうけられる。対岸には宮丸蔵人退隠之地という表記が、本二厳寺の南方には二厳寺の表記がみられる。**第43図**は現代の遺跡周辺地図であるが、幕末都之城図の本二厳寺とほぼ同位置に、ニタ元遺跡が所在し、大淀川の対岸には、宮丸町という町名が現存している。

また、本二厳寺に関する一文が、「庄内地理誌」 巻７　二厳寺項　にある。以下が原文と解釈文である。

一当寺草創之事、讃岐守義久公第三之御子秋江和尚を以開山と御定、谷水流之上に建立、然に不意之焼失故寺地遷之由、又一説は大川流漸々岸を崩、終には境内鐘楼え崩掛、鐘大渕之底え埋り候に付、多勢を以可曳之処、川底之土中え埋り候歟、不及力置候（歟)、是に付川筋念遺敷故歟、其後当寺之西明寺屋敷え引移、十一世文甫和尚迄は彼地え有之、十二世漢室和尚之時、当地え引移有之候由、

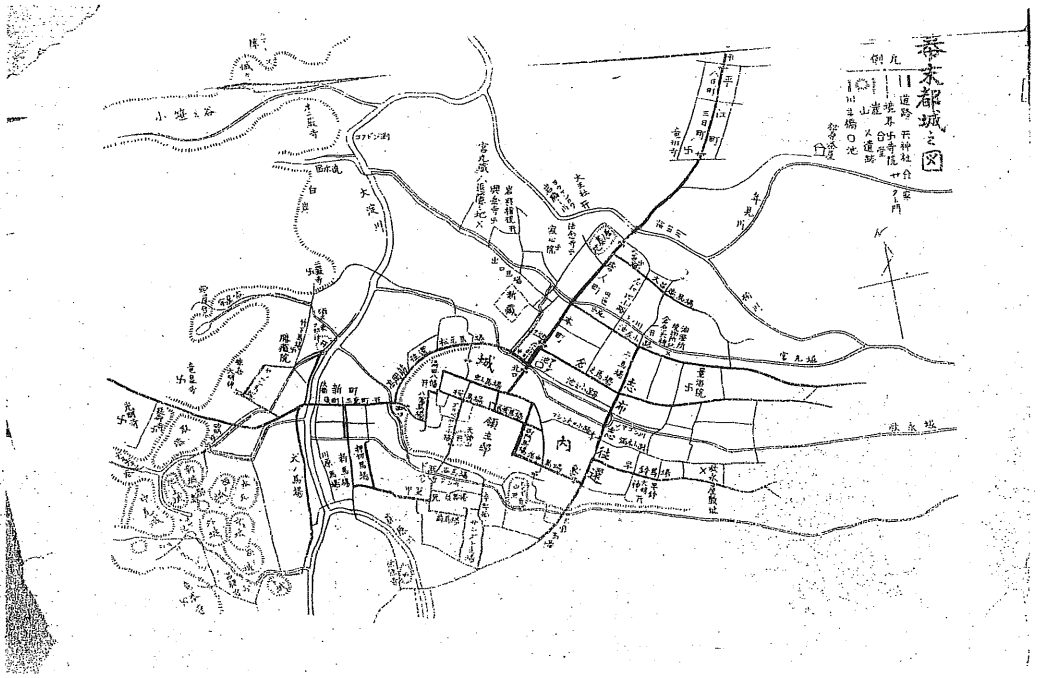
但谷水流之上え寺地之跡と申伝候処有之、古来川筋之形有之、北之高岸にて、以来南之方川筋にと相見得候、右鐘も于今土中え深く埋り居候半歟、

二厳寺の草創については、北郷家２代義久の第３子秋江和尚を開山と定め、谷水流のうえに建立した。しかし不慮の火事によって焼失したため寺地を移したという。また一説には、大淀川の流れが次第に岸を崩し、ついには境内の鐘楼を崩して、鐘が大渕へ落ちて、その底に埋ってしまったため、大勢で引きあげようとしたが川底の土へ埋ってしまったのか、力及ばず諦めた。これが契機となって、川筋は意のままにならないゆえか、その後西明寺屋敷へ移った。11 世文甫和尚迄は旧地にあり、12 世漢室和尚のときに現地に移った。

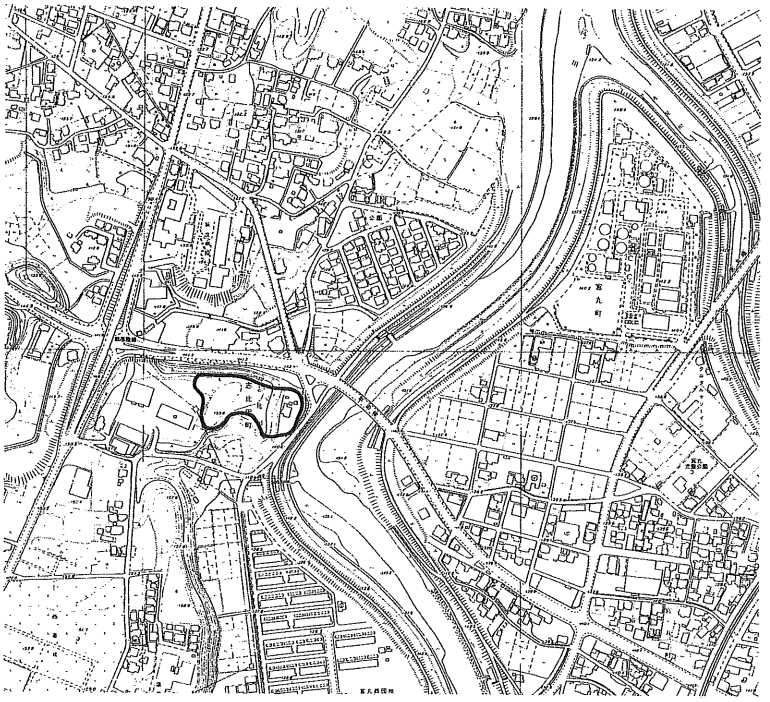
但し、谷水流のうえに寺地跡と伝えられる所がある。古来の川筋の形があり、北が高岸になって以来、南側に川筋をとったとみえる。先述の鐘は今も土中に深く埋もれているのだろうか。

6. あとがき

猛暑の中、短い工期という過酷な条件の中、作業に従事して頂いた作業員の方々、ならびに、調査から報告書作成まで御協力・教示いただいた文化課の諸氏、米沢英昭（鹿児島大学）氏に、謝意を申しあげたい。



第42図　幕末都城之図(「稿本　都城市史」　平成元年　都城史談会・前田厚)



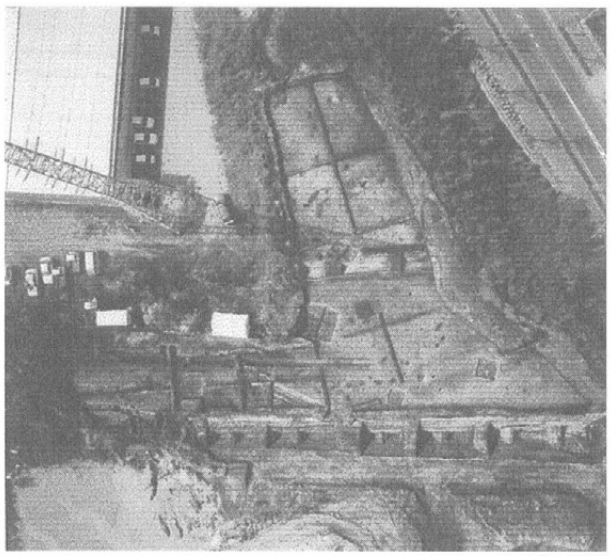
第43図　現在のニタ元遺跡周辺図(平成6年)

調査前遺跡遠景(南上空より　遺跡：中央)

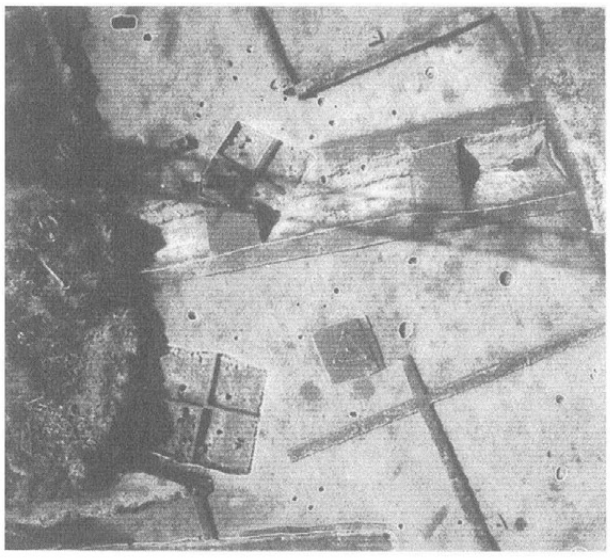
遺跡遠景(東上空より)

図版2

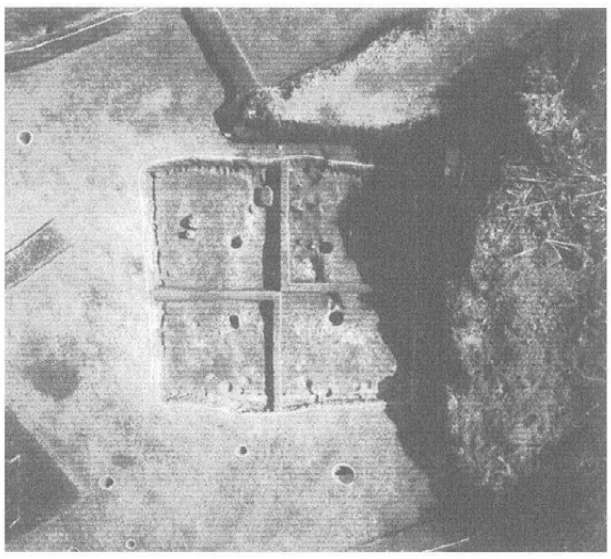
調査区全景



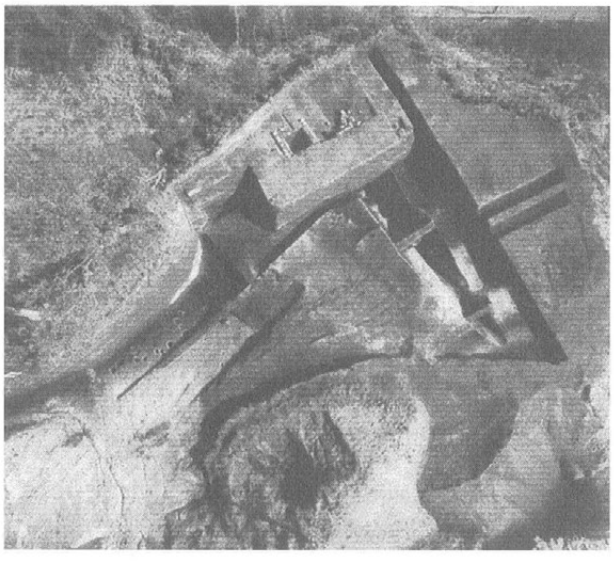
A・B・C区全景



SA4・5、SD－1

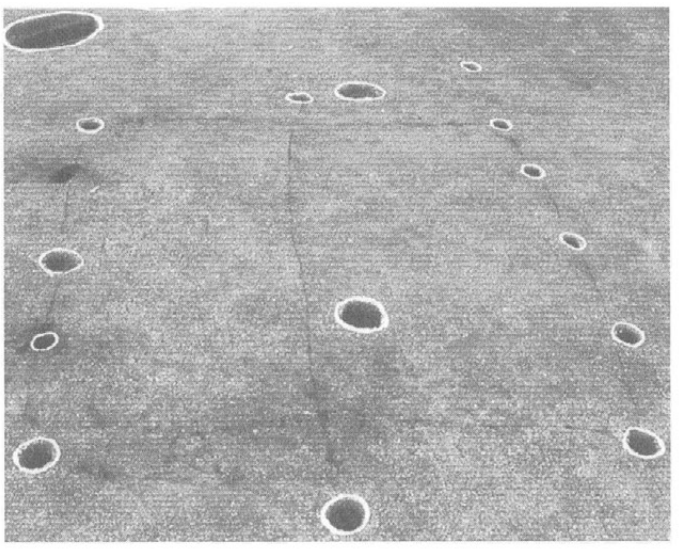


SA－4



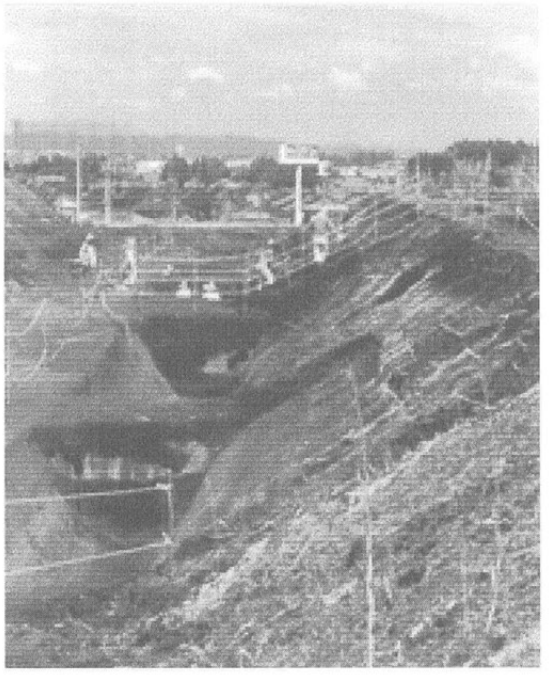
D区全景

SI－1

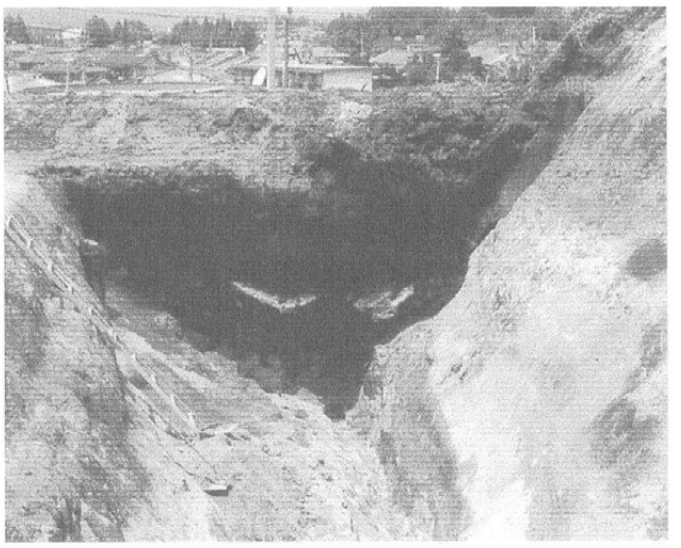


ＳＢ－２

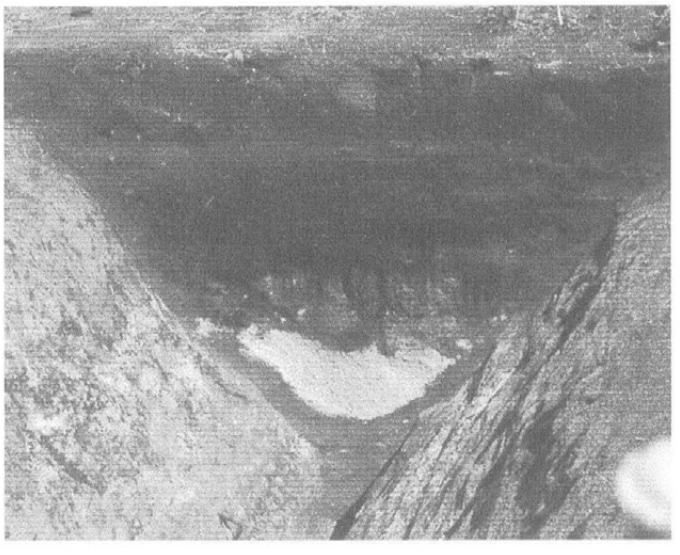
ＳＤ－２掘り下げ風景



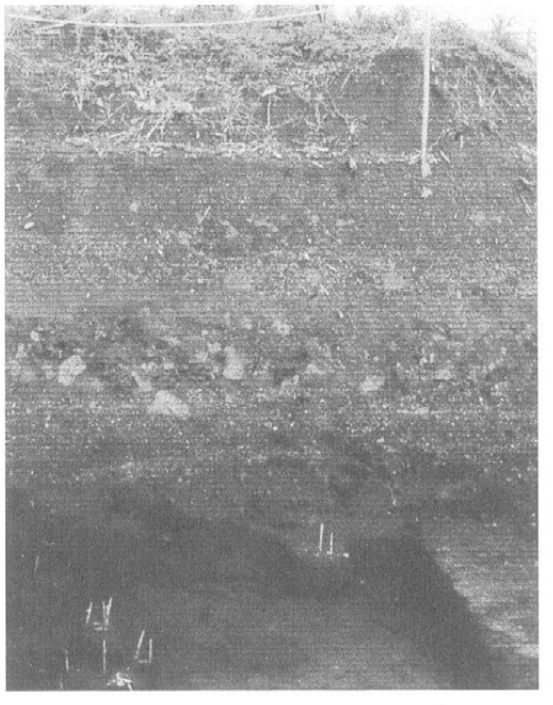
ＳＤ－２（北から）



ＳＤ－２南側断面

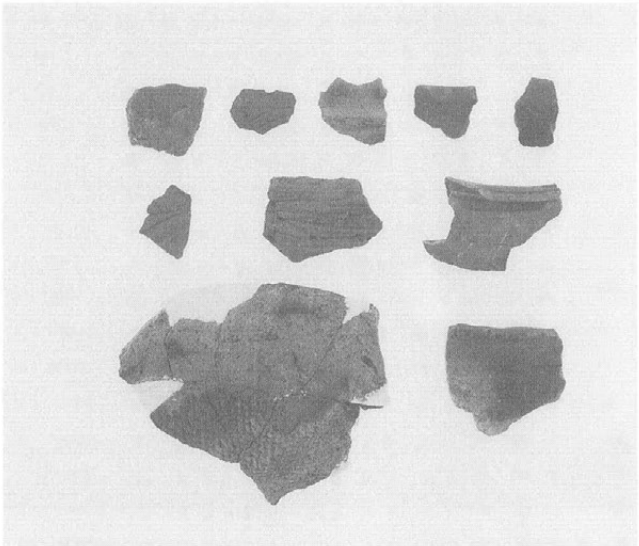


ＳＤ－２中央断面

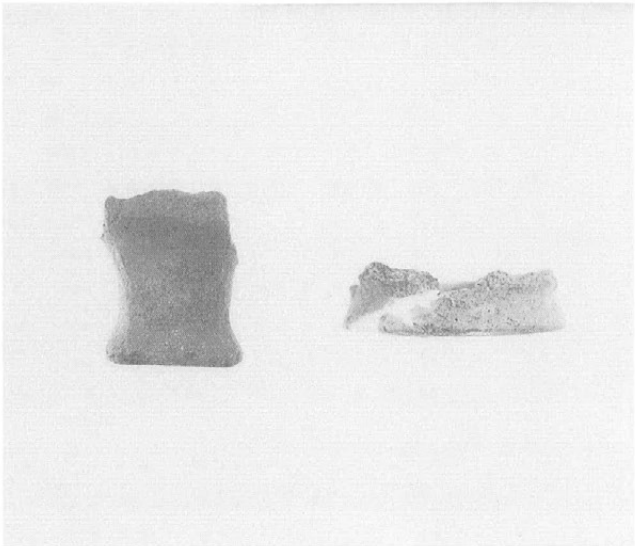


Ｄ区土層断面（地業跡）

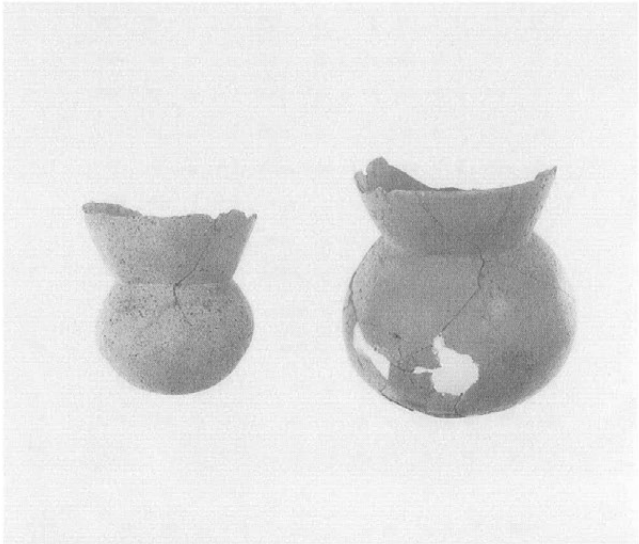
図版4



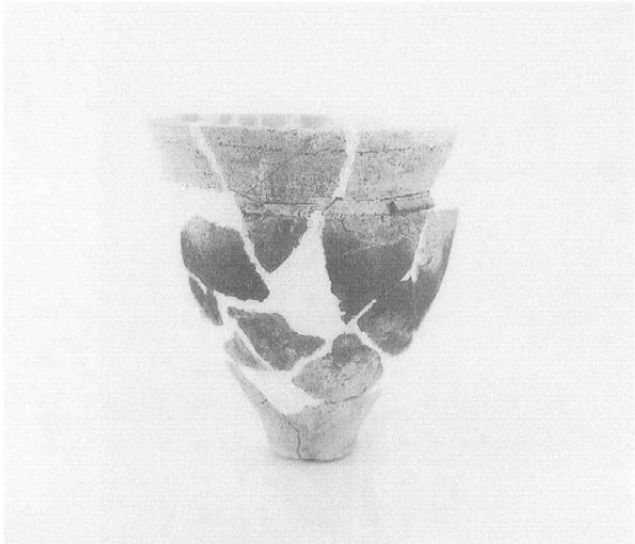
縄文時代



弥生時代



古墳時代(壺)

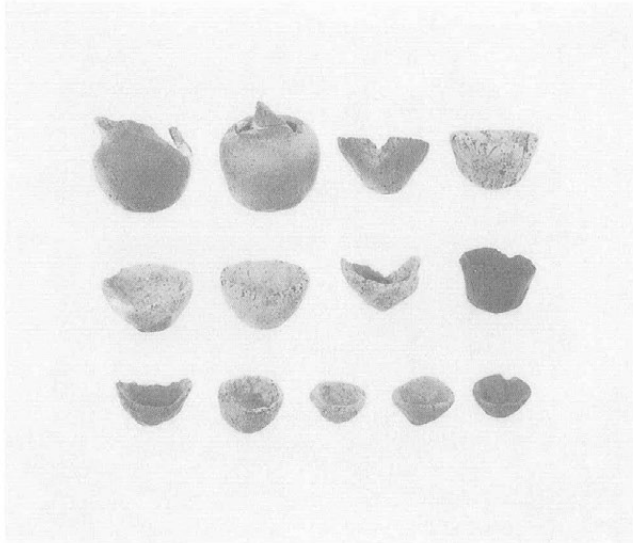


古墳時代(甕)

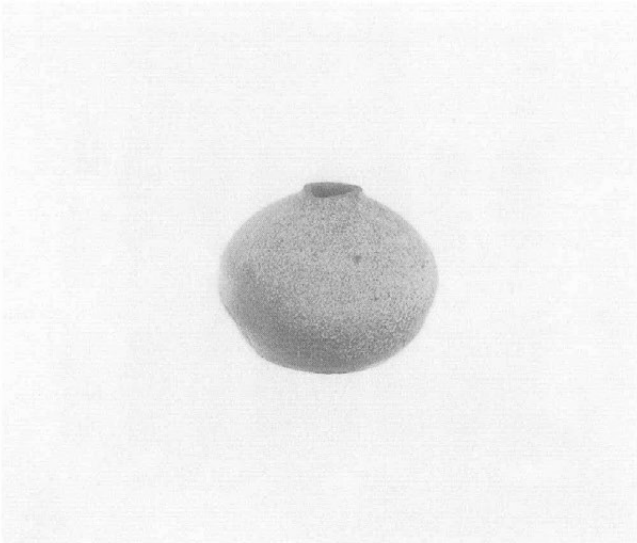
古墳時代(甕)

古墳時代(甕)

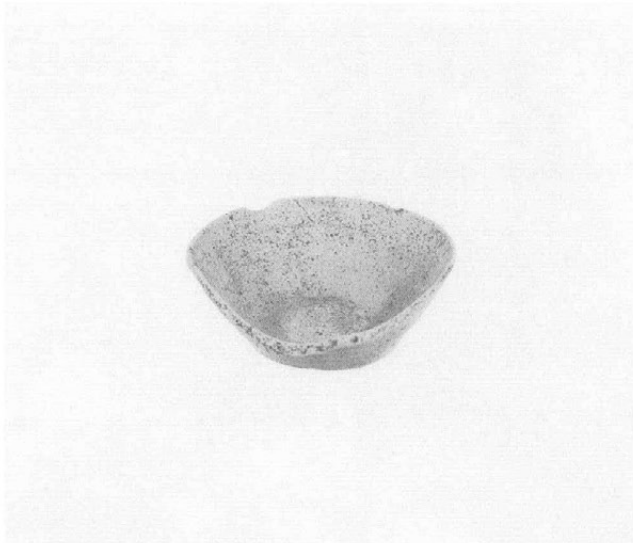
古墳時代(高坏)



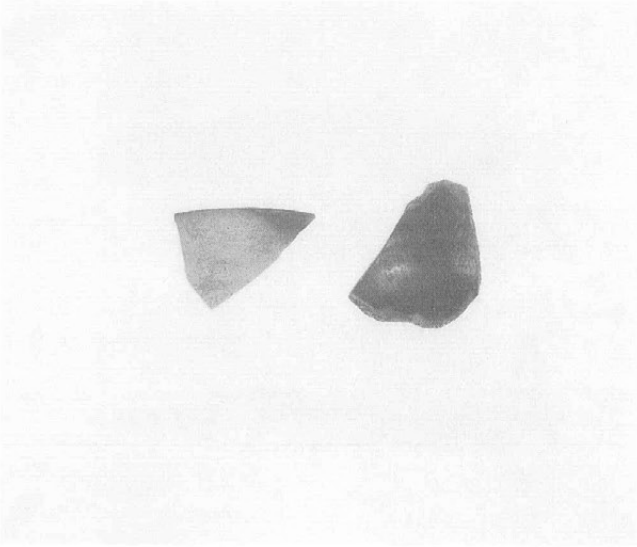
古墳時代(ミニチュア)



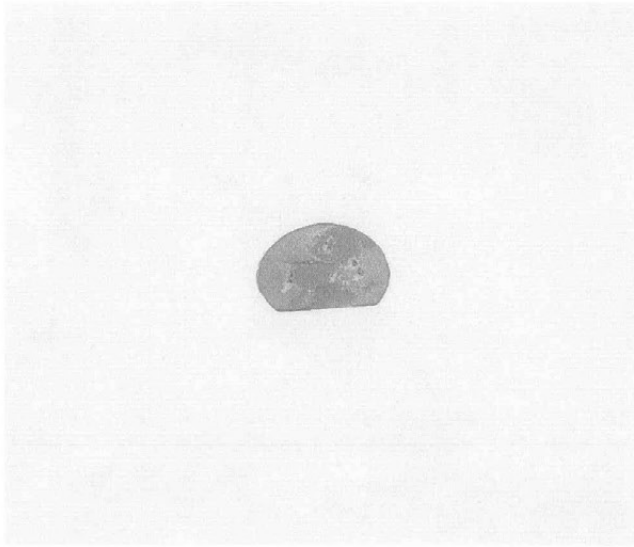
古代(須恵器)



古代(土師器)

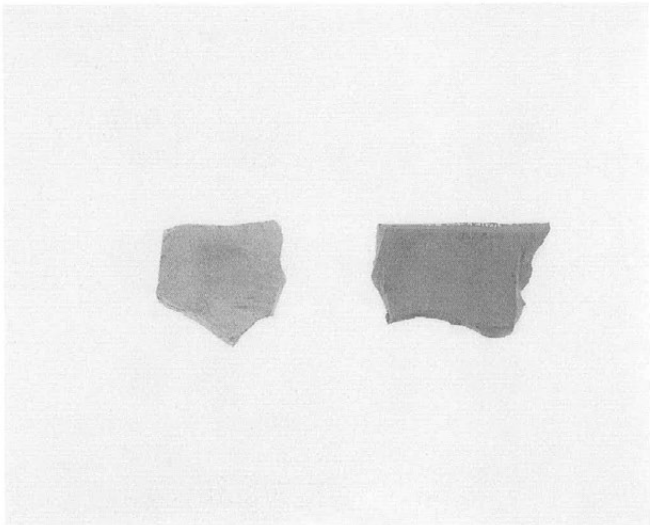


古代(黒色土器)

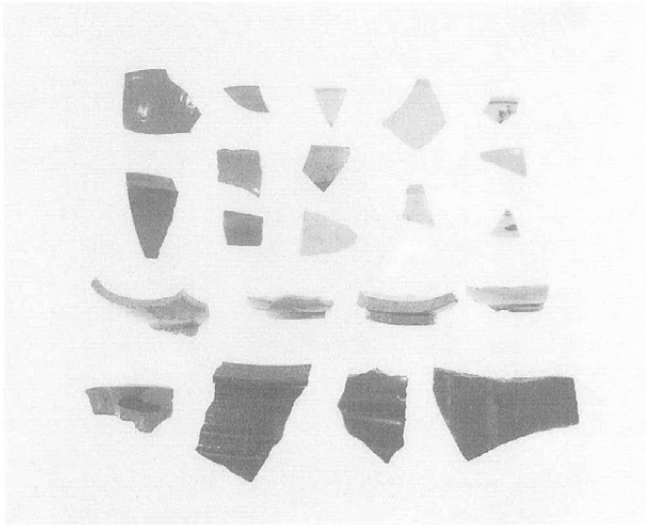


古代(石製鈴具)

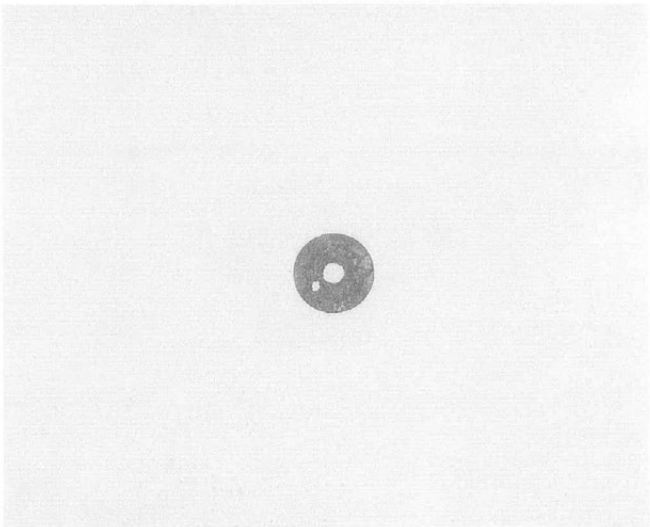
図版6



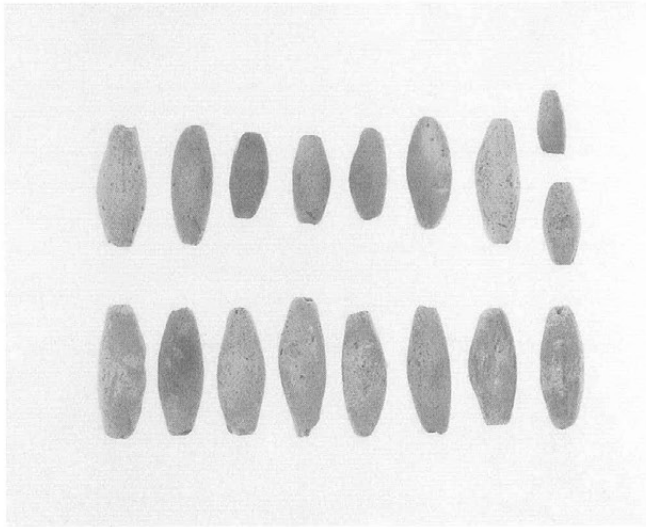
古代(転用硯)



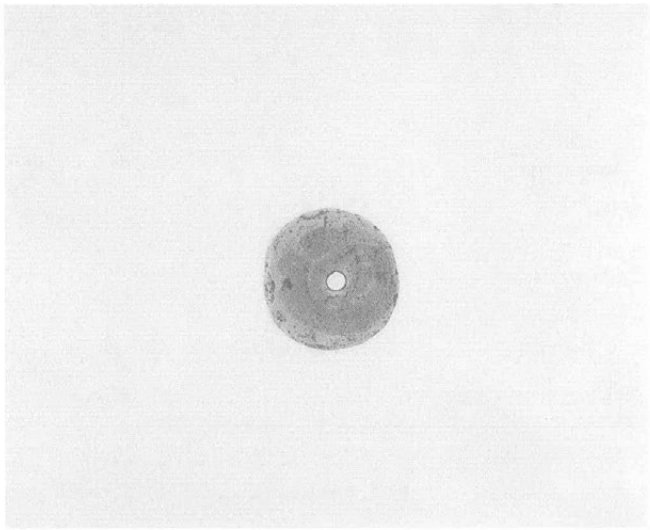
古代・中世(陶磁器)



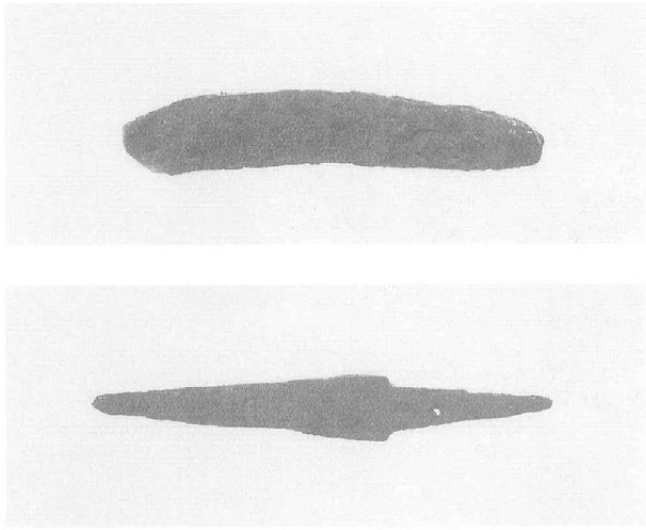
中世(銭)



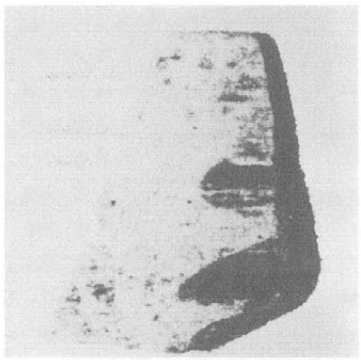
土製品(土錘)



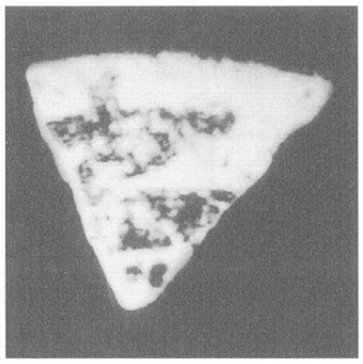
土製品(紡錘車)



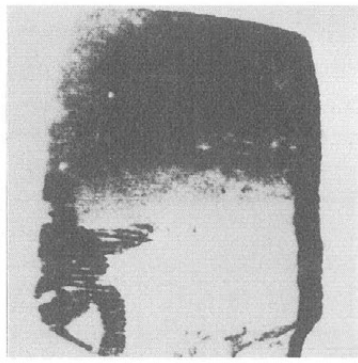
鉄製品(鎌・刀子)



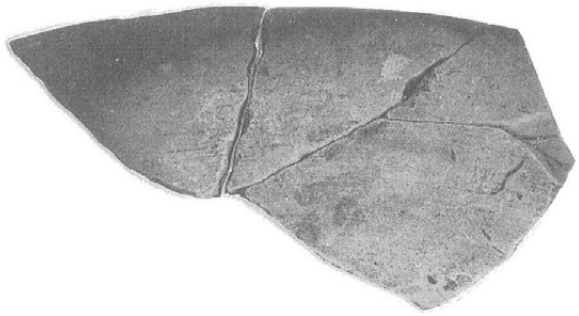
279

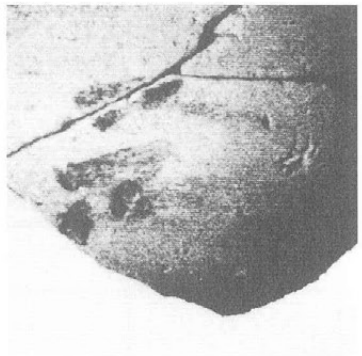


280

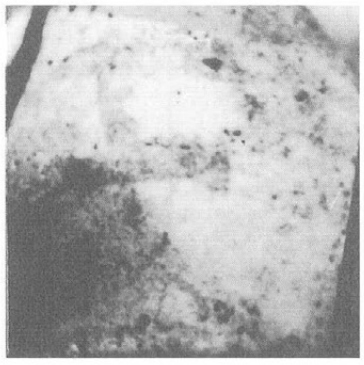


281

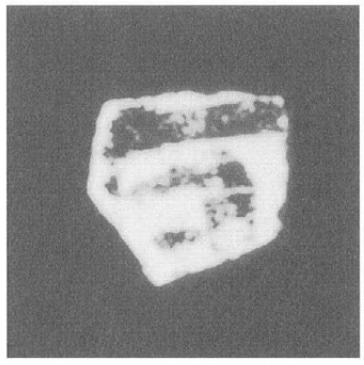




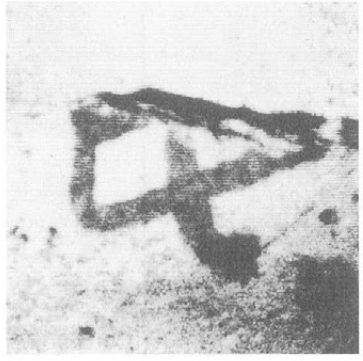
275



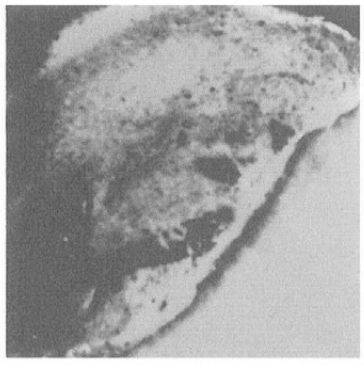
285



282

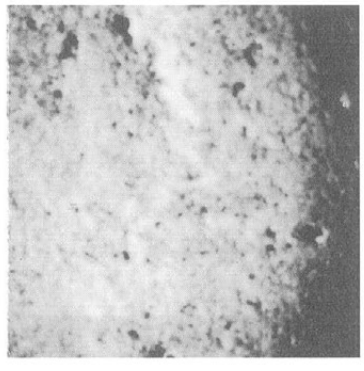


286



287

284



288

ニタ元遺跡出土墨書土器(赤外線撮影)

報 告 書 抄 録

ふりがな	にたもといせき
書　　名	ニタ元　遺跡
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第２９集
編著者名	重永卓爾・下田代清海
編集機関	都城市教育委員会
所在地	〒885　宮崎県都城市姫城町6街区21号
発行年月日	1994年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	位置		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		北　緯	東　経			
もといせき ニタ元遺跡	みやこのじょうし 都城市 しびたちょう 志比田町3741 ばんち　ほか 番地17他	31°　43′　40″ 附近	131°　3′　17″ 附近	1993年７月12日～10月18日	4,671	大規模小売店舗造成

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	縄文 弥生 古墳 平安 中世 近世	竪穴状遺構　５基 掘立柱建物　４棟 溝状遺構　５条 道路状遺構　11条 土坑・石組遺構・柵列・集石	縄文土器　弥生土器　土師器　須恵器　黒色土器　墨書土器　石鍔（丸鞆）　転用硯　土錘　金属製品　国産陶磁器　舶載陶磁器　越州窯系青磁　石器	・市内２例目となる石鍔（丸鞆）の出土 ・市内最大級の大溝

都城市文化財調査報告書　第29集

ニタ元遺跡発掘調査報告書

発行日　1994年（平成６年）３月31日
発　行　宮崎県都城市教育委員会
印　刷　　（株）　文　昌　堂

Report on the Investigations of Cultural Properties in Miyakonojo City volume. 29

Nitamoto Site

The Boards of Education of Miyakonojo City

March 1994

Japan